
魔導神話 インフィニティ ドライブ ~ 第三部 プリンセスセイラ ~

卯月昇華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導神話 インフィニティ ドライブ 第三部 プリンセス
セイラ

【Nコード】

N8089D

【作者名】

卯月昇華

【あらすじ】

不死鳥王を倒し地上を守る事が出来た。だがフォルテとフランジヤーを失い羽竜達は哀しみに暮れる。ヴァルゼ・アークの前にはトランスミグレーション、イグジスト、ロストソウルの創造主ダイダロスが現れた。千年の時を超えヴァルゼ・アーク達同様に自身の剣、ファイナルゼロに記憶と力を宿し不死鳥族ライト・ハンドに託す事で復活したという。無限を操る力、インフィニティ・ドライブを手に入れる為に必要なオノリウスの魔導書を巡る戦いは熾烈を極め、

羽竜達を更なる戦いの舞台へと誘う。

序章（前書き）

いつも読んで下さっている方々、どうもありがとうございます。
なんとか第三部作まで辿り着く事が出来ました。これもみなさんのおかげです。ここよりインフィニティ・ドライブの本番が始まります。最後まで応援よろしくお願いします。

序章

運命は変えられないのか？

答えはYES。人は生まれた時からその生命を全うするまで決められた道を歩む事になる。

ただキャパシティはかなり広い。決められた道とはいえ、選択肢は多い。

だから人生の壁にぶつかりどうしようもなく喘ぐハメになる人はごく僅かだ。

ましてや運命が決まっているなどと誰が思うだろうか？

何も知らずに人生を歩んで行くとしても、何も心配する事はない。

だが、運命が決められていると知ったのならどうなるのか？

これほど絶望を感じる事はないだろう。

しかし、運命が決められていると知った時点でその者には運命を破る権利が与えられる。

それは個人に貸せられている法則を壊してしまう権利だ。

例えば、悪魔という種族を見ればどうあがいても天使に勝つ事は不可能だった。

それは悪魔。天使にはならないからだ。

天使には勝てない法則を破る事で悪魔の人生に制限が無くなる。

不死鳥族ルバートなら、彼が王位に即位する事はなかった。

彼は不死鳥王となつた時点で法則を破つていた。それなのに、力を求めるあまり知つてか知らずか犠牲の枢に頼つてしまった。

選択肢を謝ったのだ。

運命を破る権利を得た時、同時に死へと繋がる選択肢が増える。

だが、運命を破る為なら危険を犯す価値はある。

..... 見ているがいい。必ず運命を破ってやる。

第一章 変局

いつも陽気なレリウーリアの女達も、今日はいつになく元気がない。

理由は三つ。一つは虹原絵里の右目が奪われて失明した事。

二つ目はフラグメントを全て奪われた事。

そして三つ目は、絵里の右目とフラグメントを奪ったのがダイダロスだという事。

考えてみれば不思議な話ではない。彼の造ったロストソウルには記憶と力をそのまま宿す能力がある。

なら彼の扱うファイナルゼロに同じ能力があっても当然だ。

「総帥、ダイダロスは次に目黒羽竜達を狙うのでは？彼らはフラグメントを三つ所有していますし、万が一それまでダイダロスの手に渡ってしまったら……」

由利の心配はオノリウスの魔導書をダイダロスがに手に入れる可能性が現実味を帯びている事にある。

「……………わかっている。」

今は非常事態だ。すぐにでも羽竜達と接触してフラグメントをダイダロスから守りたい。

しかし羽竜達がすんなり自分達を信用してくれるとは限らないし、話し合いでフラグメントを手に入れる事はまず無理だろう。

「由利、焦る気持ちは俺も一緒だ。だがいい手が思いつかない。何も考えず行動すれば泥沼にはまってしまう。仮にダイダロスがフラグメントを全て集めたとしても、オノリウスの魔導書が何処にある

かまでは知らないだろう。俺達もわからないものをダイダロスが知っているはずがない。チャンスはまだある。」

「……………確かにおっしゃる通りです。ならお任せしてもよろしいんですね？」

「ああ。少し一人で考える。それより絵里はどうした？」

悪魔とはいえ女である絵里は片目を失う大怪我をしたのだ、落ち込むレベルでは済まない。

かけてやれる言葉も見つからない。ヴァルゼ・アークは自分が情けなく思えて腹が立つ。

「絵里は自室で休んでいます。しばらくは任務から外そうかと思つてます。」

任務から外すというのは、戦いが起きても参戦させないという意味だ。

レリウーリアが全員、屋敷を離れても絵里だけは残らねばならない。彼女がこれを受け入れるとは思えないが、命令として我慢してもらうつもりなのだ。

「そうだな。しばらく休養を取らせよう。」

「では私は絵里のところへ行きます。」

クールな由利もさすがに今のレリウーリアの空気は嫌いだ。

いつもはうるさいくらいなのに……………いつの間にかそんな雰囲気

が心地よく感じられていたらしい。

何かしてなければ落ち着かない自分がいる。

頭を下げ部屋を出る。

レリウーリアを結成して以来こんなに暗くなった事はなかった。とにかく賑やかで絵里とローサにあたってはしょっちゅう喧嘩をしていて苦勞が絶えない毎日だった。

それが今は皮肉にもその苦勞が愛おしい。

「変わったわね……………私も……………」

悪魔になる前の方がもっと悪魔らしかったかもしれない。これが絆というものののだろうか……………。

「絵里、入るわよ?」

絵里の部屋の前まで来てドア越しに声をかける。

返事はないが勝手にドアを開けて中に入る。

「絵里?」

昼間だというのにカーテンが閉めきつてあり中は薄暗い。

ぐるりと見回すと、ベッドに入ってうずくまる絵里がいた。

「具合……………どう?」

実に気の利かない質問だなと自分を責める。

（寝てるのかしら?）

寝ているのなら無理に起こす必要はない。そう思い部屋を出ようとする。

「……………司令……………」

むくつと起き上がり正面を向いたまま絵里は由利に話し掛ける。

「起こしちゃったかしら？」

「いいえ。起きてました……………」

やはり元気がない。当たり前だが。

「そのままでもいいから聞いて。総帥とも話し合って、しばらく貴女には休養を取ってもらう事にしたわ。」

「……………用済み……………という事ですか？」

気持ちが落ち込んでいるせいか、前向きな絵里の言葉とは思えない。

「そうじゃないの。ここのところ忙しかったし、貴女の傷が癒えるまでは私達で任務を熟そうと思っているの。」

「フン……………はつきりおっしゃったらいいいじゃないですか、フラグメントをまんまと取られた部下などいないって。」

「何を言ってるの？そんな事思ってないわ。」

「嘘！役立たずだと思ってるのよ！！みんな私なんていなくなればいいって！！消えてしまえばいいって！！そう思ってるんですよ！！」

「絵里……………」

右目を失った事で自棄になっているのではないようだ。
どうやらヴァルゼ・アークから預かったフラグメントを奪われた事がショックらしい。

「殺せばいいじゃない！！邪魔なら殺せばいい！！！」

パンッ！！！！

無意識だった。由利の手の平が絵里の頬をぶっていた。

「……………誰も貴女の事邪魔だなんて思ってたないわ。」

「……………うっ……………」

布団を強く握り涙を堪えようとするが、涙は重いらしくポタポタと絵里の手の甲に落ちる。

「どっした！？」

「総帥……………みんな……………」

由利が振り向くと絵里の声が聞こえたのだろっ、ヴァルゼ・アークが勢いよくドアを開けて部屋に入ってきた。
そして他の仲間達も心配そうにこちらの様子を伺っている。

「絵里……………大丈夫か？」

泣き崩れている絵里の肩をヴァルゼ・アークが優しく抱きしめる。

「総帥……………すみません……………フラグメントを……………私のせいで……………」

「バカ、そんな事を気にしていたのか？言っただろう？奪われたものは奪い返せばいい。それだけの事だ。」

「でも……………私は任務から外されてしまっただけでしょ？」

「外すと言ってもお前の傷が癒えるまでだ。俺達は常人じゃないからすぐ治癒する。それまでゆっくり休め。」

そつと絵里を寝かし、頭を軽く撫でて額にキスをする。
目で由利に合図を出すと、全員が部屋を出る。

「すみません、私が気が利かないばかりに絵里を興奮させてしまっ……………。ダメですね、私……………司令官としても年上としても、なんだか中途半端で……………」

申し訳なさそうに由利が頭を下げる。

「気にするな。みんな得意不得意はある。足りないところ互いにカバーし合うからこそ仲間なんじゃないか。そうだろ？みんな。」

ヴァルゼ・アークの問いに全員笑顔で頷く。

「司令、絵里さんもそのうちいつもの絵里さんに戻りますよ！だから気にしないで！」

「ローサ……………」

ヴァルゼ・アークが由利の肩に手をかけてウインクする。
堅物な由利が考え過ぎないように配慮したのだ。

「ありがとうございます。私もみんなに支えられているんですね。
みんなも、ありがとう。」

いつもクールな由利が微笑む。

「さ、みんな部屋に戻れ。次の任務までお前達も……………」

ヴァルゼ・アークが話してる途中で、窓ガラスが割れる音がした。

「まさか……………!!」

もちろん音がしたのは絵里の部屋からだ。

ヴァルゼ・アークが叫ぶと同時に慌てて部屋に入る。
するとそこに絵里がいない。

閉じられていたカーテンがひらひらと風に踊らされているだけだ。

「絵里……………!?!」

由利が割れた窓まで駆け足で急ぐ。

「総帥!」

ローサがヴァルゼ・アークに何か伝えようとするが、何を言いたいのかはわかっている。

「全員絵里を追え!おそらく羽竜のところへ向かったはずだ!」

頷きもせず全員割れた窓から外へ飛び出し絵里を追う。

「由利、俺達も行くぞ！」

「はい！」

絵里の考えてる事はわかる。

奪われたフラグメントを取り返すにもダイダロスの居所はわからない。

だから羽竜達の持っているフラグメントを奪う気なのだろう。

自分を見失っている仲間を止める為、レリウーリアが動く。

（お願い、早まらないで！）

チクリチクリと胸が痛む。

由利の不安は的中する事となる。

第二章 刀匠ダイダロス

不死鳥族との戦いが終わり数日が経った。

これからどうしたらいいのか、羽竜達は迷っていた。

四つのフラグメントは、まだヴァルゼ・アーク達が持っていると思っ
ている。

それを手に入れなければオノリウスの魔導書には辿り着けない。
かといってヴァルゼ・アークに戦いを挑んでも勝てるかどうかかわ
らない。

ルバートを倒せたのは運が味方したのもあった。

犠牲の柩の副作用で弱まったところを突いたに過ぎない。

でも他にやる事がない。こんな事をずっと地上に戻って来てか
ら考えっぱなしなのだ。

いい加減頭も疲れて来る。

「どうしたらいいんだ………」

羽竜はベッドに横たわり悩み続けている。

学校へ行く気も起きない。

戦いは終わった。フォルテとフランジャーの犠牲はあったが、一安
心してもいいのに出来ない。

加えて嫌な予感も払拭出来ない。

何かが胸につかえている。吐き出したくても吐き出せないのだ。

「くそっ！イラつくぜ！」

起き上がり様に枕を壁に投げ付ける。

「何をそんなにイラついている？」

「レジェンダ……………」

枕を投げ付けたところから突然現れたので、苛立ちが一瞬どこかへ飛んでしまった。

「いたのか。」

「羽竜、一人で抱え込んで解決しないぞ？」

「……………わーってるよ。でも何を悩んでるのか自分でもわかんねーんだよ。」

「そうか。なら何を悩んでるのかわかったら教えてくれ。」

全くもって不思議な『生き物』だ。肉体があつた頃はどんな顔をしていたのか……………きつとガリ勉タイプだったんじゃないかと勝手に想像する。

「……………なあ、そういえばフラグメントを全部集めたとして、魔導書って何処に封印されてるんだ？」

ずっと疑問に思っていた事を不意に思い出してレジェンダに聞いてみる。

「……………。」

「おいおい、まただんまりかよ？都合悪くなると黙り込むのやめろよ。余計ストレス溜まるじゃねーか。」

「……………残念だが、魔導書の封印されてる場所は私にもわからない。」

「はあ？何を言っただ？お前魔導書の番人なんだろう？鍵だけ持っ
ても肝心のお宝が何処にあるかわからなかったら意味ねーじゃん
か。」

「確かに私は魔導書の番人の務めをオノリウス様から授かったが、
魔導書の在りかまでは聞いていない。」

信じられない。それなら一体今までの戦いはなんだったのか？

番人がわからないのなら誰がわかるというのか？
羽竜を悩ませるネタがまた一つ増えた。

「オノリウスって奴が言うのを忘れたのかよ？だとしたらとんだイ
カサマ野郎だな。」

「そういえば、私が魔導書の番人として生きて行けと言われた時、
意味不明な事をおっしゃっていたな。」

「意味不明？なんて言われたんだよ。」

「確か、『魔導書は番人と共にある』と。」

「なんだよそれ、お前が持っているって事じゃねーか。」

「だから意味不明だと言っただ。私はオノリウス様から羽竜にや
ったトランスミグレーションと、蕾斗にやった指輪しか受け取っ
ておらん。魔導書など触れた事すらない。」

戦いは終わっても何も進展していない。

変わったのは今までいた友人がいなくなった事だけ。

水城あさみが死に、フォルテとフランジャーが死んだ。

なのにこれからの事すら見えて来ない有様だ。

「本当に存在すんのかよ、魔導書つて。だいたい魔導書にインフィニティ・ドライブの事が書かれてる保証はないんだろ？」

「そんな事はない。オノリウス様がそうおっしゃっていたのだ、間違いはない。」

偉い信用の仕方だ。

「でもよ……………」

羽竜が立ち上がろうとした瞬間、眩暈を起こしふらつく。

「羽竜！！」

レジェンダが叫ぶ……………が、眩暈を起こしたわけではないらしい。それはすぐにわかった。

部屋が上下逆さまになっているのだ。

「なんだよ……………これ……………」

「お気に召さなかったようだね。」

天井……………いや今は床と呼ぶべきか、下から右目を眼帯で隠した薄紫の髪のが現れた。

「だ、誰だテメー！」

ただ者でない事は明白だ。

レジェンダがトランスミグレーションを羽竜に渡し戦闘に備える。

「フフ……トランスミグレーション……私にとって最高の剣だ。
トランスミグレーション以上の武器を造る事はもう出来ないのだからな。」

「貴様………何者！？」

トランスミグレーションの事を知っている。

聞き間違っただけならばトランスミグレーションを造ったような事を言っていた。

何かがレジェンダに警告する。

「トランスミグレーションを所有しているところを見ると、ジオル
ジュ・シャリアンに間違いはないようですね。」

「…………コイツ…………不死鳥族だぜ？知り合いなのか？レジェンダ。」

漂ってくる熱を帯びたオーラから不死鳥族である事は間違いない。

「トランスミグレーションを造ったような事をほざいていたが、トランスミグレーションを造った人物はもうこの世にいない。名を名乗れ！」

「ハハハ！そう熱くならないで下さい。いいでしょう、あまり時間もありませんから。私は不死鳥族ライト・ハンド。そしてもう一つ

の名は……もうこの世には『いない』トランスミグレーションの創造主、ダイダロスです。」

「なんだとっ!？」

「ダイダロス……だつて？」

レジェンダと羽竜の驚きにギャップはあるものの、それは本人を知っているレジェンダとレジェンダの話でしか聞いた事のない羽竜との差だ。

「久しぶりですね。ええ、実に懐かしい。まだ若い貴方しか知りませんでしたから、その姿は違和感がありますけどね。」

千年前、天使と悪魔の戦いにイグジストとロストソウルを加えた事で手を貸し、地上を守ろうとしたオノリウスにトランスミグレーションを造った男……ダイダロス。

角度を変えて見れば、この男が戦いをおさめたように見えるし、また別の角度から見れば千年続く戦いを起こした張本人とも見れる。

「トランスミグレーションには特別な思い入れがありますからね……その使い手には興味をそそられますよ。」

また新たな戦いが幕を開ける……………

第三章 封印の解ける日

「そんなに奇っ怪な顔をしなくてもいいではありませんか。」

上下逆さまの空間で予想外の人物が現れれば奇っ怪な顔にもなる。

「ダイダロス……………何故お前がここにいる？」

「何故？なら貴方は何故この時代に存在しているのですか？ジョルジュ。」

「……………聞くだけ野暮だったか。」

「フフ……………そういう事です。」

ダイダロスが何の為に復活したかなどわかりきった事。
全てはインフィニティ・ドライブの為に復活したのだ。

「チツ……………また戦いかよ。」

『また』と言いながら心なしが胸が熱くなる。

ごまかそうとしているが、血が戦場を求める微妙な気持ちの温度差に迷いが生じる。

「羽竜……………でしたね？」

「だったらなんだ？」

「君の持っているフラグメント、渡してもらいますよ。」

「やっぱりそう来たか！まさかはいどうぞ、なんて言うと思ってるんじゃない……ねーだろーなっ！！」

オーラ全開でダイダロスにぶつかる。

だが……力の差は大きかった。

手元にある技をどんなに尽くしてもトランスミグレーションが反応しないのだ。

これではただ重いだけの飾りに過ぎない。

「なんでだ！？トランスミグレーション！！？なんで応えてくれないんだ！？」

「ハハハ。何か忘れてませんか？トランスミグレーションは私が創造したのです。創造主の前ではトランスミグレーションも可愛い赤子のようなもの。つまり役に立たないのですよ。」

「そんな……！？」

「ま、今はまだ戦う時ではありません。焦らず、ゆつくりと行きましょう。」

トランスミグレーションは羽竜にとっては戦いのパートナー。

自分の想いを力に変え敵を討ってくれる。

信じたくない。何度も力を込め念じる。

「くそっ！なんでだ！！トランスミグレーション！！？」

「無駄ですよ。それより、フラグメントを頂きます。」

「どわっ！！？」

ダイダロスの衝撃波で吹っ飛ばされる。その拍子にフラグメントが零れ落ちる。

ニヤリと笑い落ちる三つのフラグメントを引き寄せ、その手に握る。

「フフフ……ハハハ……フハハハハハハハッ！！！揃った……揃ったぞ！！フラグメントが全て私の元で揃った！！！見よ！！この美しい雫達を！！！」

羽竜が落としたフラグメントと共にバルムングから奪ったフラグメント、そしてヴァルゼ・アークと羽竜達が見つけれなかったもう一つのフラグメント……合計八つのフラグメントが宙に浮いている。

「なんと！フラグメントが……全て……！！？」

レジェンダでさえ八つ揃ったところは初めて目にする。

そしてフラグメントは共鳴を始め、独特の桃色の光を一層強く放ち一つになる。

「おお……これは……！！」

ダイダロスの前でフラグメントはマスターレジェンドとなる。その形は意外にもただの丸い球。手の平程度の大きさで変わらないのは桃色の光を放っている事だけだ。

「これが……マスターレジェンド……魔導書の封印を解く鍵……？」

ダイダロスがマスターレジェンドをそつと手に取ってまじまじと見回す。

「レジェンダー!!」

成す術もない羽竜はレジェンダを頼るしかない。
しかし今度はレジェンダが羽竜の声に反応しない。

「レジェンダ？おい、聞いてんのかよっ!？」

「ぐ……………なんだ……………この凄まじいパワーは……………ぐおっ……………ぐ……………ぐわあああっ!!!!!!!!!!」

「レジェンダ……………?」

突如叫び声を上げ苦しみ出すレジェンダ。
同時にマスターレジェンドがまた強く光を放ち、ダイダロスの手を離れレジェンダのマントの中へ入って行く。

「一体……………何が始まるというのだ?」

ダイダロスも余裕を失い、胸が高鳴る。

レジェンダの存在を形どったマントが、マスターレジェンドの熱で灰になる。

すると辺りが何度か激しくフラッシュして、レジェンダがいた場所に小さな銀河が現れた。

「レジェンダが……………消えた?」

「いや……違う。なるほど、そうか……ジオルジュ自身が魔導書の封印だったのか！」

羽竜には何がかかわらないが、ダイダロスには理解出来たらしい。

「フフ……オノリウスも味な事を……。」

小さな銀河にダイダロスが近づく。

「待て！！ダイダロス！！」

無我夢中で眠ってしまったトランスミグレーションでダイダロスを攻撃する。

「静かにしろ！！」

突進してくる羽竜にもう一度衝撃波を喰らわせる。

「ぐあっ！！」

上下逆さまの空間は二次元になって捻れている為に狭いのか広いのかあやふやで、まるで水中にいる感覚になる。

「羽竜、これは奇跡です。オノリウスは魔導書をジオルジュの『中』に封印したのです。そして……この銀河こそ魔導書への道……タイムゲート！」

「タイム……ゲート……？」

「そう。これは時間を行き来するゲート。ようするに、オノリウスは魔導書を現在まで存在させず、おそらくは千年前に存在させたままにした。そういう封印を施したのです。ジョルジュはその媒介として存在して来たに他ならない。素晴らしい！！時間移動が可能になるとは！！」

「それは面白そうじゃない？」

「…………バルムング…………どうやってこの空間に？」

ダイダロスの顔が一瞬歪みバルムングを睨みつける。

「悪魔を甘く見ないで。仮にも私は創造神。お前程度が創った仮想空間などたやすく破れるわ！」

「困った女性だ。せつかくの感動もままならない。」

「最後のフラグメント、まさかあんたが持っていたなんてね。でも調度いいわ、魔導書への道ごとヴァルゼ・アーク様にプレゼント出来るもの。ついでに私の右目を奪ったお返しもしてあげるわ。」

ロストソウル・九十九折の爪を具現してダイダロスに仕掛ける。

「愚かな……………」

片目を失ったバルムングは遠近感が狂っている的確な攻撃が出来ない。

ダイダロスの気配を頼りに動こうとしても上手くいかない。

「おのれッ…………ダイダロス！！」

「雑魚に用はないっ!!」

ファイナルゼロがバルムングの脇腹に刺さる。

「うっ……………」

あっという間に空間に血が広がる。

「悪魔が……………一撃……………」

羽竜も戦おうとするが衝撃波を二度も受け身体が痺れて思うように動かない。

「少し眠っていなさい!」

三度目の衝撃波は肉体を切り裂くような痛みを伴い、羽竜は気を失う。

「お前達はすぐには殺しません。私は過去へ行きインフィニティ・ドライブを手に入れる。その時絶望に打ちひがれるお前達を見たいですからね。」

羽竜とバルムングに捨て台詞を吐き、銀河に触れる。

「さあ……………誘え!私を魔導書の元へ!!インフィニティ・ドライブの元へ!!」

触れた指先からダイダロスの身体が透き通り、銀河へ吸い込まれて行った。

「……………クッ……………お前だけ……………行かせてなるものか……………」

ダイダロスが造った仮想空間が現実空間へ姿を戻す。
ふらふらと脇腹を抑えバルムングも銀河へ吸い込まれて行った。

行き先は過去。千年前。

第四章 過去へ

「羽竜君！しっかりして！」

身体を揺さ振られ瞼を開けるとそこに蕾斗とあかねがいた。

「ら…蕾斗……………吉澤……………」

「よかった……………意識あつて……………」

泣き虫なあかねは羽竜の無事を確認すると啜り泣く。

「ダ……………ダイダロスは……………」

「ダイダロス？」

羽竜が口にした名前が聞き慣れない名前だったので、蕾斗は首を傾げる。

「トランスミグレーションを造った野郎だよ。」

なんとか痛みには堪えながら起き上がってベッドに腰掛ける。

「ああ…確かそんな名前だったね。でもそいつがどうかしたの？」

ツーカーで通る内容の話じゃない。

面倒に思いながらも蕾斗とあかねにわかるように説明する。

「……………生きてたんだよ。」

「「えっ!？」」

二人が羽竜の顔を見つめて何を言ってるのかちゃんと聞こうとする。ひよっとして頭でも打っておかしくなったんじゃないかとさえ思っている始末だ。

「正確には悪魔と同じように剣に記憶と力を宿して、不死鳥族の奴に与えたみたいだ。よくはわからないけど……………」

「羽竜君が気絶してたところを見ると、相当の実力の持ち主みたいだね。」

「ああ。トランスミグレーションが役に立たないからな。」

蕾斗の不安を更に煽^{あお}ってやる。

わざとではないにしても、このシチュエーションでは悪意にも取れる。

まんまと蕾斗の不安は煽られた。

「どういう事……………?」

「トランスミグレーションを造ったのはダイダロスだ。だからそのダイダロスの前ではトランスミグレーションは機能しないらしい。現に、いつもなら重さを感じないほど軽いのに、今日はただ重いだけだった。俺の呼び掛けにも応えてくれなかったしな。」

無造作に転がるトランスミグレーションを三人はただ黙って見つめる。

「ねえ、レジェンダはどうしたの？それに天井の血……羽竜君はそんなに出血してないよね？」

あかねに言われるまで気付かなかったが、白い天井が一部真っ赤に染まっている。

「あれはバルムングとかいう悪魔のだよ。」

「悪魔？千明さん達が来たの？」

「いや、バルムングって奴一人だった。フラグメントを悪魔からダイダロスが奪ったらしい。それと、俺のも……」

自分が持っていたフラグメントが奪われた事を申し訳なさそうに伝える。

蕾斗もあかねも想像はついていたし、羽竜が持っていて奪われたのなら仕方がない。

だから責める気はない。

「じゃあダイダロスが全部集めたんだ……」

蕾斗も事態が最悪の展開になっていると言わんばかりの口調で言った。

悪魔と羽竜から奪っても七つ。

でも羽竜のうなだれ方を見るとダイダロスが残り一個を所有していたのだとわかった。

そしてそれが意味する事も。

「で、レジェンダは？」

姿の见えないレジェンダをあかねが案じる。

いつも神出鬼没な存在だから案じるような事はないのだが、虫の知らせとでも言おうかあかねに何かが信号を送っている。

「そこにある銀河がレジェンダだよ。」

目で見る先に小さな銀河がある。とても綺麗でゆっくりと息をするように動いている。

「これが………？」

あかねは恐る恐る近づいてよく見てみる。

「フラグメントは八つ揃ってマスターレジェンドになったんだ。でも魔導書の封印してある場所が………過去らしいんだ。」

「なんだかややこしい話になって来たね。」

不謹慎にも蕾斗に好奇心が芽生える。

この手の話は蕾斗の好物だ。

そわそわしないわけがない。

「ダイダロスが言ってた事だから俺にはよく理解出来ないけど、オノリウスは魔導書を『場所』に封印したんじゃないかって『時間』に封印したらしい。『場所』なら封印してある場所に行けば済む話だろ？ そうじゃなくて、『過去』に置いてあるまんまとかなんとかでとにかくその銀河が過去へ行くゲートになってるみたいなんだよ。」

説明しているうちにだんだん頭が混乱してきてこれ以上は上手く説明出来ない。

「じゃあ……レジェンダは死んだの？」

「わからない。」

あかねの不安を振り払ってやる事は残念だけど不可能だ。

羽竜自身レジェンダがゲートだったという事しかわからないし、死んだのかと聞かれても正直何もわからない。

「……………どうするの？」

奮斗は一言しか言わないが、説得するつもりはない。
やる事は最初から一つしかないのだから。

「行こう。本当に過去に行けるのかわからないけど、何をどうすればいいかわからないけど、ダイダロスを追うんだ。奴に魔導書を渡すわけにはいかない。その為に戦って来たんだからな。」

「でも羽竜君、もし過去へ行けたとして……………戻って来れないかもしれないんだよ？」

「吉澤、こればかりは自分自身の責任で決めてくれ。別に来なくても恨みつこなしだ。」

あかねは迷っている。

過去へ行ける保証もないし、戻って来れる保証もない。

わからない、知らない、そればかりの戦いに果たして身を預けていいものか？

「僕は行くよ。」

「蕾斗………いいのか？生きて戻って来れないかもしれないぞ？」

「今更でしょ。」

拳を握りやる気を示して羽竜を安心させる。

「わかった。吉澤は？」

「……………行く。」

ボソツと呟く。

「無理しなくていいんだぜ？」

「だって！羽竜君と蕾斗君だけ行かせるわけにはいかないわよ。私だって……………怖いけど、ダイダロスが魔導書を手にすればもっと怖い思いを思うし……………」

「よし！決まりだな！どうなるか誰にもわからないけど、行こう！過去へ！！」

「うん！行けばなんとかなるよ！」

「…大丈夫かなあ……………」

羽竜と蕾斗はさすが男子の子というべきか、覚悟さえ決まってしまう後は野となれ山となれになる。

三人は同時に銀河に手を触れる。

透き通っていく自分達の身体を最後まで見届け、そして……………過

去へ行く。

「間違いなく絵里ちゃんのね。」

戸川純は羽竜の部屋の天井に残る血液から絵里のオーラを感じ取る。

「どこまで世話を焼かせる気なの……………」

妃山千明は絵里を案じるあまりつい苛立ってしまう。

「羽竜の話を聞いてたな？ダイダロスはマスターレジェンドを使って魔導書を手に入れる為過去へ行ったらしい。ここに絵里がいないのは、ダイダロスを追って過去へ行っただろう。」

十畳もある羽竜の部屋も、大人が十三人も集まれば狭苦しい。

ヴァルゼ・アークが部下に状況説明をする。

「お願い……絵里姉様、私達が行くまで無事でいて……」

新井結衣が手を組んで絵里の無事を願う。

「でも一体どういう理屈で魔導書は過去に置いてあるままなのでしょうか？目黒羽竜の説明ではイマイチよくわかりませんでした。」

知的探求心に負け、仕組みを解きたがっているのは岩瀬那奈。
ヴァルゼ・アークに答えを求める。

「レジェンダは魔導書の番人として肉体が朽ちても、存在まで消える事がないように魔法をかけられていた。だが、レジェンダ自身は魔導書の在りかは知らなかったはずだ。」

「……………」と、言いますと？」

「魔導書をどこかの『場所』に隠してしまえば、フラグメントを集めなくても封印が破られる可能性は十分にあった。そしてその『場所』はレジェンダを探せばバレてしまう。魔導書を求める者にすればレジェンダの気配を探して当てる事など造作ない。それらを防ぐ手段として、おそらくは千年前という『時間』……………この場合はレジェンダの『記憶』と言った方がいいな、そこに魔導の力で封印したんだろう。」

「難しい理屈ですね……………」

「つまりこういう事だ、一般に言われるようなタイムスリップは存在しないんだよ。時間をさかのぼるなんて妙技は有り得ない。なら

過去へ行くという事はどういう事か？それは記憶の中へ入る事だ。未来の記憶なんてものはない。記憶は全て過去のもの。そこへ行く事こそがタイムスリップの本質なんだよ。オノリウスはそれを知っていた。だからレジェンダの記憶の中に魔導書を封印したんだ。守っている番人が守っている物の在りかを知らず、それが番人自身の中に在るというのだから……………オノリウスめ……………やってくれたな。」

「記憶と時間は関係があるんでしょうか？」

「これは俺の推測だが、記憶という抽象的なものに魔導をかけて時空間という、より具体性のあるものにしたんじゃないか？だから肉体が朽ちてもレジェンダは存在出来たんだ。彼自身が過去の時間なのだからな。」

「学会で発表したらノーベル賞ものですね。」

那奈にもなんとなく理解出来た。

ヴァルゼ・アークの推測が正しいかどうかは関係ない。

それで説明がついてしまえばそれが答えなのだ。

実際のところはオノリウスにしかわからない事なのだし。

「さあ、お喋りは終わりだ。俺達も行こう……………過去へ。」

「「はいっ！！」」

インフィニティ・ドライブはすぐそこに在る。

ダイダロスよりも先に手に入れなければ全てが水の泡と化してしまう。それだけは防がなければ。もちろん絵里の事も考えている。

十二人の返事を聞くとヴァルゼ・アークが銀河に触れる。

千年前……そこはかつて『自分達』が生きていた場所。

第五章 メグ・ベルウッド

「遠いなあ……………」

旅に出てからかれこれ4、5日経つ。

目的地は隣国の城。

士官試験を受ける為だ。

自国の王室は腐敗しきっていて、攻め込まれでもしたら終わりだろう。

そんなところに『就職』する奴はおめでたい輩しかない。

悪いけど自分が変えてやろうなんて気持ちは微塵もない。

幸い家族もいないし、自由の身ですから。

「はあ……………町すら見えてこないなんて。お腹空いたんだけど……………」

ぶつぶつ独り言を口にしながら旅路を急ぐのはメグ・ベルウッド。

まだ17歳の女の子。

戦士希望だ。

腕に自信はある。なんでも先祖には名のある騎士もいたらしい。きっとその血をまともに受け継いでいるに違いないと信じて止まない。

「あと3日で着くかなあ……………着かなかったらどうしょ……………」

着いてもらわなければ困る。

（もし間に合わなかったらこれから先お金に困るし……………最悪な時の事考えておかなきゃ。）

まだ何も始まったもないのにあれこれ深く考えてしまうのは、性分

だから仕方がない。

今、世の中は右を見ても左を見ても戦争ばかりだ。

その原因は、なんでも願いが叶う魔導書だそうだ。

そんなものが実在するかどうかは胡散臭い^{うさんくさい}が、火のないところに煙は立たない。

在るか無いかわからないものの為にわざわざ戦争はしないだろう。

メグの興味の範囲ではないにしても、誰が何の為にそんな物を書いたのかは気になるところだ。

「ん？あれって………！」

ぼんやり歩いていると少女が一人、熊に襲われている。

「グガオオオオッ……！」

ちょっと他では見られないほど大きい体をしている。

「あつちに行つてよ……！しっ！しっ！」

野良犬でも追い払うような仕草で熊を拒絶する。

そんな事はお構いなしに、少女に爪を立てた腕を振り下ろす。

「危ない……！」

メグが走り出すが距離がある。

このままでは少女が殺されてしまう。

愛剣を抜き、投げにかかろうとした時、メグは目を疑った。

魔法か何かあの巨体を吹き飛ばしたのだ。

これには熊さんもびっくりしたらしく、一目散に逃げに行った。

「ふう……………危なかった……………」

見た事もない服装の少女が汗を拭い、安心したのか地べたに座り込む。

「あつ……………！」

少女はメグに気付くと座ったばかりの地面から立ち上がってメグの方へ歩く。

「ハ、ハロー……………マ、マ、マイ　ネーム　イズ……………」

「貴女すごいじゃない！あの巨大熊を追いついて！私、魔法って始めて見たわ！」

「に、日本語？っていうか言葉……………わかるんですけど……………」

「何言ってるの？」

少女からすればメグに日本語は通じないと思ったらしい。

「よかったぁ……………私英語は得意だけど会話した事なくて……………」

「面白い人ね。私はメグ・ベルウッド、一応戦士よ。メグって呼んで。これから士官する予定なんだけど……………実技試験は自信があるから決まったようなもんだけどね。」

エヘンと言わんばかりに腰に手を当て反り返る。

「あ、私は吉澤あかねです。あかねでいいです。」

「あかねちゃんね！にしても……貴女この辺の人じゃないでしょ？
服装が見慣れないもの。民族衣装？さっきの魔法はどうやったの？」
出会ったばかりで質問責めに合いたじろいでしょう。

「これは民族衣装とはちょっと違うけど……まあそういう見方も
出来なくはないかな。それと、あれは魔法とは少し違うの。似たよ
うなものだけだね。」

「そうなんだ。でもすごいよ！ところであかねちゃんはこんな森ん
中で何してんの？」

「うん……友達とはぐれちゃって……知らない土地で道もわから
なくて困ってたなら、熊に襲われて……」

「ふうん……なんだか大変そうね。どこに行くつもりなの？」

「どこって事はないんだけど……」

まさかタイムスリップして来たとは言えない。
言ったところで信じてもらうのは難しいだろう。

「何？行き先もないわけ？呆れた。じゃあ宛もなく旅して来たの
？」

「ま、まあそういう事になるのかな。ハハ……」

「……ねえ、だったら私と一緒に行かない？私ね、王宮に
仕えたくてこれから士官試験を受けに行くの。一人で退屈してたし、

町に行けばあかねちゃんの友達も見つかるかもよ？」

そんな簡単に羽竜と蕾斗を見つけれられるとは思わないが、でも確かに町に行けばあの二人の事だし派手な事をしていれば情報くらいは入るかもしれない。

「じゃあお願いします。」

「よっしゃ！決まりだね！」

メグから手を差し出し握手を求める。

あかねも心よく応える。

こうしてメグ・ベルウッドとあかねの旅が始まった。

悪魔の能力のおかげで、ダイダロスに受けた傷は塞がった。

痛みは多少残ってるが、戦いに差し支えるほどではない。

「さて、これからどうするか……………」

虹原絵里はタイムスリップしてから数日、辺境の村で身体を休めていた。

絵里が受け継いだバルムングの記憶にはこの時代の情報がある。それを頼りに行動するしかない。

行動と言っても、彼女はダイダロスを探している。だからやるべき事はわかつている。

ただ疑問も残る。自分の追っているダイダロスは正確にはライト・ハンドだ。

ここが実にややこしいところで、記憶を受け継ぐという事はその人物そのものと同じ事。

ならば、この時代にダイダロスが二人存在する事になる。

この時代のダイダロスに会っても仕方ない。

絵里の頭の中はごちゃごちゃだ。

ダイダロスに限らず、自分にも言える。この時代にはバルムングも存在しているのだ。

（でも私は私だし、バルムングに会っても何も関係ないのかな？）

こういう話はヴァルゼ・アークに聞くのが一番なのだが、今はそうもいかない。

（悩んでても始まらないわ。魔導書を手に入れるなら魔導書を書いた本人に会えばいい話。ダイダロスもきつとそうするだろうし。願うのはまだダイダロスがオノリウスと接触していない事だけね。）

鎧を纏いバルムングとなる。

「考えてみれば面白い話ね。過去へ来たなんて。それも千年も前に。」

虹原絵里としての感覚で言っている。

「待ってなさい、ダイダロス。貴方には返さなきゃいけない借りが腐るほどあるんだからね。」

第六章　その出会いは奇跡

森を抜けあかねとメグはようやく町に着いた。

士官試験は明日。なんとか間に合ったとメグは胸を撫で下ろした。

「全然余裕だったね。」

「うん。間に合ってよかった。」

なんと言ってもこの時代に時計はない。

旅人達の情報や太陽を基準に到着にかかる時間を予測しなければならぬのだから不便極まりない。

たまたまあかねが腕時計をしていて、メグの話からここまで到着する時間を計算出来たからこそ間に合ったのだ。

「でも便利ね、あかねちゃんが身につけてるそれ。」

腕時計の事を言っている。あかねが未来から来たなどとは知らないから、あかねも適当にごまかす事にする。

「え……ええ。ま、まあなんていうか……魔法で扱うアクセサリだから……ははは……」

「そうなんだ、魔法って便利だなあ。私も魔法使えるようになりた
いけど、無理だよなあ……才能無いし。」

ここで『才能ある』なんて言われたら軽く迷惑だ。
魔法は一切関係無いのだから。

「そ、それよりこれからどうするの？」

早く話を違う方向へ持って行きたい。

「とりあえず宿をとりましょう。城下町見物もしたいけど明日に備えて旅の疲れ癒さなきゃ。まっ、休まなくても平気なんだけどさ。」

「メグちゃんはよっぽど腕に自信があるのね。羨ましいな。」

「自信なんて無いよ。ただ自分を信じただけ。私には剣しかないから。」

腰にメグには不釣り合いな剣がぶら下がっている。

まるで愛撫でもするように優しく撫でるあたりは凄く大切なものののだと思える。

「綺麗な剣だね？名前あるの？」

「カルブリヌス。先祖に有名な騎士がいたらしく、その遺産なの。もち家宝よ。」

家宝と言っただけあって、お世辞にも豪華とは言えないものの、存在感があり、『本物』の剣だというのはあかねにもわかった。

「家宝を持ち歩いて、家族は何も言わないの？」

何気ない会話の繋ぎのつもりだったが、メグにはあまり触れてほしくない話題だったらしい。
表情が曇り始めた。

「……………うん。みんな死んじゃったんだ。」

「嘘……………やだ私ったら……………」

「気にしないで。あかねちゃんは何も悪くないよ。ただ出来れば家族の話題はパスしたくて……………」

「うん。そうだね。それより早く宿を探そ！お風呂に入り……………あっ！！！」

ここであかねが大事な事に気付く。

「どうしたの？」

口を開けたままのあかねを不思議そうに見ている。

「……………私……………お金持っていない……………」

「え……………」

むしろ持ってたらかしいだろう。無くて当たり前。

でもメグはそうは思ってた。彼女にとっては意外過ぎる問題だ。

「メグちゃん……………ごめん。」

もう頭を下げるしかない。

「ハハ……………まあ士官試験に間に合ったのはあかねちゃんのおかげだし、私がなんとかするわ。」

「ごそごそと巾着の中を見て硬貨を数える。

）……………試験、絶対に受からなきゃ……………（

羽竜は戦火の真つ只中にいた。

「うおりゃあつー！！」

赤い刃も今回はいつも通りに働いてくれる。

「くそっ……………数が多過ぎだ。一気にケリをつけちまうか……………」

過去へ間違はなく来た事は、戦っている相手を見ればわかる。
イメージ通りの西洋の騎士達が羽竜をとり囲んでいる。

「なんだこの小僧……バケモンだ……」

騎士の一人が思わずぼやく。

それもそうだろう、たった一人で既に三十人は倒している。

倒していると言っても、ちゃんとみねうちだ。

無意味に人を斬るわけにはいかない。

その辺はわきまえている。

「おねんねしてろよ？」

「この………！！」

軽口を叩かれカツとなった騎士が剣を振り回す。

「唸れ！！トランスミグレーション！！」

地面にトランスミグレーションを突き刺し力を解放する。

羽竜を囲んでいた騎士達は解放されたトランスミグレーションの力に耐えられず、吹き飛ぶ。

「見た目で人を判断すると痛い目に会って事だ。覚えとけ！」

大の男達が羽竜とトランスミグレーションの前に屈する光景は、かなり滑稽だ。

「大層な腕前だな、少年。」

金髪で涼しい目をした美形の青年が現れ羽竜に声をかけて来た。あまりの美形ぶりに羽竜が息を飲み込むほどだ。

「誰だ………あんだ？」

その堂々とした態度から周りで唸っている騎士達よりも立場が上の人間だとわかる。

そして纏うオーラもただ者じゃない。

「いきなり名を尋ねるとは………礼儀知らずな男だ。」

「ジョルジュ殿！気をつけてください、こやつ……バケモンです！」

「ジョ………ジョルジュ！？」

騎士の一人が口にした名を聞いてつい叫んでしまう。

「私を知っているようだな。いかにも、私はジョルジュ・シャリアンだ。」

知ってるも何も、羽竜の知ってるジョルジュ・シャリアンは一人しかない。

「嘘だろ………あいつこんなにカッコよかったのかよ………」

羽竜の驚きは別の次元にあるようだ。

この場合過去のレジェンダに会えた奇跡を驚くべきだろう。

「褒めてくれるのは嬉しいが、時と場合を考える事だ。私は間違はなく君より強い。」

かかって来いと言わんばかりに羽竜を挑発する。

いつもの羽竜なら簡単に乗っかるところだが、今回はそんな気は起きない。

「ま、待ってくれ！あんと戦うつもりはない！！」

ジオルジュ（レジェンダ）と戦っては意味がない。

ここは過去。一緒に来たはずの蕾斗とあかねもないし、途方に暮れず済むかもしれないのだ。いや、途方に暮れる事は無くなったのだ。

「虫のいい話を……。我が同胞をここまでしておいて戦うつもりはないだと？」

ジオルジュが羽竜を睨み据える。

羽竜がイメージしていたレジェンダとはかなり掛け離れている。もっと間の抜けた顔をしていると思っていたし、こんなに短気な性格だとは……………。

「話を聞いてくれよ！あんたら戦争中みたいだけど、俺は別に敵じゃない！信じてくれ！」

なんとかわかってもらおうと手振り身振りで話す。

「……………信じると思うのか？」

「ああ。あんなら信じてくれる！」

ジオルジュの目をしっかりと見て反らさない。

「……………フン、最初から敵だなんて思っ^{はな}てはいない。目を見ればわ

かる。」

「よかったあ〜。」

安心したせいかその場に座り込んでしまう。

「だが仲間というわけでもない。」

「えっ？」

羽竜に嫌な予感が走る。

「この少年を城まで連行しろ！―先ず撤退する！」

ジオルジュの指示で騎士達が羽竜を捕らえ連行する。

「ちょ………ちょっと待ってくれ………」

羽竜の言い分など聞く気もないらしく、ジオルジュは一人先に行く。
暴れないようにと喉元に剣を突き付けられトランスミグレーションを取り上げてしまう。

「うつ………どうなるんだよ………俺………」

こうして羽竜は千年前のレジェンダ……ジオルジュ・シャリアンと出会う事が出来た。

しかし、幸先はあまりよくない………。

第七章 私ハセイラ

「顔を上げなさい。」

そう言われゆつくり顔を上げる。

目の前には羽竜と同じくらいの歳の女が、派手なドレスを着ていささか女には似合わない玉座に座ってこちらを見ている。

「名は……？」

「……………羽竜。目黒羽竜。」

羽竜が一番嫌いなタイプの女だ。
偉そうで気が強そうな。

もちろんここが過去で、彼女の身なりを見ればさしずめお姫様だといふのは理解に苦しくない。

「ハリュウ？変わった名だな。見たところこの辺りの者ではないよ
うだが……………どこから来た？」

どこからと言われても答えられるわけがない。

あかねも同じ事を思っていたが、未来から来ましたと言ったところで信じてもらえるわけがない。

「遠いところだよ。」

「遠い？曖昧な返答は許されない。さあ、答えよ。」

「……………日本だよ。」

嘘は言っていないし、この時代にも日本は存在する。
後はお姫様が日本を知っているかどうかだが……。

「ニホン？聞いた事がない。ジョルジュ、お前は知っているか？」

「いえ、私も聞いた事はありません。」

「ジョルジュでも知らないのならそんな国は存在しないのだろう。」

「なんだと！俺が嘘言ってるってのか！？」

お姫様の口ぶりに抑えが利かなくなってしまう。

「コイツ！無礼な！！」

衛兵達が羽竜が暴れないように槍を羽竜の背中に突き立て警戒する。

「それにしても元気な人。是非我が国の騎士隊に欲しいわね。」

「姫様、また気まぐれを……」

ジョルジュが溜め息をつくと周りから失笑が漏れた。

「ジョルジュ！」

顔を赤らめてジョルジュを叱咤するが、説得力はまるでない。

「失礼しました。それより姫様がそこまで興味がおありでしたらこの羽竜とかいう者、しつけはなってますませんが強さは本物。明日の土

官試験に出してみては？」

「士官………試験？」

羽竜が反応したのはあくまでも『試験』の方だけだと言っておく。

「面白いわ。羽竜、貴方明日の士官試験に出なさい。」

「ちょっと待てよ、なんだよ士官試験って。」

「士官試験は士官試験よ。貴方の力、私も見てみたい。一瞬で我が国の騎士隊を倒してしまうなんて。」

「断る！俺は試験は嫌いだ！」

「お前の好き嫌いは聞いておらん。自分が置かれている状況をよく考えたまえ。」

ジョルジュの言葉からすると羽竜に選択の余地はないらしい。

「ジョルジュ………てめえ、いい加減にしねーとぶん殴るぞ！」

羽竜にとってジョルジュ＝レジエンダの図式は無くならない。

ジョルジュは羽竜に会うのは初めてだ。

だから紛らわしい。

分ならず屋なところは千年後あじも前も変わってないのだが、顔があるからその分憎たらしい。

「なんという汚らしい言葉。本来なら死罪にしてやるどころ………だが我が国も強い人材が欲しいのも本音。士官試験に合格しなけ

ればその身の保証はない。覚えておけ。」

それだけ言ってどこかへ行ってしまった。

（なんて嫌な奴なんだ……あれが本当にレジェンダなのか？）

羽竜の疑問に答えてくれる者は今はいない。

「羽竜、試験については後ほど使いの者をやるから聞くがよい。下がってよい。」

「ふざけんな！何様だデメー！！」

ジョルジュへのもどかしさと不慣れな世界での状況への苛立ちが爆発する。

衛兵達が必死に羽竜を羽交い締めにする。

「ほんと……汚い言葉ね。」

玉座から立ち上がり立ち去ろうとして足を止める。

「……………私はセイラ。フランシア国女王、プリンセスセイラ。」

ここは本当に千年前の地球なのか？

この世界に魔導書が封印されているのなら、魔導書は間違いなくオノリウスが持っているはず。

なのに……………何故……………何故誰もオノリウスを知らない？

情報収集をした結果、ここは紛れも無い魔導書を巡る戦乱の千年前。魔導書の存在は確からしい。

魔導書を巡って人々は争っているのだから。

なのに魔導書を書いた著者であるオノリウスは知らないという。

「こんなバカな事ってあるの？ 有名人のレベルじゃなかったはず。どうして誰もオノリウスを知らないの？」

当時オノリウスが生活していた地へバルムングは来ていた。

「……………すんなり名誉挽回ってわけにはならないわね。」

早くも手詰まる。

オノリウスだけではない。かつてのレジェンダ、ジョルジュとリスティまでいない。

知ってるはずの世界のはずが全く知らない世界になっている。

「仕方ない……………手当たり次第可能性のある事を探るか。」

魔導書を探し出さねばレリウーリアには戻れない。
彼女の意地だ。

大切なフラグメントを奪われた汚名は是が非でも返上しなければ気が済まない。

失った右目は自分への戒めには調度いい。
気持ちを切り替えて次なる策を講じる。

この世界は彼女にとっても因縁の過去。
逃げるわけにはいかない。

試験の内容は羽竜してみれば簡単な事。
だが気に入らない。

内容はこうだ。
自分の得意とする武器を使って一対一のバトルを行う。
後はトーナメント方式で優勝を争うだけ。

そして上位三名だけが士官出来る。………というものだ。

「何が名誉ある……だ。俺は士官したいわけじゃねー。」

「羽竜殿、拒めば貴方は死刑となりますよ？」

「死刑？俺は何もしてねー。騎士隊の奴らだって、怪我はしたかもしれないけど、誰ひとり殺してねーじゃねーか！」

「でも貴方はセイラ姫に暴言を吐いた。それだけで理由は十分です。とにかく明日は試験を受けてもらいます。では、ゆっくりおやすみなさい。」

使い番は丁寧なお辞儀をして牢獄を去って行く。

「なんだってんだ！チクシヨー！！」

牢屋の冊を蹴り怒りをぶつける。

「……………蕾斗、吉澤、お前達は無事なのか……………？」

牢屋の通気孔から外が見える。

心配なのは自分よりも蕾斗とあかね。

どうか生きていてほしいと拳を強く……………握りしめた。

第八章 ゲームの達人たち

オノリウスがいない…………。

この事実はいダダロスを不愉快にしていた。

ならこの時代の人間達は誰の書いた魔導書を巡って争っている？
別にオノリウスがいなくとも、魔導書さえ手に入れば問題はない。

それが本物ならば。

だが手に入れようにも、誰が所有しているのかわからないと、この
時代の人々は言う。

「有り得ないな。ここは間違はなく千年前の地球。だったらオノリ
ウスは必ずどこかにいるはず。」

ただ確率としては魔導書はオノリウスが所有している可能性の法が
高い。

（途方にくれていても仕方ないですね。『私』に会いに行ってみま
すか。時間がありませんから。）

そう、間もなく天使達による地上肅正が始まる。

そしてすぐに悪魔達も現れ地上は火と血の海に姿を変えるだろう。

千年前のダイダロスの元へミカエル、ヴァルゼ・アークがやって来
てイグジストとロストソウルの作製を依頼する。

しばらく後にオノリウスがやって来てトランスミグレーションの作
製依頼をしてくる。

こちらから探す手段が無いのなら、向こうからやって来るのを待て
ばいい。

「歴史が変わる事は無いようですし、多少の強引はまかり通るでし

よう。」

既に自分の知っている過去ではない。

歴史になかった事をして、現在が変わってしまう恐れは限りなく0。

目的は戦いじゃないのだから。

ただ僅かばかりの躊躇いはある。姿はライト・ハンドでもダイダロスの記憶は有する。

もし過去のダイダロスと会う事で記憶に混乱が生じたら……？
自我崩壊するのか？

「まあいいでしょう。魔導書なくしてインフィニティ・ドライブには辿り着けない。リスクを背負う価値は十分あるでしょう。」

これからどうなるのか全てを知り得るからこそその余裕はまだあった。

「何なんだよこの人数……」

羽竜は闘技場に集まった人の数に圧倒されていた。

「上位三名に入賞すれば士官出来る上、支度準備金が出る。それもかなりの高額。無理もないさ。」

羽竜の監視役で着いて来たジョルジュには誰もかれも金目当てにしか見えていない。

国の為なんては思っていないが見え見えだからだ。

フランス国は現在戦争中。こんな事をしている余裕はない。これは周りの国を牽制するデモンストレーションの一貫、つまり茶番だ。

戦争中であつてもこれだけの催し事が出来る余裕があるとアピールするのが一番の目的。

だから上位三名は士官してもただの衛兵程度にしかねない。

「いつの時代もみんな欲しがるのは仕事と金……ってか。」

千年後の地球も仕事を求める人々で溢れ、金を欲しがる。

何も変わらないのだと羽竜は少しがっかりする。

「……金は仕事の代価だ。ギャンブラーと呼ばれる人種でさえ仕事であるギャンブルには忠実だ。本当ならこんな一発逆転を望む輩に国を守る仕事は任せたくはない。」

変に頑なな正義感も変わってない。やっぱり羽竜の知るレジエндаだ。

「なあ、なんで戦争なんか起きてるんだ？」

試験が始まるまで魔導書の情報を少しでも仕入れたい。

「そんな事も知らないのか？お前一体どこから来たんだ？大陸全土で起きてる戦争の理由を知らないなんて……………」

どうやら常識らしい。

「あ……………ははは……………いや、俺って無知だから……………ははは……………」

「無知は罪になる。」

この野郎と拳が震えるが、愛想笑いで忍耐する。

「……………どこかの愚かな人間が魔導書なる物を書いた。そこには宇宙の理が記されていて、なんでもそれを知れば地上を支配出来る力が手に入るらしい。」

インフィニティ・ドライブの事だ。間違っているのは支配出来るのは地上ではなく宇宙という事。
まあこれはたいした問題じゃない。

「その魔導書を争ってるわけか。」

「そうだ。」

「あんた今、どこかの愚かな人間って言ったけど、魔導書を書いた奴を知ってるんだろ？」

「何をバカな……私が知るわけないだろう？ だいたい魔導書なる物が存在するかさえ怪しい。そんなに都合のいい物を書けるのなら、そいつが地上を支配すればいいじゃないか？ 在りもしない力をあたかも存在するように書き記し、世を混乱に落とし入れるなど言語道断。更に愚かなるは権力者達よ。私利私欲の為に民を苦しめるのだから。」

「セイラ………もか？」

「セイラ様はこの混乱を静める為に戦っておられるのだ。今日のイベントは父君、母君を失った事を隠す為でもある。他国に知れば同盟を生まれ一気に攻められるからな。」

「一人ぼっちなのか……セイラ……」

自分の境遇と照らし合わせる。

羽竜の両親は健在だが、一年を通して日本にいる時間は僅か。今のセイラと重なる。

「それと羽竜、セイラではなくセイラ様だ。敬称を忘れるな。」

「はいよ。それよりオノリウスを知らないのか？」

「オノリウス？ 何者だ？」

「何者って………とぼけるなよ、あんたの師匠であり魔導書を書いた奴じゃないか！」

「私の？ 全く面白い奴だ。私に師匠などいない。孤児だった私は独学で剣を学んだのだ。強いて言えば自然が師か。まさか自然が魔導

書を書いたわけではあるまい？」

「……………マジかよ。」

レジェンダから聞いていた千年前と違う。

「さあ、そろそろ試験が始まる。行くがいい。」

高台からトランペットが鳴る。

「おお、そうだ……………これを渡すのを忘れるところだった。」

そう言つて腰に下げていたトランスミグレーションを渡す。

「言つておくが、隙を見て逃げようなどとは考えるな。そんな事をすれば……………」

「心配すんなよ。逃げるつてのは嫌いだからな。どうせなら優勝してやるよ。」

自信満々にジョルジュの胸を軽く小突いて試験官のところへ駆けて行った。

「フツ……………不思議な奴だ。何故だか憎めない。長年の友人に思えてくるのは気のせいかな？」

見えなくなった羽竜に少しかりエールを送る。

「……………リスティ、君は元気でやっているのか……………？」

「懐かしいと言えば懐かしい。あまりいい思い出はないが。」

サマエルはダイダロス、羽竜、そしてヴァルゼ・アーク達の後を追って過去へ来ていた。

「フン、ダイダロスまでも復活していたなんてな。もしミカエル達が生きていたら何て言ったか。」

サマエルもまたこれから起こる事を知っている。

これほど優越に浸れる事などあるだろうか？

多少狂いがある過去である事は彼も知った。

だが全てが違うわけではない。違うのはオノリウスの事だけ。

そもそもサマエルは魔導書にもインフィニティ・ドライブにも興味はない。

彼には関係のない事。

「ククク……………面白い事になりそうだ。なあ、羽竜よ。」

サマエルの視線の先には試験を受けようとする羽竜がいた。

第九章 アクションスター

まるで祭りのような賑わいにあかねは人間が嫌になる。

メグの話ではここフランスシア国は戦争中らしい。

なのに士官試験に来ている者達は、支度準備金の話ばかりで盛り上がっている。

（人間なんてお粗末な生き物ね……）

自分達が命を賭けて戦う事は果たして正しいのだろうか？

戦いが始まれば忘れてしまう事だが、よくよく冷静に考えればそう思えてしまう。

金が全てではないとよく言うが、金を超える『発明』は何万年という時が過ぎようと生まれないだろう。

それを思えば金に群がるのも無理はない。

こういう時あかねが思うのは、千明達はどう考えるのかという事。

以前、千明に言われた事がある。悩みは誰にでも生まれるもので、要はどうやって問題をクリアするか。

でもそれは普通の生活の中での話で、こういう類の悩みは簡単にクリアさせてくれない。

「あかねちゃん？」

メグが真剣な顔で悩むあかねを心配そうに覗き込む。

「あ、ごめんごめん。考え事してたから。」

「なんだか怖い顔してたわよ？大丈夫？」

「うん、大丈夫。試験は？もうそろそろでしょ？応援してるから頑張つて！」

「とりあえず入賞して士官しないとこれからの生活に困る……………あつ……………」

思わず漏れた本音に口をつぐむ。

「ごめんなさい。私がお金持っていないから……………」

メグも悪気があつたわけじゃないのはあかねにもわかってているが、やっぱり忍びない。

「ハハハ！大丈夫大丈夫！私に任せといて！」

「メグちゃん……………」

同じ歳のメグがすごく頼りがいがある。

今の自分には無いものだとかあかねは実感する。

「じゃあ行ってくるね！」

メグを見てるとかなり自信があるようで、男の波をもともせずに進んで行った。

「勝つてね……………」

友達とはまだ呼べないかもしれないが、ここに来て最初に仲良くなったメグには絶対に士官してほしい。

女としても男には負けてほしくない。そう願うのだった。

「どうやら迷い込んだ先は俺達の知る千年前とは違うようだな。」

重複するが、こちらも自分達の置かれた状況に少し戸惑っていた。

「こんな事ってあるのでしょうか？」

九藤美咲はまだ信じられないでいる。

魔導書はオノリウスが持っていると睨んで絵里同様に当時彼がいた場所まで来てみたが、結果は同じ。この世界にオノリウスの存在がない。

「でも魔導書が存在する以上オノリウスがないという理屈は成り立たないわ。」

気持ちは美咲に共感するところだが、岩瀬那奈は冷静に分析を図る。

「確かにそうですね。因果関係は崩れる事がないのが定石ですものね。くすくす……何がどうなってるやら。」

妃山千明はこの状況を楽しんでるようだ。

「千明姉様、不謹慎ですよ！絵里姉様の安否もまだわかってないのに！」

新井結衣が年上の千明を説教する。

「結衣、そういきり立たないの。千明ちゃんのくすくす笑いはいつもの事でしょ。」

綾女はるかには結衣の気持ちを知ってあえて諭す。

「なんにしても、これからどうします？総帥。」

ローサ・フレイアルが、崖の上から遠くを眺めるヴァルゼ・アークの横顔を見つめながら指示を仰ぐ。

「焦る事はない。これではダイダロスもお手上げだろう。今は由利達が絵里を見つけるのを待ってしよう。」

仲矢由利、神藤愛子、宮野葵、戸川純の四人は絵里を搜索に行っている。

下手に動くよりも由利達を待っている方が得策だと考える。

「絵里ちゃん無事かなあ。」

中間翔子が不安を口にする。

「大丈夫なのです。仲矢司令達ならきつと見つけてくれるのです。」

一番年下の南川景子が一番力強くみんなを勇気づける。

「景子の言う通りよ。絵里の事は司令達に任せておきましょう。」

美咲が景子の頭を軽く撫でて褒めてやる。

「オノリウス……………どこにいるのかしら…………？」

千明はオノリウスがいると確信している。

物事は説明がついてしまえばそれが全てだ。

「フツ……………千明、存在は『いる』『いない』で決まらない事もある。」

「と、おっしゃいますと？」

意味深なヴァルゼ・アークの言葉に千明ならずとも耳を傾ける。

「過去に奴が姿を見せなかったとしても奴は存在している。俺達の知る千年前に奴がいたのは事実。それが全てだ。」

「『いた』という事の方が大切なのよ。そもそも時間逆行なんて理に反した行為、過去へ来ても私達からすれば時間は前に進んでいるの、だから大切なのは記憶にある存在の方よ。」

美咲にはヴァルゼ・アークの言った事が理解出来ているらしい。
千明にも何となくは理解出来るが、すんなりと受け入れる事は難しい。

だいたい科学は苦手だ。

時間がどうたら理屈がこうたらと考えるだけで頭が痛い。

「ああ……ダメ……私には縁の無い話ね……」

得意のくすくす笑いも出てこない。

「ヴァルゼ・アーク様にはわかっておられるのですね？何故ここが私達の知る千年前と違うのか……」

翔子に聞かれると、ただニヤリとして、

「どんなに姿を変えても、真実はひとつだよ。」

難しい公式を使わなくても問題は解けるのだと伝えている。

彼女達にとっては問題が解けなくても問題にはならない。

ヴァルゼ・アークの言う事が全てなのだから。

「へっ！おとといきやがれ！」

トランスミグレーションを解放する必要はない。

剣の腕はまだまだ未熟だが、師匠はレジェンダ、ジョルジュ・シャリアンなのだから基礎は出来ている。

その上、戦って来た連中を考慮すればどんなに腕に覚えのある人間でも、羽竜には勝てない。

「くそっ！！」

負けた戦士は石で出来たリングを蹴り、悔しさをぶつけて去る。

「これで五人倒してるんだぜ、あの少年……………」

羽竜の強さは試験を受けに来た者達に広まっていた。
そしてメグの強さも。

「ひっ……………なんだこの女……………」

男は尻餅をついて向けられたカルブリヌスに悲鳴を上げた。
事実上の降参の合図だ。

「なんだって事はないでしょ？貴方が弱いだけじゃない。人を化物見るような目で見ないでよね！」

華麗に舞うようなメグの剣技には見惚れてしまう者までいる。

とにかく広い敷地に、リングが五つ。そこで絶え間無く試験が行われている。

もちろんこの人も。

「ま、ま、ま、待て！殺さないでくれ！！」

男はあまりの強さに恐怖に見舞われる。

それもそのはず、相手は天使。威圧感、オーラ、それらが理屈でわからずとも本能は素直だ。

「おい！試験官。面倒だ、全員まとめてリングに上げる。」

まあ彼自身天使の自覚など持っていないが……。

「いや……それは出来ない。一応ルールだから……」

サマエルの凄みに尻込みするようでは試験官としては頼りない。

「ルールだとっ？戦場にルールは無い！甘ったるい事を。」

フンと鼻を鳴らしてリングを下りる。

サマエルは羽竜と戦えればそれでいいのだ。

「どけ。」

周りの者も、サマエルのただならぬ殺気に当てられ道を作ってしまう。

中には棄権を申し出る者も少なくない。

殺してしまえば失格だが、何分サマエルは容赦がない。

本人は遊びのつもりだろうが、相手からすれば野生の獅子を相手にしているようなもの。

堪らないの一言に尽きる。

何百といた志願者は瞬く間にその数を減らしていく。

それもたった三人、羽竜、メグ、サマエルによって。

第十章 心の闇　～失意の悪魔～

もう八年にもなる。私がモデルの仕事をして。

田舎の高校を卒業してすぐに、ファッション関係の会社に就職した。そこでモデルにならないかと声をかけられ、一時は有名ファッション雑誌の表紙を飾った事もある。

今は28歳。四年前からはもっぱら通販の下着のモデルの仕事ばかり。

落ちぶれたとは思っていない。

だってこれだって立派な仕事の一つでしょ？

世間はそう思っていないけど。

四年前に何があったかって？

聞いても楽しい事なんて何もないわ。私は虹原絵里。創造神バルムングの継承者。

そう………私は悪魔になったのだ、あの日から………

「お疲れ～～絵里ちゃん、今日もよかったよ！」

あまり好きになれない声だが、仕事だから仕方なく愛想笑いで答えてやる。

「あら、お世辞でも嬉しいですね。」

セレブ口調で返すのは、私からの精一杯の皮肉。

なんで皮肉を言うのかというと、このカメラマンが嫌いだから。だけど私を綺麗に撮ってくれる腕は間違いないから無下には出来ない。

「ところでさあ、今日とかこれから暇？暇なら一緒に食事でもどう？」

キタキタ、気持ち悪い事この上ない。

「ごめんなさ〜い。友達と約束があるから!」

「またあ?しょうがないなあ〜。」

「また今度誘って下さいね!」

『偽物』の笑顔で丁寧にお断りする。ここでヘソを曲げられたら終わりなもの。

その他のスタッフとも軽く挨拶をかわすと、控室に向かう。

「お疲れ様〜!」

控室のドアを開けると、今日一緒に仕事をした仲間がいた。

小さなスタジオの小さな控室には私の他に八人のモデルが着替えを終えていた。

「いいわね〜、絵里。いつも貴女だけ多く撮ってもらえて。おかげで随分待たされたわ。」

仲間うちではリーダー格の女が嫌にトゲのある言葉を吐く。

「そ、そんな事ないわよ。ただ食事に行かないかって誘われてて……」

「何それ?自慢?」

別の女が腕を組んで睨みを利かす。

「別に……自慢なんて……」

「言ったわよね？みんな帰る時は一緒にスタジオを出るって。誰も抜け駆けしないように仲良くやりましょってルール決めたじゃない。早速裏切るわけ？」

とんでもないルールだ。

でもいわゆる『お局』様には逆らえない。

お局様といつてもまだ27歳。

ただファッション誌を飾るには少しキツイ年齢だ。
だからこそ焦っているのだ。

「裏切るつもりなんてないです。これからは気をつけます。」

頭を深々と下げロッカーを開ける。

「……………ひどい。」

ロッカーを開けて私は愕然とした。

「あらあら、どうしたのかしら？絵里さん。」

かばんの中のものは無造作にばらまかれ、買ったばかりの服が破られている。

「どうして……………どうしてこんな事をするの！？」

元が短気な絵里に怒りが芽生えるには十分過ぎる要素だった。

「何よ、私達がなんかしたって言いたいのか？」

「貴女達の他に誰がこんな事をするっての！？答えなさいよ！！！」

突然の絵里のキレっぷりに全員がそわそわし始める。

「なんなのよ、その態度！」

お局様も退くわけにはいかない。

もちろん全ては絵里の人氣に嫉妬した彼女の考えで行った悪行。

「態度を改めなきゃいけないのはあんたじゃないの！？！」

抑えていた絵里の自我が爆発する。

「ム力つくわ……ちょっと人氣があるからって生意気なのよ！」

絵里の肩を突き飛ばし絵里が後ろへ転ぶ。

「……………ッ！」

「二度と表紙飾れないくらいぼこにしてやるつかしら。」

本気ではなかったが絵里の顔を踏み付ける。

「やめて……………！」

必死に抵抗するが見ていた他の七人も絵里にちょっかいを出し始める。

「この際だから衣装も剥いじゃおうか？」

「それ名案！素っ裸で帰らせましょうよ！」

「あはははは！髪ばっさりいく？」

鬼だ。冗談のつもりなのだろうが、彼女達の言葉は鬼の言葉だ。聞くに耐えない。

「いい加減にしてよ……やめてって言ってるでしょ……！」

絵里が抵抗すればするほど面白がってちょっかいを出す。それがエスカレートした時、事故は起きる。

「痛ッ！！」

右目を押さえてうずくまる絵里に騒然とする。

「な、何？誰かなんかした？」

血の雫が連続して落ちる。

「それ……………」

一人が絵里に何が起きたのかわかった。握られていたハサミの先にも血が付着していたからだ。

「ちょっと…………どうすんの…………？」

無責任な。なんと無責任な言葉なのか。

「私知らないわよ！か、勝手に絵里が転んだんじゃない！」

絵里が怪我をした原因は一つでも、責任は全員にある。
子供じゃないのだからわかっていているはず。

「救急車呼ばなきゃ！」

「待つて！こんなところ見られたらみんなおしまいよ！？もつこの
業界にいれなくなるわ！」

「でも……………」

お局様の一言に何も言えなくなる。

みんな有名に成りたくて頑張つて来たのだ、ここでつまずきたくないのが本音だろう。

「……………ねえ、絵里。私達は知らなかった事にして？もちろん慰
謝料は出すわ。とにかく病院には連れて行ってあげるから適当に話
合わせてくれない？」

「……………連れて行って……………あげるから？」

「そう！だから黙つて……………」

お局様の首を絵里が押さえ付ける。

「ぐぼつ……………え……………絵里……………」

「お前いつからそんなに偉くなつたんだよ？」

右目からまだ血が流れてる。

ぞっとするほどの形相で睨まれ誰も口を開かない。

「苦しい……………あんた達見てないで助け……………」

「誰もお前なんか助けないよ。絶対許さねー……………許さねー……………！！！！！！」

幸い失明は免れた。

ただ視力は極度に落ち、瞼に傷が残った。

それはファッションモデルとしての人生を失った事を意味した。

お局達は当然捕まった。

この事はマスコミが騒いだ為、話題を呼んだ。

お局達は全てを失くしたのだ。

期待されていた者もいた。

上手く行けば女優としての道も用意されていただろうに。

「人間て……愚かよ……」

あの時、お局にハサミを突き立てようとして思い留まったのは正解だったかもしれない。

あれ以来右目を髪で隠している。ファッションモデルは引退したが、事務所の社長が通販のカタログにある下着のモデルとしての仕事をくれた。

受けるつもりだ。

私にも意地はある。^{さげす}蔑まれようとも、私は私の道に行く。

「自分の道に行くという事がどんなに辛いか………知っているか？」

公園の木漏れ日の中で休日を満喫していると、黒髪の男が現れた。日本なのだし、見た目も日本人なのだから黒髪は珍しくない。でも何故かそれが印象的だった。

「あら、どなた？」

背の高い黒髪の男をベンチに座ったまま見上げる。

………首が痛い。

「これは失礼。あまりに木漏れ日の似合う女性がいたのでつい声を。」

「アハハ！今時キザは流行らないわよ？」

「フフ……でも本音さ。」

男の目に映る私を見る。

吸い込まれそうだ。

その感覚が凄く気持ちいい。

「自分の道を行くのがどんなに辛いかわかってるかですって？貴方私の心を読めるの？生憎神仏は信じないタチだけど、でも興味はあるわ、聞いてあげる。」

普段の私ならこんな事は言わない。

彼の人柄でもない。

「……自分という存在はそんなにでかくない。人が思うより小さな……凄く小さな存在だ。その道は平坦で、アスファルトの上を歩くよりも優しい。」

「なら辛いどころか楽じゃない。」

「しかし小さな道は思いもよらない力で捻れ、うねり、時に悲鳴さえ上げる。一步を踏み出すのに必要な労力は計り知れない。」

「うふふ……大袈裟ね、貴方。新手の宗教の勧誘かしら？」

「……宗教……そうかもしれんな。だが不思議に思った事はないか？世界中どこへ行っても宗教は存在する。先進国にもどこか辺境の地にも。宗教は人々が心の支えにする糧。そしてその糧を創り上げた者は、皆、己の道を歩き己に辿り着いた者。一步を大切に出来た者達だ。」

この手の話は苦手なはずなのに……………聴き入ってしまった。

「私にどうしろと？」

「失意を感じてるのだろう？己の人生^{みち}に。」

「……………」

読まれている？私の奥にある心を。

「君にこれをあげよう。」

そう言つて男が差し出した物は、黒く光る石。
よく磨かれて、まるで卵みたいだ。

「これは？」

「君がその石を受け入れた時、新たな種へと進化する。」

男は背中を向けて消えていった。

「嘘……………マジ？」

幽霊でもいたのかと疑ったが、私の手には黒く光る石がある。

「新たな種に……………進化…する……………」

眩くと同時に放たれたまばゆい光を受けて意識が遠退く。

気がつくとき、真つ暗な闇の中にいた。

「どこ……どこ？」

「やっと目覚めたか、女……」

「誰？」

貫禄のある声が私に話しかける。

「我が名は創造神バルムング。闇十字軍レリウーリアの一人。」

「闇十字軍？レリウーリア？創造神？」

「我は悪魔だ。」

その一言で納得は出来た。
でもこれは……………夢？

「悪魔が私に何の用？」

別に驚きはしない。失意の中にいた私には調度いい刺激だ。
例え夢でも。

「我を受け入れよ。さすれば女、お前に創造神の力をくれてやる。」

「それはまた奮発ね。創造神の力をもらうその見返りは何？」

悪魔の誘いなら必ず裏がある。

「かつて我は英雄ジークフリートに力を与えた。有名になり、愛した女を我が物にしたいという望みを叶える為に。ジークフリートに出した条件はただ一つ。どんな小さな不幸でもいいから背負う事。石ころにつまずき転ぶだけでもよかったのだ。だが奴は裏を読んだつもりで死ぬまで不幸を背負わない事を決めた。それが間違いよ、結果奴は自分に不幸が起きないものと思い込み、自らが愛した女に殺される不幸に見回られたのだ。」

「裏を読むなつて言いたいの？」

「我は既に存在していない。ただ記憶と力のみが残されている。お前が我を受け入れて求める見返りなど無いに等しい。」

「無いってはいち切らないのね？」

「心残りは天使を倒せなかった事。それを叶えてくれるのならば、

お前は創造神バルムングとして人間の域を出る。」

夢にしても現実にしても、面白い。

「わかったわ、あんたを受け入れてやるわ。」

上着を脱ぎ両手を広げる。

「必ず……必ず我が無念を晴らしてくれ……」

どこからともなく光が現れて私の胸を直撃、その直後知らない場所にいた。

「受け入れたみたいだな。」

「貴方は……」

さっきの黒髪の男が暗い部屋に蠟燭を立てて馬鹿でかい椅子に座っている。

その横には綺麗な女性が二人、こちらを見て微笑んでいる。

「ようこそ、闇十字軍レリウーリアへ。私はベルゼブブ継承者、神藤愛子。」

ベルゼブブ継承者？って事は私と同じ？

「私はレリウーリア司令官、ジャツジメンテス継承者、仲矢由利。よろしくね。」

「貴方は……貴方は誰？」

黒髪の男を見ると胸が熱くなる。愛しいとか恋しいとかとはまた別。そう……格別な気持ち。

「俺の名はヴァルゼ・アーク。魔界の神……魔帝だ。」

「魔帝………」

何故か懐かしい響きに心が潤む。

「ヴァルゼ・アーク様、私のこの肉体も心も、全て貴方様に差し上げます。」

この日、私は悪魔に生まれ変わった。

第十一章 サバイバルガール

野宿なんて自分の人生においては無縁のものだと思っていた。

「はぁ……………いい加減シャワーくらい浴びたいわ。」

草むらに寝そべり空を仰ぐ。

何度探してもこの時代にオノリウスが存在しない。

手当たり次第あたってみても、誰もオノリウスを知らない。

ここに来てからそればかりが頭の中を駆け巡る。

「……………総帥……………怒ってるかな……………。司令も……………みんなも……………」

強気な絵里も、孤独の前には無力。
仲間達の顔が空に見えてくる。

（情けない、もう弱音を吐くの？絵里…………）

食事もなくに採ってない。元気なのは胃袋だけだ。

溜め息を漏らしふと横を向くと、見慣れた少年が歩いていた。

「……………あれって、藤木蕾斗じゃない？」

服装を見れば一発でこの時代の人間でない事がわかる。

すくつと起き上がり、気配を殺して後ろから忍び寄る。

当然やる事は一つ。

「よっ！少年！！」

「わっ!!?」

耳元で声を出され心臓が捻れる。

「やゝっぱり、あんた藤木蕾斗じゃん!」

キョトンとした顔で絵里を見ている。

「……………誰?」

一気に身体力が抜け、その場にへたりこんだ。

「そうだったんですか、それは災難でしたね。」

一連のあらすじを絵里に説明され、蕾斗もまた事の成り行きを説明していた。

「そうなのよ。災難も災難、天災よこれは。」

どこを歩っても森と草原の繰り返し。

日も暮れ、今日の野宿の場に火を起こして久しぶりの食事にありついていた。

「しかしあんた、よくこんなに食糧持ってたわね？この時代の銀貨なんて持ってないでしょうに。」

こんなに言っても大量に持っていたわけじゃない。

あくまで蕾斗が持てる範囲での量だ。

パン、果物、干した肉、どれも極上の味は秘めていないが、今は腹を満たせばそれでいい。

「バイトです。」

「バイト？」

「こつちに来てから食べ物に困って宿屋でアルバイトをして貯めたんです。」

「ちゃっかりしてるわね…………でもこつちに来てまだ数日でしょ？貯めるなんて不可能じゃない？」

「これで……………」

蕾斗が指さすのは焚火。

「焚火？」

「魔法ですよ。魔法を使って見世物みたいな事を少々。」

「……………ちやつかりし過ぎ。」

蕾斗の堅実さに頭が下がる。

男としてはつまらない部類に入るのだろうが、ある意味たくましい。

「絵里さんて……………どうして悪魔になってまで戦ってるんですか？」

「どうしたの？急に……………」

「だって、絵里さんそんなに綺麗なのに命を賭けてまでヴァルゼ・アークに尽くす意味がわからなくて。千明さんも、新井さんも、アドラメレクも、みんな美人なのに……………なんでだろうって。」

「嬉しい事言ってくれるじゃない。千明達も喜ぶわよ。」

ちぎったパンを口に放る。

「私は総帥、ヴァルゼ・アーク様に心を救われたのよ。私だけじゃなくて他のみんなも。あの人に会わなければ、あるいは自ら命を絶っていたかもしれない。まだ貴方にはわからないかもね、自分でいられなくなるほどの絶望を。」

「絶望……………」

焚火の炎で照らされた絵里の顔を見て右目が無い事に気付く。

絵里も顔を背け蕾斗に見えないようにする。

「醜いでしょ？」

ぎゅっと拳に力が入る。

「…………全然。目の一つくらい無い方が普通の女性と釣り合うと思いますよ。」

妥当な言葉かどうかはわからなかったが、蕾斗の優しさは絵里に伝わったようだ。

「ありがとう。元々怪我で視力が落ちてたところをダイダロスにやられたの。そしてフラグメントを奪われたのよ。」

「痛くないですか……………？」

「痛いわよ。まだたまにズキズキするし。でも、総帥は私を優しく抱きしめて下さったの。本当は怒りに満ちていたはずなのに…………失態を責めず、ただ私を抱いて下さったわ。女である私が片目を失った事を察してくれたのよ。だからどんなに痛くても耐えられる。この身体はあの人に捧げたものだから。」

ちらつと絵里を見る。そこには悪魔なんていない。ただの女が一人いるだけ。

「ん？なあに？そんなに見つめて……………」

「いや、別に……………」

暗闇でもわかるくらい顔を赤くして絵里から目を反らす。
初々しい蕾斗の反応が絵里をそそる。

「ねえ……………蕾斗君って女……………知らないでしょ？」

四つん這いで蕾斗に近付く。まるで獲物を狙う虎のように。

「か、関係ないじゃないですか！」

照れてるのか怒ってるのかわからないが、蕾斗の鼓動は音を立てて息づいているのは確かだ。

「ウフフ……………お姉さんが教えてあげようか？イ・イ・コ・ト！」

絵里の息が蕾斗の顔を直撃する。

濡れた唇をペロリと舐める仕草は蕾斗には刺激が強すぎる。

「蕾斗君……………」

「え……………絵里さん……………うっ！」

緊張をぶち壊すようなうめき声を上げる。

「ど、どうしたの！？まさか、もう！？」

「……………絵里さん、臭い……………」

「……………！！！！！！！！！！」

数日風呂に入らなければ当然だ。どんな美人にも例外は無い。

「し、し、失敬な！シャワー浴びてないんだからしょうがないですよー！」

プライドがある。もちろんレディとしての。

「……………そういえばあんた甘い匂いするけど……………なんで？」

申し訳なそうに蕾斗がポケットから小型の制汗剤を出す。この時代に不釣り合いな。

「それって……………千明がCMやってる……………？」

黙って頷く。

「か、貸しなさい！こういうものはすぐに出しなさい！！基本よ！キ・ホ・ンー！！」

蕾斗から取り上げた制汗スプレーをプシューと全身に振りまくる。
独特の冷たさに官能さえ覚える。

「はあああ……………久々の快感ね。制汗スプレーがここまで快感をもたらしてくれるなんて……………」

ただ気に入らないのは千明がCMをしていた事。
なんか恩を着せられているような気がする。

「喜んでもらえて幸いです。」

『難』を逃れてほっとする。

「あゝ何その顔！そこまで臭くないでしょーが！」

「そういう意味じゃ……………」

こめかみをぐりぐりされてもがく様を羽竜とあかねが見てたらなんと言われるか……………。

「こいつめ！ほれ！」

「イテテテ……………絵里さん……………痛いよ……………」

「そんなんでも私達に勝てると思って……………」

絵里の手が止まる。

「う〜〜いて〜……………」

こめかみを押さえてうずくまる。

「蕾斗君、火を消して！」

「え？」

「早くっ！……！」

「あ……………はい！」

急に雰囲気を変えた絵里に言われるがまま冷気の魔法で焚火を消す。

「どうしたんですか？」

「しっ！」

絵里の見たる先に視線を送ると、月明かりに照らされた大きな翼を持った生き物が見える。

「こんな夜更けに……鳥？」

「違うわ。あれは……天使よ。」

言われてみれば鳥とは形が違う。

「どうして天使が……？」

「レジェンダから聞いてるでしょ？始まるのよ、エルハザード軍による地上肅正が……」

「……そんな……」

「きつと下見をしているのよ。2、3日の内にエルハザードが攻めて来る。都合がいいわ。」

「都合がいい？」

「話したでしょ、この時代にオノリウスが何故が存在しない。でもエルハザード軍は魔導書を探すはず、オノリウスがいなくても魔導書さえ手に入ればそれでいいし。皮肉にも、私は一度この時代を経験してる。何が起こるかわかっているのよ。」

「利用するんですね？天使を。」

「そうよ。あんた、私に付き合いなさい。」

「え？」

「目的が同じならあんたがいた方がいいわ。あんただって一人では心細いでしょ？」

「ま、まあ……………」

「そうと決まれば明日の朝早く立つわよ！」

「どこへですか？」

「天使が最初に肅正した国、フランスアよ。」

第十二章 愛しき因縁

「ジオルジュ、試験はどうなってるの？」

セイラが気になるのは試験そのものではなく羽竜の事だ。ジオルジュが推薦した男だ、相当腕が立つのは想像出来る。しかし歳は自分と同じくらい。

まだ十代の羽竜が士官試験をパスするとは思っていない。

「羽竜は圧倒的強さで進んでおります。」

「そう。最後まで来れるかしらね？」

ジオルジュからすれば羽竜の力は欲しい。

在るか無いかわからない魔導書を巡る戦争を終わらせる為には、人間的な強さだけでは不可能だ。

羽竜の見せたあの技と赤い刃の不思議な剣が必要になる。

「もうひとつ報告があります。」

「何？」

「羽竜の他にも二名、とんでもなく強い者が現れました。」

「へえ……誰？」

「サマエルと申す青髪の戦士と、メグ・ベルウッドという歳は羽竜と同じくらいの女戦士です。」

「女？そんなに強いのか？」

「はい。」

ジオルジュは無駄の無い男だ。

言い換えれば、素直過ぎてわかりやすい反応を示してくれる。

「貴方がそう言うのであれば強いのでしょうか。…………面白いわ、私も是非見てみたい。その二人。」

セイラも実にわかりやすい。見てみたいという事は見せろということだ。

「間もなく残った四人での試験が始まります。」

「愚かな戦争を止める戦士かどうか……………見てやろうじゃない。」

羽竜、サマエル、メグの強さに恐れを抱き棄権した者が大半だった。

試験も数を熟す度に、三人の攻撃も加減が失くなり対戦相手をこてんぱんにのしていた。

もつともサマエルだけは最初から殺さない程度の加減しかしていなかったが。

互いに顔を合わせる事は無かったが、残り四人ともなればそうはいかない。

「貴方強いよね、さっきの戦い見てたわ。」

「お前は？」

「私はメグ・ベルウッド。メグって呼んで！よろしくね！」

茶目つ気たつぷりにウインクする。

「俺は目黒羽竜。羽竜でいいよ。」

軽く握手をかわして互いの強さを讃え合う。

「目黒羽竜、準備はいいか？」

いつからいたのか、試験官が羽竜を呼んでいる。

「決勝まで来いよな！メグ！」

「もちろんでしょ！羽竜も頑張って！」

約束をかわし羽竜はリングに向かう。

今度は観衆に囲まれたリングだ。緊張などしてない。むしろ次の相手を待ち望んでいる。

「俺の次の相手はどんな奴だ？」

もはやこの世界に來た目的を忘れている。

「……………とんでもなく強い奴だ。リングに上がればわかる。」

長い廊下を歩くと光が差し込む。

眩しさに目を歪めながら光の方へ歩いて行くと、大きな歓声に見舞われた。

「す、すげえ……………」

耳が裂けるような感覚に捕われる。よく聞けばブーイングも聞こえるが、この際どうでもいい。

士官試験にはやけに盛大な催しに羽竜の鼓動は高鳴る。

「なんだ……………この気持ち……………」

生まれて初めて体験する大舞台に多少戸惑いもある。

「俺の……………俺の対戦相手は？」

向かい側の扉から対戦相手が現れる。

銀色の鎧を纏い、青い髪をしたあの男。

「なー！サ……サマエルッ！！？」

「ククク……また会ったな、羽竜。不死鳥界で会って以来か。」

「なんでお前が……！？」

「わかりきった事。お前を追って過去まで来たのさ。」

「俺を……？やっぱりお前も魔導書を……？」

「フツ……俺はミカエルとは違う。ただお前を倒す為……それだけだ。見る、この額の傷。疼くんだよ、お前を倒せってな。」

これまでの対戦相手はまるで手応えはなかった。

それゆえ、この展開は……嬉しい。

サマエルとならこの大舞台も無駄にはならないだろう。

「でもなんで俺なんだよ？天界では偶然あんに勝てたに過ぎない。わざわざ……なんで？」

「愚問だな。偶然だろうとなんだろうとお前は強い。一度は死んだも同然の身。くだらん争いに参戦するより、我が道を生きる方がいい。」

「フン。ま、嫌いじゃないけどな、そういう考え方。」

翼をもがれた事で天界では生き恥を晒して来た。だがもうサマエルを縛り付ける鎖は無くなった。

「羽竜、サマエル、お喋りは終わりだ。試験はこの観衆を前にして

も緊張せずに己の能力を発揮出来るかにある。各々悔いのないよう
……………」

「黙ってる。せっかくの雰囲気が廃る。」

試験官をサマエルが一喝する。

「抜けよ、まだ持ってるんだろ？イグジスト……………」

サマエルの腰の剣にちらつと視線をやり、戦いの準備を急かす。

「もちろんだ。」

それに応えてイグジスト…………カオスブレードを抜く。

「行くぜ！サマエル！！」

「来い、我が愛しき因縁よ！！」

第十三章 地上肅正の火

開いた口が塞がらない。別に呆れてるわけではない。

メグを応援する為に観客席と言っても過言ではない場所で、リングを眺めていたら羽竜が現れたのだ。それも相手はサマエル。鎧と髪が特徴過ぎて見間違うはずがない。

「おとなしくしてるような人じゃないから、何かはしてると思ってはいたけど……………何やってるの、もう！」

離れ離れになって心配していたのに、羽竜の表情はサマエルとの戦いを楽しんでるように見える。……………もとい、楽しんでいるのだ。

「大分腕をあげたな羽竜。ククク……………」

「あんたも大分余裕が出てきたみたいだな？前はいつもイライラしてたみたいけど。」

「ハハハ！言うようになったな、死線をくぐり抜けた實禄か？」

互いに剣を握り直し次の一手を頭の中で選択する。

可能な限り限界まで楽しみたい。だいたい二人とも士官したくて試験を受けてるわけじゃないのだ。

周りは無視しても問題ない。

だが見てる方は、人間離れた二人の動きに興奮さえ覚える。

セイラも自分の想像を遥かに超えた羽竜とサマエルの戦いに唸りを見せる。

「なんなの……………あの二人……………人間じゃないわ……………」

「…………私の見立てでは羽竜は間違いなく人間ですが、あのサマエルとかいう者…………人間とは違う気配を感じます。」

セイラの傍らで観戦しているジョルジュが一応の説明をする。

「人間でないのなら何者なの？」

「わかりません。」

ジョルジュは物知りだ。英知と呼ぶに相応しい知識をたくさん持っている。そのジョルジュがわからないとなれば益々興味は湧く。

「あの二人がいたら終わらせる事が出来るかもしれない。愚かな権力者達の妄想を断ち切る事が出来るかもしれない。」

「……………」

気丈に振る舞っているセイラも、本当は純粹で壊れやすい心の持ち主である事を知っている。

誰も知らないからこそジョルジュにはそれが不敏でならない。

「ジョルジュ、貴方は彼らに勝てるの？」

つい見せてしまった素の部分をごまかすようにわざと意地悪な質問をぶつける。

「ご冗談を。私は誰にも負けません。」

男としての見栄か。それとも戦士としての意地か。きっぱり否定し

て見せた。

「はいはい。」

見た目とは裏腹に意外と頑固なジオルジュにツツコミを入れても始まらない。

おとなしく羽竜とサマエルとの戦いを観戦する事にした。

「天使に見つかり一人殺してしまいましたが、歴史に影響はあるのでしょうか？」

宮野葵の興味は一般的な興味と変わらない。

過去に起きなかった事を過去で起こしたなら未来に影響はあるのか？
答えは彼女の期待を見事に裏切る。

「結論から言えば無い。よく例えられる話だが、過去で結婚する前の自分の両親を殺したら自分自身はどうなるのか？その時間では『自分』は存在しなくなるだけ。つまり全く別の未来が用意されるわけだ。だから過去で何をしよう俺達の世界には無関係だ。」

学者でもないのによく知ってる后感心してしまう。

ヴァルゼ・アークは神だ。知っていても不思議ではないのだが、神だと感じさせない普段の振る舞いがそうさせているのかもしれない。

「結局、絵里姉様見つからなかったんですね？」

結衣が愛子に聞く。

脳天気な葵には聞くだけ無駄だ。

葵自身が絵里を案じてないわけでない事は知っている。

基本的に不安などはあまり表に出さないだけ。

「……………まだ司令と純ちゃんが探してる。私と葵ちゃんもまたすぐに司令達と合流して搜索を続けるわ。」

愛子の真剣な表情に結衣も安堵する。

「総帥、天使達が現れたとなるともうじきエルハザード軍による地上肅正の日では？」

はるかが心配するのは千年前のあの戦乱が起きれば面倒な事にならないかという事。

「俺達の目的はダイダロスよりも先に魔導書を見つける事と絵里を探す事。あえて意識する必要はないが、わざわざ避ける必要もない。邪魔するものは全て消し去れ。」

ヴァルゼ・アークの黒髪が風に揺れる。

不死鳥界以来ヴァルゼ・アークから笑顔が失くなった。

絵里の事もあるだろう。元が優しいだけに、片目を失った絵里が不敏でならない。

でもそれだけではない。何かに怒りを感じている。ただ一人、胸に怒りを収めて苦しんでいるようにも見えなくもない。

「愛子、葵、お前達は引き続き由利達と合流して絵里を探せ。」

「はい。」

声を揃え返事をして由利と純のところへと戻って行く。

「今の俺達は千年前よりも強い。恐れるものは何もない。」

誰に言ったわけでもなかったが、はるかには彼の苦悩までが愛しく思える瞬間だった。

羽竜とサマエルはもはや英雄にも近い歓声を浴びていた。
この戦いが何の為の戦いなのか誰もが忘れている。

「こんなにワクワクするのは初めてだぜ……」

「フツ………人間てのは天使や悪魔以上に戦いを好むからな。」

羽竜が覗かせる人間の本质。

どうでもいいくらいに身体が熱く燃える。

もっと深く楽しもうと意気込む矢先、会場がざわめきを起す。

「……………なんだ？」

さすがに羽竜の集中力も散ってしまう音量だ。

上を見ると翼のある生き物が隊を成して旋回している。

「……………来たか。」

サマエルは一度『体験』済みの世界。何が起きたのかわかった。

「何が来たんだよ？」

「エルハザードだ。」

「エルハザードって……………」

「お前は知らんだろうが、ここフランシアはこの時代では驚異的な支配力を誇る。だから真っ先にエルハザードの餌食になった国だ。」

淡々と話しているがサマエルの言ってる事は、これからフランシアが壊滅されるという事。

「嘘だろ……………」

「やれやれ、また勝負はおあずけだな。」

イグジストを鞘におさめ、羽竜に背を向ける。

「どこに行くんだ？」

「フツ……俺の興味は強くなる事のみ。フランシアの人間に手を貸すつもりはない。ま、せいぜい奮闘してくれ。」

そう言い残して会場を立ち去る。

「サマエル……………」

呼び止めようとした時、目の前が真っ赤に光る。

エルハザードの地上肅正が始まったのだ。

一瞬にして辺りが火の海と化す。

「羽竜！」

「メグ……………」

状況を飲み込めないメグはとりあえず羽竜の元へ駆け寄る。

「メグ、早く逃げろ！」

「ちょっと待ってよ、一体何が始まったのよ!？」

「……………あいつら天使なんだよ。」

上空から魔法で攻撃してくる天使を見上げ齒を食いしばる。

「天使?天使がどうして……………」

「羽竜君!メグちゃん!」

二人の会話を途切るようにあかねも駆けてくる。

「吉澤!」

思わぬ人物がもう一人現れ羽竜が驚く。

「あかねちゃん……………え?ひょっとしてあかねちゃんの探してた友達って…………羽竜の事?」

あかねが黙って頷く。

何がなんだかよくわからないがあかねとメグも互いを知っている様子。

それだけは羽竜にも理解出来た。

「吉澤、やるぞ!」

「や、やるって何を?」

「決まってるだろ、エルハザードを倒すんだ！」

また無茶苦茶な事を言い出したと肩を落とす。

やっと再会したと思えばこのテンション。慣れた事とはいえあまり歓迎出来ない。

「しょうがないなあ……………」

溜め息をつきながらミクソリデアンソードを具現する。

「え？何？魔法？」

あかねの見せた技に目を丸くする。

「メグ、説明は後だ！早く逃げろ！」

「……………嫌よ！私も戦うわ！」

きっぱりと言い放ちカルブリヌスを抜くその姿に、羽竜も言っても無駄だろうと悟る。

いつの間にか天使達は地上に降り立ち人間を襲っている。

フランスアの騎士達も健闘を見せているが天使の使う魔法の前にはあまりに無力。

平気で殺戮を行う天使に、三人の胸にも沸々と怒りが込み上げてくる。

「準備はいいな？」

「いいわ。」

「よくはないけど……いいよ。」

歯切れの悪さを見せたあかねだが、しっかりとミクソリデアンソードを構えている。

エルハザード軍による地上粛正。千年前にはなかった歴史が作られようとしていた。

第十四章 涙

地獄絵図という言葉がある。誰も地獄になど行った事はないのに、何故か誰もがそれを地獄だと信じる。

きっと日常の中では有り得ない出来事であって、人々が想像する最低最悪の事態だと知っているからだ。

「酷い……………」

「これが戦争なのよ……………」

無惨に横たわる死体を見て蕾斗が絶句する。

見ると言っても直視は出来ない。

あまりに凄惨な光景が胸を締め付ける。

「天使達はどこに行っ たんでしょうか？」

「気配を感じないところをみると別の場所に行っ たんじゃない？」

「随分軽い返事ですけど、胸が痛みませんか？」

絵里にも人の心はあるはず。なのに他人事のように目の前の光景に興味を示さない。

蕾斗には納得出来ない態度だ。

せめて一言あってもいいのではと苛立つ。

「痛まないわ。何をするにも犠牲は付き物、よく総帥がおっしゃってる事だけど、全てのものが満足する事なんて有り得ないんだって。平たく言えば、幸せってのは誰かの不幸の上に成り立っているのよ。」

天使が幸せになるには人間が犠牲になるしかないのよ。」

「そんなの屁理屈だ！こんな事が認められるわけがない！」

「あらあら、どうしたの？そんなにいきり立って。尻の青さが滲み出てるわよ？」

「なら貴女達の幸せには何の犠牲が必要なんだ？」

「私達？それはちょっと違うわね、ヴァルゼ・アーク様が幸せになるには……よ。ヴァルゼ・アーク様が幸せになるには私達の犠牲が必要よ。その為に私達は存在してるんだもの。」

「狂ってる……貴女達も、ヴァルゼ・アークもみんな狂ってるよ。」

「狂気ほど美しいものなんてないと思うけど？」

「狂気が……美しい？」

「自我を捨て、ただありのままの流れに乗せられ狂う様は何にも変え難い価値があると私は思うの。目黒羽竜同様、ボウヤの君にはわからない思想よ。」

わかりたくもない。狂気に価値があるなんて事は奮斗には不可解な思想。

彼女がそれでいいのなら何も言う事はない。

「あれ？」

不愉快な気分も一転、蕾斗の視界に入ってきたのはこの場には似合わない四人の女性。

「ん？……………あーっ！！！！！」

蕾斗と絵里に気付き女性の中で一番若そうな女が叫びだす。

「どうしたの？葵？」

由利がまず葵を見て、それから葵の指差す方をゆっくりと見る。そこにいるのはてんで不釣り合いなツーショット。

「絵里！！！」

「司令……………」

絵里は表情を曇らせ由利達の方とは逆の方向へ走り出す。

「絵里！！待つて！！！」

由利の声を無視して逃げて行こうとしたが、自分達に備わっている能力を忘れていた。

「どちらに行かれるのかしら？」

純がフツといきなりレポートしてきた。

「……………くっ。」

「観念しろ！逃亡犯！！！」

悪ふざけ全開で葵が絵里を追い詰める。

そのやり取りをただア然と奮斗は見てるだけ。

「何も逃げる事ないと思うけど?」

愛子がふて腐れた顔をする。

「心配したのよ、絵里……………」

由利の優しい声が漂ってくる。

自分のした事を思えばみんなの顔をまともには見れない。
でも覚悟を決めてゆっくり振り返る。

「……………」

家出した少女と、それを探しに来た母親…そのままだ。

絵里は何も言えない。

「さ、帰りましょう。仕事がたくさんあるのよ、悪魔に人手不足だなんて言わせないで。」

「司令…………でも私はみんなが集めたフラグメントをダイダロスに奪われてしまいました。総帥にもみんなにも合わせる言葉がありません。」

「なぐに言ってるの!そういうのを思い上がりって言つてよ!」

「葵……………」

やれやれというジェスチャー混じりに葵が実に軽く諭してやる。
ジョークの言えない由利では、頑固な絵里を説得するのは難しい。

「総帥はフラグメントなんかより貴女の右目を気に病んでおられるわ。」

愛子が言ってる事に嘘はない。

「煮え切りませんわね、いい加減になさい。レリウーリアは14人いてレリウーリアなのよ？ 誰一人欠けてもならないって総帥もおっしゃってたの忘れまして？」

純も葵と同じく怒った口調をして見せるが、人差し指を振りながら説得する様はやはり絵里を案じているのだとわかる。

「フフ……結局は私の独りよがりだったのね。」

絵里の顔に薄いが、笑顔が戻る。

「わかりました。これ以上お手間を取らせるわけには参りませんし、戻りますみんなのところに。」

「最初からそう言えばいいのに！ 頑固っていうか分からず屋っついてうか、面倒くさい女。」

葵の皮肉も今だけは許してやる。心なしか、仲間の皮肉が嬉しく感じる。

「ところで絵里ちゃん、あそこのかわいい彼はもしかして……」

ニヤニヤしながら純が絵里を覗き込む。

「あ、忘れてた！途中で会ってここまで一緒に来たのよ！」

こう言われては蕾斗も立つ背が無い。

一人蚊帳の外の蕾斗に由利が話しかける。

「絵里が世話になったみたいね。」

「い、いえ、僕の方こそ……」

「お仲間は見つからない？」

「はい。まだ会えてません。」

近くで見ると驚くほど綺麗だ。いや、気高いと言った方が正しいか。よく、人を魅了する悪魔の存在は語られるが、それが由利ならば魅了されない男などいるわけがない。女でさえ彼女には魅了されてしまっただろう。

だがその美しさ故、彼女もまた苦悩して来た一人だということを蕾斗は知らない。

「……………いいわ。一緒にいらっしやい。私達といればそのうち黒羽竜と吉澤あかねにも会えるでしょう。」

由利には確信があった。自分達の行くところには必ず羽竜の姿がある。それに加え、今回は魔導書という共通目的で譲れない目的があり、否が応でも巡り会い必至だからだ。

「僕が？でも、ヴァルゼ・アークさんもいるんですよね……？」

ヴァルゼ・アークが嫌いなわけでもましてや恐いわけでもない。
由利が人を魅了する気高さを持つのなら、彼は人に緊張を与える霧
囲気を持っている。

魔帝故の雰囲気なのだろうが、あの瞳で見つめられると心を見透か
されているようで苦手だ。

とは言っても、死体が転がるこの場所に置いていかれるのも気が引
ける。

「あら、総帥が嫌いなのかしら？」

「そ、そういうわけでは……！」

「フフ……大丈夫よ。捕って食べようなんて真似はしないから。」

誰かにも同じ事を言われたような気がする。

「じゃあ……お言葉に甘えて。」

「総帥も女ばかりで気疲れしてるからお喜びになるわ。話し相手に
なっただけ。」

まさか悪魔から神の相手をしろなどと言われるとは夢にも思わなか
った。

「それじゃみんな、帰るわよ！ 蕾斗君、貴方空は飛べる？」

「はい。」

蕾斗の返事に由利が微笑み返す。

「ひゅ〜さっすが魔導を持つ者。カックイイ！」

葵のテンションだけは蕾斗にも不可解なままだが、このまま着いて行くしか道はない。

そう思ってるうちに悪魔が飛び立つ。

それを見て慌てて蕾斗も続く。

空から見るフランスは地上から見ると変わらず酷い。

この時代に科学兵器はまさか無いだろうが、それを凌ぐ凄まじい光景はこれからも蕾斗の胸から離れる事はない。

「そついえばローサちゃんから伝言がありましたわ！」

純が絵里の横に来る。

「ローサから？」

「ええ。あの状況で窓ガラス割って飛び出すなんて探してくれって言ってるようなものね！……ですってよ。」

「あんのインチキイタリアン〜〜〜〜！！！！」

伝言の真意は定かではないが、絵里が一人勢いを増して飛んで行く。

「絵里ちゃん！？んもっ！どこに向かっているかわかってんの〜〜〜
〜！？」

葵の叫びを無視して先頭を切る。

蕾斗には羽竜やあかね、レジェンダとの日々が頭を過ぎる。

「……？あれ？」

彼女達に自分達を重ねていると頬に冷たい何かが当たる。

「雨？」

上を見てもみるが、雨ではない。

冷たい何かは前方から流れてくる。

（これって………涙？）

蕾斗が絵里の後ろ姿を見る。

泣いている。きっと仲間達の元へ帰れるのが嬉しいに違いない。さつきまで狂気は美しいなんて言ってた人には見えない。

彼女達には彼女達の想いがあると知る。

まだ若い蕾斗にはそれ以上はわからないけれど、正しいものと間違っているもの、どこに線引きが出来るのだろうか？

心に違いはない。誰かを愛し、求め、苦しみ、嘆く。成すべき事が違うのは立場が違うから。だとしたら悪魔のしようとしている事もまた正しい。

羽竜が以前ヴァルゼ・アークに言われたと言っていた言葉、

「万物が満足する世界など存在しない」

悔しいけど蕾斗には理解出来る。

王道と呼ばれるファンタジーのラストボスの心情は語られる事はないが、主人公が常に正しいとは限らない。

何故なら、主人公は自分達に害を及ぼす害虫駆除をしているに過ぎないのだから……。

第十五章 P u z z l e

「これが夢なら早く覚めてほしい……」

天使を一掃はしたが、フランスは壊滅してしまった。
落ち込むのはジョルジュ。

兵も大部分を失い、国の再建は難しい。
かと言ってあらゆる国と戦争中だったフランス国女王のセイラに
力を貸してくれる国はない。
壊滅したフランスを逃れ、僅かな兵と生き残った国民を連れ近く
の草原でキャンプをしている。
半ば野宿と同じではあるが。

「地上肅正……」

突然襲って来た天使の一人がそう叫んでいた。
ジョルジュの口から溜め息が漏れる。

「ジョルジュ、お前に任務を命じる！他のどの国でもいいから亡命
を受け入れてくれるところを探して来るのだ！」

空気も読まずに声を張り上げる大臣がうつとうしい。

「やめなさい。あんな事があつた後なのよ、みんな精神的に疲れて
るでしょう。今は少し休ませてあげなさい。」

一番つらい負つたはずのセイラが大臣をなだめる。

「しかし姫様……このままでは……」

「黙りなさいと言ってるのがわからないの？地上肅正を行うのであれば他の国も同じ目合ってるはず、どこへ行こうと現状は変わらないわ。」

相手は天使。戦おうにも人間には限界がある。

セイラの考えは間違っではない。

ただ救いと言うか、希望もある。羽竜達だ。

フランスアが誇る騎士が次々倒れていく中で、羽竜、あかね、メグだけは天使と渡り合っていた。

むしろ羽竜達がいたからこそ天使も撤退を余儀なくされた感じはある。

「羽竜達はどこにいるのです？」

「はっ？あの礼儀知らずですか？彼なら外で食事をしておりましたが……まあこの状況でよく食事など出来るものです。呆れて物も言えませ……姫様？」

「大臣、こんな状況でもしっかり食事を取れる者ほど頼もしい者が他にいますか？私達は彼らに助けられたのです。愚弄は許しません。」

「は……はあ………」

何故羽竜達の肩を持つのか大臣には理解出来ないが、セイラに逆らう事もこれまた出来ない。

大臣とジョルジュを置いてテントを出る。

そして焚火を囲んで食事を取る羽竜達の元へやってくる。

「セイラ姫！」

いち早く気付き片膝を着いたのはメグ。

羽竜達の感覚からは理解出来ないが、メグからすれば雲より遙か上の人物の登場に心臓が張り裂ける思いだ。

「楽にして、メグ・ベルウッド。羽竜とあかねも。」

メグとあかねはセイラを前に畏まったまま座り、セイラも小さい焚火の前に座る。羽竜はセイラそっちのけで食事続ける。

「今日是最悪の日ね。私は国を守れなかった。多くの民を失ってしまったわ。」

「そんな……セイラ様のせいではありません！」

「ありがとう、メグ。でも民を守るのは私の役目。責任の全ては私にあるわ。」

セイラに憧れていた。プリンセスだからとかではなく、どこか大衆を引き付ける彼女の魅力に惹かれていた。

だから仕官していつかはセイラ直属の騎士になろうと志した。

それがこんな形でセイラに近づく事になるうとは。

「天使が相手じゃ人間では勝てねーよ。誰もお前に責任があるなんて思っていないと思うし。」

「羽竜君！失礼よ！」

「構いませんあかね。羽竜には助けられましたし、今の私達には希

望の光なのです。もちろん貴女方二人も。」

「勝手に決めんなよ。俺はお前に仕える兵士じゃねーし、やらなきゃなんねー事があるし明日の朝にはここを発つつもりだ。」

「……………助けてはくれないの？」

「お前らを助ける理由なんてどこにもねーよ。」

冷たい言い方だが、羽竜からすれば捕らえるだけ捕らえ、楽しみはしたが無理矢理仕官試験に狩り出され、あげくの果てにはいつの間にか兵士扱い。

そついう権力をかざした扱いが気に入らない。

そつでなければ乗り掛かった船だとか言つて手を貸す事を惜しんだりはしないだろう。

「だいたいジオルジュがいるじゃねーか。あいつなら勝てるんじゃないか？」

「ジオルジュは……………堅い男です。フランシアが壊滅した事でよりどころを失つてしまい極度に落ち込んでいます。立ち直るには時間がかかるでしょう。」

「羽竜君、力になってあげましょうよ。このままじゃ……………」

「じゃあ奮斗はどうすんだよ？魔導書はどうすんだよ？吉澤は奮斗が心配じゃないのか？」

「私そんな事言っていない！！」

羽竜とあかねが睨み合う。羽竜からしてみれば今ここで起きているのは過去の出来事。何が起きようと自分には関係ない。

あかねはただ純粋にセイラを助けてやりたい。

理屈で動く男と、感情を優先させる女とは肝心な場面で食い違う。

「やめなよ二人共。姫様の前で。」

メグの仲裁が効いたかどうかはわからないが、羽竜もあかねも喧嘩をするつもりはないらしく顔を背ける。

「魔導書……羽竜、貴方も魔導書なんてあるかないかわからないものを探してるんですか？」

「……………悪いかよ？」

「セイラ様、お聞きしたいのですが……………？」

「なんです？あかね。」

「ジョルジュさんはオノリウスという人の弟子ではないんですか？」

「オノリウス？誰ですかそれは？ジョルジュは平民の出ではありませんが、元は孤児です。剣の腕が優秀なので仕官させましたが、誰かの弟子だなんて話は聞いた事ありません。」

「待って下さい、オノリウスをご存知ないのですか？」

「ええ。初めて聞く名前ですが？」

あかねが羽竜の顔を見る。羽竜はジョルジュから聞いて知っては

た『事実』。それにしても奇妙な事実だ。

魔導書があるかないかは別としてもその存在は認知されている。それなのに著者の方は誰も知らない。

あかねもこの矛盾には頭が痛い。

レジェンダが長い時間の中で真実を忘れてしまったのか？

それとも自分達が来た事で歴史が変わったのか？

「な？言っただろ。オノリウスの事誰も知らないんだよ。」

羽竜は後ろに寝転び夜空を仰ぐ。

「誰なの？」

メグがあかねに聞く。

「うん……魔導書を書いた人なんだけど……（でも確か天使は地上肅正が目的じゃなくて、魔導書を奪う為に人間界を攻めて来たはず。だとすれば今日天使が攻めて来た事を考えれば、オノリウスはきっとどこかにいるはず……）」

魔導書が存在して著者がいないなんて馬鹿な話はない。

「とにかく、俺達はもう一人の友達を探さなきゃなんないからよ、悪いけど力にはなれない。」

「そう……わかりました。無理を言っただけ悪かったわ。」

羽竜の気持ちはここには無い。

わかってしまえば引き止めるだけ無駄な話。セイラはすっと立ち上がる。

「セイラ様、私はセイラ様に着いて行きます！」

「メグ……期待してるわ。」

微笑んでメグに応えたが、その顔はどこか淋しげに見えた。

「羽竜君、いいの？」

「別にいいんじゃないか？ふわあゝあ、先に寝るよ。吉澤も早く寝る、明日は朝早いからな。」

寝ろと言われても年頃の女の子が、状況が状況とは言え草の上でなんか寝られるわけがない。

羽竜はデリカシーに欠けているから特別ではあるが。

「あかねちゃん、私達はテントで寝よ？」

「うん。」

明日の朝、あかねも羽竜と共にここを去るのか聞いてはみたいが、聞けばあかねが悩むと思いメグもそれ以上は何も言わなかった。

エルハザード軍が肅正をした地上は大陸のほぼ全体を焼き尽くしていた。
フランチアだけでなく、多くの国が壊滅を強いられ、セイラ達と同じような状況にある。

「どんなに探しても魔導書は見つかりませんよ。オノリウスを見つけるまでは。」

エルハザード軍の下級天使達が魔導書を探す為、壊滅した国を隅から隅まで漁っている。

ダイダロスの目にはその光景がある種の芸術にも思える。

「動くな……………」

油断したと言えはした。でも問題にはならない。
背後に天使の気配がする。

「フッフ……………その気配は上級天使ですか。」

「貴様……………人間ではないな？」

「ええ。お察しの通り人間ではありません……………ウリエル。」

ゆっくり振り向くと剣の切っ先が視界に入る。

「私の名を知っているのか？何者だ？」

「今、貴女に名乗ってもわからないでしょう。千年後、終焉の源に倒されるまでせいぜい『生』を満喫して下さい。」

「わけのわからぬ事を！！」

ダイダロスに飛び掛かる。

しかしウリエルの攻撃など話の種にもならない。
華麗に回避して手頭を頸椎に入れ、ウリエルの意識を奪う。

「うつ……………」

「貴女方天使と戦うのは私ではなく終焉の源と悪魔なのです。お忘れなく……………」

倒れるウリエルを受け止め、そつと寝かせる。

「それにしても、この国に千年前の『私』がいたはずでしたが……………
…見当たりませんね。」

オノリウスに続いてダイダロスも存在しない世界。

これでは歴史が止まってしまふ。

それ自体は『こつち』のダイダロスにはどうでもいいのだが、興味は出て来た。

キーマンとなる二人が存在しない理由、もし本当に存在してないのなら、これからどんな道をこの時代は辿るのか？

「まあ、こうでもなければ面白くはないのが本音ですが。」

不可解な連続は、彼の胸に火をつける。

誰も解けないパズルを解いた時の快感。その快感を得たいと思うのは……人としての性^{さが}なのか……。

第十六章 世界再生の手段

珍しいから珍客なのだが、あまりに希少価値が増すとただ見るだけで心が洗われる。

……なんて大袈裟な話ではない。

レリウーリアに訪れた少年は、悪魔達の好奇の目に晒されている事だけは間違いなかった。

「どうした？飲まないのか？」

持て成しには到底おぼつかない温かいものがカップに注がれている。それをヴァルゼ・アークは美味しそうに飲む。

「これ……なんですか？」

悪魔から出されたから警戒しているのではない、ただどう見ても魔帝が飲む代物じゃない事くらいは蕾斗にもわかる。だからあえて聞くのだ。

「何って……見たらわかるだろ？湯だ。」

「ユって……お湯……ですか？」

「そうだ。」

周りを見るとレリウーリアの面々も『お湯』をすすっている。

確かにどう見てもお湯だ。だが華麗なる悪魔達が美味しそうに飲んでいるのだ。まずいわけがない。蕾斗も騙されたと思い一口飲む。

結論………騙された。

もつともヴァルゼ・アークはお湯だと言ってるのだから騙されたというのは奮斗個人の被害妄想だが。

「これ………どこから汲んだ水ですか………？」

かつて味わった事のない味に好奇心は残念ながら湧かない。

ヴァルゼ・アークは奮斗の問い合わせに答えるべく近くを流れる川を指差す。

「はは………川の水でしたか………」

「気に入らないか？」

「い、いえ！そんな事はないです！」

「無理しなくていいのよ？ライ君。だってお世辞にも美味しいとは言えないものねえ………くすくす。」

独特の笑いで代弁してくれる千明に感謝する。

「いかに普段贅沢をしているかわかるだろう？俺達の世界でさえまだこんな生活を強いられている人々がいるんだ。己の環境を幸せに思っただけ。」

少しらしくない口調で奮斗に語る辺りは、ヴァルゼ・アークの本気の意味であるとわかる。

「はい。ありがたくいただきます。」

不思議と彼の言った事には素直になれる。

同じ事は今まで何度も言われて来たのに。

「真に美味なものは舌で感じるのではなく、心で感じるもの……
……なんてな、本当は俺もコーヒーが飲みたいところなんだ。」

説教染みた事を言った謝罪からか、軽くウインクして和ます。

「でも驚きました。魔帝というくらいだから、まさかこんなサバイバーな事してるなんて……女性もたくさんいらっしやるのに。」

「フツ……なあにちょっとした課外授業さ。こういう機会でもなければ誰もやらないからな。なんせうちは女優、令嬢、モデル、美術館館長、医大生、書道家、キャリアウーマン、その他みんな野生とは程遠い人種の集まりだからどちらかと言えばインドアな事しかやらないんだよ。」

「あら、総帥こそインドア派じゃありません？」

表情に明るさの戻った絵里が、ヴァルゼ・アークの横で甘えるように鳴く。

「ちょっとちょっと！くつつき過ぎ！」

奮斗の後ろから叫ぶローサの声が聞こえる。

「うつさいわね、怪我人はいたわりなさい。」

「キーーーーッ！……都合のいい時だけ怪我人ですかっ！？この三流モデル女……！」

「また言ったわね！！このインチキタリアン女！！」

「人が下手に出れば調子に乗って……」

「へえ、いつからどのあたりから下手に出てるのかしら？」

「もう頭に来た!!」

「何？殺る氣？」

ローサも絵里もロストソウルを具現化して戦闘体勢を取る。
ま、いつもここで終わるのだが。

「ローサ、絵里、やめなさいよ。ゲストがいるのよ？恥を晒すような事は謹みなさい。」

美咲に苦言を言われ二人が奮闘をチラツと見て謝る。

「すいません……」

「全く、懲りないお姉様達ですね！」

結衣が駄目押しの一言を付け加える。

「ふっ……アハハハハハハハハハハハハハハハ！」

ローサと絵里のやり取りが相当ツボに入ったらしく、よそよそしい態度だった蕾斗が腹を抱えて笑い出す。

「あは……はは……」

「そんなに面白い？」

不思議そうに翔子が蕾斗を見る。

「だって……もっと厳しい雰囲気が漂う人達だと思ってたから……」

心配している羽竜が見たら間違いなく怒られているくらいの笑い方だった。

さすがのローサと絵里も顔を赤くする。

本気の喧嘩だから尚更に……。

「あっ……」

慣れない環境に寝付けなくてそこら辺を徘徊していると、崖っぷちにヴァルゼ・アークが立っていた。

「……………蕾斗か。」

「はい。」

崖の上からただじっと三日月を眺めるその後ろ姿は、やはり威厳を感じる。

「来い。少し話そうじゃないか？」

言われるがままヴァルゼ・アークの横に行く。

昼間の穏やかなムードはどこにもない。

レリウーリアの女性達は各々木の上で寝たり、どこから持って来たのか毛布を敷いて寝ている。

「綺麗な景色だろ？」

「ここは……………まだ天使にやられてないんですね。」

「エルハザード軍が攻めるのは城ばかりだ。何もないこんな山奥までは来ない。そういう奴らなんだよ。徹底的にやればいいものを……」

……」

ヴァルゼ・アークにとっては過去の出来事をリピートしているようなものなのだろう、聞き方によっては天使の味方のようにも聞こえる。

「そういえば、昼間のカップとか毛布って……………持参したんですか

「？」

「ハハ！冗談だろ？あれは壊滅した町から『拝借』して来たのさ。言つとくが盗んだわけじゃないからな。」

気持ちが高揚してる。緊張もあるが、憧れにも似た感情が芽生えて来ている。

数回しか会った事はないのに彼も不思議な魅力を持っている。

「でも本当に意外でした。ああやって会話していると、みんな普通の女性なんですね。」

「フツ……男一人では手に追えんがな。」

手に追えなくともそこがまた愛しく感じるのは親心とでも言ったところか。

「フランシアなんて国あったんですね、教科書には載ってないのに。」

「教科書に書かれてる事は偽りの歴史だ。天使達が実在するなど書かれてないだろう？」

「確かにそうですね。誰が歴史を改ざんしたのか知ってるんですよ？」

神秘的なものには好奇心旺盛な蕾斗は、ここぞとばかりに興味のある事を聞く。

「改ざんしたのではない。悪夢のようなこの時代は、人々が記憶か

ら消し去ったんだ。見て来たんだろう？あの悲惨な光景を。」

「…………胸が裂ける思いでした。怖いというか、人の脆さを知ったというか…………」

「だが人はまた歩き出し、そしてより良い世界を創造する。」

「人は……………本当に愚かな生き物なんですか？」

一番聞きたかった事を聞いた。

この質問に『神』である彼はなんて答えるのか？
愚かだと言いつ切るのか？

「……………さあな。」

答えは呆気ないものだった。

「……………わからないって事ですか？」

「記憶と力は魔帝のものでも、ベースとなる俺自身は所詮人間。愚かなのかと聞かれれば愚かなのかもしれない、そうでないと言われればそれまでだ。だが神とて戦争をして来たのだ、それも親子の間柄で。ただ人間は長い時間をかけても進化をしない。気持ちのなもし、人が愚かでないとしたなら、それは幻だろう。」

「それを語る事自体愚かだと？」

「フフ……………深く考える事自体が愚かなのかもしれないぞ？」

夜風が程よく気持ちいい。

「愚かであるが故に人は考え、前に進むのではないかと、僕はそう思います。」

その時、蕾斗は自分の信念に初めて気付いた。
人間には道標が必要だと。

「お前はいい男になるよ、羽竜とは違った。」

この瞬間を死ぬまで忘れない。紛れもなくヴァルゼ・アークは蕾斗を一人の男として扱ってくれた。

生まれて初めての待遇に、戸惑う事はなくむしろ気が引き締まった。

「この世界も、千年も立たないうちに再生するんですよ、人は道標さえあれば過ちは犯さない……そんな気がします。」

「世界が再生するのは人々の力ではない。」

「なら一体なんの力なんですか？」

「明日、俺達に着いてくればわかる。そこでお前も見ろがいい……世界再生の正体を。」

「世界再生の……正体？」

「オノリウスも魔導書もどこにあるかわからない今、打つ手はそこだけだ。」

「インフィニティ・ドライブに繋がる何か……そこに？」

「オノリウスがわけもなくレジエンダにこんな仕掛けを施すとは思えん。この時代の事を何も知らないお前達でもインフィニティ・ドライブに辿り着くには、それこそ道標となるものが必要だろう。」

「それって僕達がここに来る事をオノリウスはわかっていたと？」

「あるいは……………な。」

世界再生の正体がわかる場所。

そんな場所が在りながら行かなかったところを見ると、出来る限り踏み入れたくない場所らしい。

「夜も大分更けたし、今夜はもう眠ろう。寝坊なんかしたら何かと小言を言われるからな。」

ジョークのつもりではないのだろうが、ニヤリと笑む黒髪の青年は少年の不安を取り除くかのように振る舞う。

奮斗を残して一人部下達の元へ戻る。

「あの！」

「なんだ？」

もう一つ聞きたい事がある。

「あの、ヴァルゼ・アークさんの人間としての名前ってなんですか？」

レリウーリアの女性達には人間としての名前が存在する。

戦闘時以外はその名で呼び合っているのに対し、彼だけは常にヴァ

ルゼ・アークか総帥と呼ばれている。

疑問というよりは、最後に何か話したかっただけ。

「……………捨てたよ。」

それだけしか言わなかった。

（なんかヤバイ事聞いたかな？）

鼻で笑ってはいたが、口調に感情はなかった。

魔帝ヴァルゼ・アーク……………疑い無く、蕾斗は彼に惹かれ始めていた。

第十七章 バベルへ

「ねえ、ほんとによかったの？」

キャンプを出てから何回聞いただろう。

まだそんなに歩いてないはずなのに妙に疲れてくる。

「しつけーなあ。言っただろ、蕾斗を探すのが優先だって。」

しつこいという言葉にあかねがムツとする。

「このまま行き先もわからないより、セイラ様やジオルジュさんといたほうがいいと思うけど！」

「あいつらは自分達の国の事しか考えてねーよ。一緒にいたって蕾斗も魔導書も見つかんねーって。」

反して羽竜はクールに対応する。

「どうしたの！？羽竜君、変だよ！」

「普通だよ。」

「普通じゃない！いつもの羽竜君なら絶対助けるよ！」

「だったら吉澤一人で戻れよ。俺は……………」

言いかけた時、異変を感じる。

「こ……この気配は！」

「やだ……苦しい……」

羽竜とあかねを襲う気配。覚えのある気配だ。だがこんなに重い気配ではなかったはず。気配はキャンプの方から感じる。

「羽竜君……この重苦しい気配は………」

「ああ……間違いない、ヴァルゼ・アークだ……」

それも普段の気配ではなく、覚醒した時のヴァルゼ・アークだ。

「行くぞ！」

「うん！」

二人共その手に武器を取りキャンプへ急ぐ。

まだ1キロも歩いてない。数百メートルの距離を全速力で突っ走る。舗装されてない道を走るのは結構な労力が要求されるが、愚痴を零す余裕なんてない。

こんなに重い気配を漂わせるヴァルゼ・アークは初めてだからだ。

羽竜の中の何かが警告を促す。

危険だと。

「はあ…はあ…メグ！ ジョルジュ！」

キャンプへ戻った羽竜とあかねが恐怖に見舞われる。

セイラや僅かな民を守るようにジョルジュとメグが剣を構えている。

その先には……ヴァルゼ・アーク、魔帝がいる。

「羽竜！！あかね！！来るな！！」

ジオルジュも危機を感じてらしく、余裕のない表情をして羽竜達を制止する。

「ヴァルゼ・アーク……あんたも来たのか……」

「知ってるのか、羽竜？」

ジオルジュの焦りも理解出来る羽竜はその名を口にする。

「魔帝……ヴァルゼ・アーク、悪魔達を総括する神だ。」

「なんだと……！」

ヴァルゼ・アークだけではピンと来なかったジオルジュも、悪魔と聞いて相手が誰なのかわかったようだ。

「薄汚い人間が余の名を口にするな。」

トレードマークの真っ赤な髪、側頭から生える漆黒の角、そして見るもの全てを闇に葬るような真紅の瞳。
肌の色以外は全て赤と黒の存在に誰もが恐怖を抱かずにはいられない。

「何言ってるんだよ……薄汚いって……」

いつもとは違う口調のヴァルゼ・アークを前に思わずたじろぐ。

「うるさい蠅め。黙ってる！」

左手を羽竜に向け衝撃波をぶつける。

「羽竜君!!」

あかねの読みも間に合わないほどの速さで羽竜を吹き飛ばす。

「ぐはっ……………」

岩に身体を打ち付けた羽竜にあかねが駆け寄る。

「さあ…………… 答えろ、プリンセスセイラ。バベルの鍵はどこにある？」

「バベルの鍵なんて知らないわ！」

一人勇ましく魔帝に挑むも、その身体は震えている。

「一国の王として気丈なのは結構な事だが、使い方を間違えると国を滅ぼす羽目になるぞ。」

「とつくに滅んでるわ。それも天使によって……………」

「滅んだ？フツ…………… 国とは土地や建物ではない。国とは民よ。それを知らないようでは天使に滅ぼされなくとも、いずれ滅んでいただらうな。」

「悪魔が人間に説教なんて…………… 聞いた事ないわ。」

「哀れな人間に説教をくれてやる慈悲くらい持ち合わせてるつもりだが？」

「なんにしてもバベルの鍵なんて知らない！立ち去りなさい！」

「……口の聞き方を知らないようだな、プリンセスよ。あの少年が言った事忘れたか？余は神だ。薄汚い人間が命令するなど、思い上がりも甚だしい！」

羽竜にやってのけたように衝撃波をセイラに向ける。

「セイラ様！！」

「おのれっ！！」

メグとジオルジュがセイラを守ろうと前に出るが、結果は羽竜と同じ。まるで綿のように軽く吹き飛ばされる。

「プリンセスよ、余は人間を殺して遊ぶような趣味は持っておらんが、あまり聞き分けのない事を言うようならお前の部下を皆殺しにするまでだ。」

魔帝が腰下げた剣を抜く。

「羽竜君……あれ！」

あかねが魔帝の剣を指差す。

「……どうやら別の方のヴァルゼ・アークみたいだな。」

そう。魔帝が握る剣は絶対支配ではない。漆黒の刃を持つロストソウルではなく、見た目は普通の剣と変わりなく見える。

「神様って案外しつこいのね。」

セイラの一言が魔帝に怒りを植え付けた。

「愚かな……神に齒向かうか。ならば望み通り消してやろう！」

セイラに向かって剣を振り抜き真空波で攻撃する。

メグもジョルジュも気絶している。セイラは全くの無防備。

「……………!!」

プリンセスは目を閉じ、死を覚悟する……………そう思った瞬間弾けるような大きな音が鳴る。

セイラは恐る恐る目を開けて何が起きたのか確認する。

「……………羽竜!!」

そこにいたのはトランスミグレーションで真空波を打ち消した羽竜だった。

「くっ……………なんて威力だ……………手がイテェよ。」

「バカな……………本気でないとはいえ、余の攻撃を打ち消すとは……」

互いの驚きはまるで意味が違うが、その度合いは同じものだ。そして羽竜は魔帝への攻撃をいつでも行えるように、トランスミグ

レーションを……羽竜スタイルの頭の脇で抱え、切っ先を敵に向けた恰好で構える。

「まさか余とやり合う気でなかつたな？」

「そのまさかだ……」

「フツ………万に一つも勝てる可能性などないぞ？」

「………例え1パーセントでも、可能性があるのならそこに望みを賭ける。それが人間だ。その勇気は秘めた以上の力を呼び起こす。神と呼ばれる者達が人間に与えた………奇跡つてやつだ！！千年後のあんたの言葉だぜ！」

「何っ！？」

「もしかしたら、魔帝じゃなく人としてのあんたの言葉かもしれないがな。」

「よまい言を………人としてだと？気でも触れたか？」

「………来いよ。」

無謀にも魔帝を挑発する。

ベルフェゴール（千明）との戦い以来、自分の力に自信を持つ者には、この手の作戦がよく効果がある事を学んだ。

挑発して冷静さを失わせ、隙を見出だす。だがそれは過信してる場合だけだ。

「フフ………長い年月を生きて来たが、神を挑発する人間など初め

て見た。」

剣を鞘に収め、ニヤリと笑う。

その表情は羽竜の知るヴァルゼ・アークとそっくりだ。

「プリンスセイラ、今日のところは退いてやろう。その少年に免じてな。」

「……………」

いやにすんなり引き上げる魔帝に疑惑を募らせるも、勝算のない戦いは避けたい。

羽竜の背中を汗が伝う。

「また会おう！」

マントを翻し羽竜達に背を向けると、そのまま消えて行っただ。

緊張感が解け、羽竜が膝をつく。

「あれが……………魔帝……………あいつも本気を出せばあのくらいの才
ーラを纏うのか…………？」

ヴァルゼ・アークに初めて会った夜、あの時も姿は見えずともその存在から恐怖を感じた。

「大丈夫か、セイラ？」

「ええ、私はなんともないわ。」

「それよりバベルの鍵って？」

「わからないわ。なんの事なのか……………」

「でも魔帝が自ら来るくらいなんだからかなり重要なモンなんだろう？」

「だから知らないって……………」

何かを思い出したらしく、言葉を切る。

「どうした？」

「そういえば…………父が生きていた頃、バベルの塔へ調査に行つて戻つて来た時、『これから先何があつてもバベルの塔へは近づくな』つて。なんだか鬼気迫る感じで言つてたわ。何を言つてるのかわからなかったから忘れてたけど……………」

バベルの塔は聞いた事がある。確か人間達が神になろうとして建てた建造物だ。

実際に存在してたとは驚いたが、何故かそこへ行かねばならない気がする。

「セイラ、バベルの塔へ行くにはどうすればいい？」

「羽竜…………貴方…………バベルに行くつもりなの？」

「ああ。魔帝自らが出向く程のものがバベルにはあるんだよ。もしかしたら魔導書があるのかもしれない。」

「魔導書……………」

羽竜にとって魔導書はインフィニティ・ドライブを手に入れる為の手段でしかない。

しかしセイラにとっては世界に混乱を招いた憎き存在。

「わかったわ。バベルへの道を教えましょう。」

「ホントか!？」

「ただし、私も行きます。」

「何？」

「魔帝は私がバベルの鍵を持っていると言ってた……………だったら私が行かなきゃ意味が無いじゃない。」

「……………いいのか？」

「何が？」

「何がって……………お前この国の姫様だろ？お前がいなきゃ残った奴らどうすんだよ？」

「心配には及ばん。」

羽竜とセイラのやり取りに割って入って来たのは大臣だった。

「セイラ様が何を考えているかくらい、わたしには手に取るようにわかりますぞ。どうせ止めても無駄なのでしょうから、お好きになさい。後の事はわしが引き受けましょう。」

「大臣……………」

本当は大臣には内緒で羽竜に着いて行くつもりだった。反対するに決まっているからだ。
なのに……………」

「セイラ様、私も一緒に行かせてもらいます。」

目を覚ましたらしく、メグがふらつきながらセイラの前に来る。
そしてジョルジユも。

「話は聞かせてもらいました。バベルの塔に何があるかわかりませんが、羽竜の言う通り魔帝自らが出向いて来たのです。おそらく魔導書はそこにあるでしょう。ならば私もお供します。そして、世界を戦乱から救いましょう。」

「メグ……………ジョルジユ……………」

国が壊滅した今も、自分を慕ってくれる事に胸が熱くなる。
ジョルジユやメグだけではない、セイラと共に逃れて来た民や兵士までもが力強い眼差しでセイラを見ている。

「羽竜、ジョルジユ、メグ、あかね、セイラ様を頼むぞ。わしにとつては孫のようなもの。何かあったらただでは済まさぬ!……………よいな!」

大臣の馬鹿でかい声は涙を堪える為。

「任せて下さい。このカルブリヌスに誓ってセイラ様をお守りしま

す！」

メグが決意をする。

「ジョルジュ・シャリアン……大臣の熱い想い、確かに受け取りました。」

「あの、私も精一杯頑張ります！」

こういう挨拶は苦手のあかねも、二人に負けじと彼女なりの決意を口にする。

「へっ………何だよ、涙目になってるぜ？あんたに言われなくてもセイラは守る！」

実に羽竜らしく決める。

目指すは伝説の塔…バベル。

「人間とはなんと未熟で単純な生き物よ……………」

盛り上がる羽竜を見下ろし、魔帝は言った。

「出来過ぎた話だと気付かぬとは。」

もう少し苦勞してもよかった。そうでなければ楽しめない。

「羽竜、バベルで待っているぞ。」

腰にある剣を鞘に収めたまま地上に落とす。
意味は無い。ただ不要になっただけ。

そして魔帝は絶対支配を具現化した。

第十八章 人が目指したもの

その昔、人間は一つの共通言語を持っていた。東から、西から人々は集まった。

そして集まった人々の中から、ある提案がなされる。

『神に近づこう!』

言語が共通な為、わかり合う事に苦労はない。多少の文化の違いさえ、言葉がわかるだけで簡単に乗り越えられる。

人々は塔を造る事にした。

互いの知恵、知識、技術を用いて天に届く塔の建造を。

全ては順調だった。わかり合えない時は徹底的に話し合う。偉業を成し遂げる為に。

だが神は面白くない。人間の思い上がりは、共通の言語を使うからだと判断し、一つしかなかった言葉をバラバラにしてしまった。人々は混乱に陥った。昨日までわかり合えてたのに、言葉が違うだけで何も理解出来なくなってしまったからだ。

混乱した状況での塔の建設は大変難しく、やがて放棄されてしまった。

そしてついた名前がバベル（混乱）の塔。

「わかりましたのですか？」

景子が珍しいくらい饒舌にプレゼンしていた。

「わ、わかってるわよ!そのくらい……」

悪魔の記憶を辿っても、バベルの由来は出て来なかった。

翔子はティアマトを恨んだ。

（竜神のくせになんでわからないのよ！）

興味が無ければわからなくて当然。それが『生き物』だ。

「あらあら……あら、貴女まさかティアマトのせいにしてないでしょうねえ？くすくす。」

「し、してないもん！」

千明が翔子をからかう。

翔子は感情が表情にすぐ現れる。おまけに敏感なりアクションを見せてくれる。

千明の生来の意地の悪さ（いい意味で）がくすぐられる。

「それにしても、随分とお詳しいじゃありませんこと？いつお勉強なさったのかしら？」

自慢の長い栗色の髪を撫でながら純が言った。
言い方は多少キツイが、悪気はない。お嬢様育ちだからしかたないのだ。

「常識なのです。」

景子も悪気はない。ただぶっきらぼうなだけ。

「ハン！名前の由来くらい知らなくても、なんの問題もないわ！」

「くすくす。ダメよ？無知は罪なんだから、しっかりお勉強しなく

「ちゃ。」

「無知故に滅んだ者達もいるからね。」

木陰から葵が、拾った本を読みながら茶々を入れる。

「な、何？これって軽いイジメじゃない？は〜いいですよ、別に！波動砲ぶっ放してやりましょうか！？」

メイド姿でロストソウル、波動砲（×2）を具現化する。

「げっ！？ちよっと、やめてよ！危ないって！」

トリガーに指をかける翔子を見て葵が木の後ろに隠れる。

「翔子ちゃん！おやめあそばせ！ロストソウルは私利私欲の為の道具ではありませんわ！」

「うるさいうるさいうるさい！！私利私欲の為ではなく、正義の為の波動砲なのよ！私は戦うわ！正義の為に！！」

純の説得も儚く終わる。

「景子！貴女も何かいいなさい！！」

千明もすっかり余裕をなくしている。

「……………恥を知ります。」

「……………」

.....」

誰が予想しただろうか？銃器を手に暴走する悪魔に、追い打ちをかけるなんて。

全員が顎が外れるほど口を開けて景子の行動を称える。

「学べばいいんだよ！」

騒がしい女性陣に蕾斗が声をかける。

「知らない事は恥じゃないよ、知らない事をそのままにする事の方がよっぽど恥だと思うけどな。」

重ね重ね言う事になるが、彼も悪気があって言ってるわけではない。景子はカチンときたようだが。

「ライ君いい事言うじゃない！」

落ち着きを見せた火を、ここぞとばかりに消してやろうと千明が風を送る。

「そ、そうよね、私だって知らない事いっぱいあるもん！」

千明に乗っかり葵も風を送る。

「そうでございますわ！知らない事は学べばよろしいのです！」

最後に純の送る風で火は消えた.....かに見えた。

「.....恥は恥なのです。」

また景子が火をつける。

誤解のないように言っておくが、景子は馬鹿にしているわけではない。翻訳すれば「自分の無知を反省してきちんと学ばければ、それこそ恥になる」と、言っているのだ……と思う。

ワナワナと震える翔子を庇うべく、蕾斗が火の中へ突入する。

「どうしてそんな事言つのさ？君だって知らない事くらいあるだろう？」

「……………ない。」

「いや、あるね！そんなところで意地張るようではまだまだ子供だね！」

この小説で度々出て来るパターンだが、逆鱗に触れてしまう瞬間がある。

『子供』という単語は、景子にとっては逆鱗なのだ。

「お前といくつも変わらないのです！」

「中学二年生と高校一年生は差があると思うけど？」

「目黒羽竜……………吉澤あかねに続いてうつさい男なのです！」

飛び火してまた別の火災が起こる。

頑固さでは絵里の上に行く景子だ、相手が蕾斗なら尚更退かない。

「どうすんの？」

こうなった景子を止めるのは不可能な事は千明も知っている。

「どうしよう?。」

葵もお手上げた。

「元は千明ちゃん、貴女のせいではありませんこと?。」

純が責任を千明になすりつける。

「な、なんで私? 葵はどうなのよ!?。」

「私は知らないからね!。」

責任追求などこんなものだ。

「面白そうな事をしてるみたいだけど、そろそろ行くわよ。」

那奈が呆れ返りながら声をかける事で、ようやく鎮火に至る。

「運のいい野郎です。」

「お褒めの言葉ありがとう。」

景子も蕾斗も互いに皮肉って一応の終わりをさせる。

「どちらにお出かけなさってたんですか？」

朝、目を覚ました時には既にいなかったヴァルゼ・アークに由利が問う。

「聞きたいのか？」

少し眠そうにしながら背伸びをする。

「いけませんか？」

「秘密にしておくよ。」

「…………… 13人もの女を虜にしてまだ飽き足りませんか？」

「おいおい、勘弁してくれ、俺はプレイボーイじゃないぞ？」

「十分だと思いますけど？」

由利が妬いているとは考えにくいのだが…………… まあ、からかわれているのだろう。

「そうあまりいじめないでくれ。」

「フフフ……総帥の困った顔、好きなんです。」

今日はやけにテンションが高い。由利とは別人のようだ。

「なんでもいいが、バベルへ行く準備は出来ているのか？」

女が普段と違う顔を見せる時は、気をつけなければならない。
いかに忠実な部下とはいえ、種族は女。
深追いは禁物だ。

「はい。いつでも出発出来ます。」

いつもは笑わない由利が笑顔でいる事が不可解で、ヴァルゼ・アイクも困惑する。

「……………何かいいことでもあったか？」

「いいえ。特には。さ、行きましょう、みんな待ってます。」

「あ、ああ。」

シャキッとしないが、良しとする。

今日の雲行きははっきり行つて悪い。太陽は出ているが、すぐにでも機嫌を損ねそうな空だ。

オノリウスが何を考えているのか検討もつかない。

天使を倒し、メタトロンを倒し、不死鳥族を根絶やしにした。
それでもまだインフィニティ・ドライブには辿り着かないのは、自分を取り巻く『法則』が全て破られてないからなのか？

（余計な事は考えまい。それを確かめにバベルへ行くのだ。）

一人考え事をしていて、いつの間にかレリウーリアのメンバーが並んでいた。約一名を除いて。

「総帥、みんな揃ってます。」

もう既にいつもの厳しい由利に戻っている。

「これからバベルの塔へ行く。かつて人が天を目指した遺産に。言うまでもないが、観光に行くわけではない。魔導書の手掛かりがない今、この時代の最後の象徴でもあるバベルが頼みの綱になる。これは推測だが、オノリウスは多分バベルにいる。気を引き締めろ、バベルはいわくつきの場所だ。いいな？」

言葉はないが全員黙って頷く。

何か任務を言い渡す時、ヴァルゼ・アークはあまり詳しい説明をしない。

基本的には「任せる」としか言わない。

それが今回は気を引き締めるとまで言った。

ヴァルゼ・アークが警戒しているのはオノリウスなのか？それともバベルか？

悪魔の間では、こんな説がある。

人は神に近づく為にバベルの塔を建設したわけではないのではないか？

もし、その行為が神の怒りに触れたのならば、神は何故バベルの塔を破壊しなかったのか？

人間の言葉をバラバラにしてしまうなんてまどろっこしい事をしなくても済んだはずだ。

だから悪魔達は考えた。バベルの塔には何かとてつもない秘密があるのではないか？

ヴァルゼ・アークは蕾斗に言った、世界再生は人の力ではない……と。

レリウーリアの誰もがバベルに何があるか知らない。

ただ一人、ヴァルゼ・アークだけが知っている。

人が目指したもの……それはバベルの塔を登りきればわかる。

第十九章 レ・ミゼラブル

羽竜達はバベルの塔の前まで来ていた。

近くで見ると、どこまでも伸びる塔の存在感に飲まれてしまいそうになる。

「何階あんだよ……………」

塔に来たからには、求めるものはてっぺんまで行かなければならないだろう。

それを考えれば羽竜のぼやきも納得出来る。

「国王はここへ何をしに来たのでしょうか？」

ジオルジュがセイラに聞く。

彼女もわからないのを知って。

だから返事は決まっている。

「調査としか聞いてないわ。ホントに興味がなかったの。こんな事ならもっと詳しく聞くんだったわね。」

「羽竜、魔導書はバベルの塔にあるというのは間違いなんだな？」

次の質問の答えは羽竜に求められた。

天使と悪魔も魔導書を狙って戦っていた、そしてこの時代でも天使と悪魔は現れた。そして魔帝はバベルの鍵を探していたところを見ると、魔導書はバベルにあるのだと推測が立つ。

ジオルジュの質問はまだ魔導書がないものだと思っているからだろ
う。

「絶対とは言えないけど、魔帝は魔導書を探している。そしてバベルの塔に行こうとしてたんだから間違いはないと思う。」

「頼りない返答ね、それよりも魔導書があれば地上を元に戻せるかもしれないって本当なの？」

メグも魔導書に興味を抱いているらしい。

「なんでも望みが叶う。平たく言えばそういう代物なんだ。物欲を満たすだけのものならば、天使も魔帝も欲しがらないだろ。きっと神でさえ欲しい力なんだよ。」

羽竜が皆まで言わなくとも予想はつく。

ただ羽竜とあかねまでもが魔導書存在を否定しなかった事が、セイラ、ジョルジュ、メグには信じられないのだ。

実際には、羽竜もあかねも魔導書など見た事もない。

レジェンダと出会い、天使と悪魔との出会いから魔導書は存在すると確信を得ている。

「なににせよ、この塔に登ればはつきりする。」

セイラの心は既に塔に登りつつあった。

「あるのは希望か……………」

「それとも絶望か……………」

ジョルジュの言いかけた事をメグが繋ぐ。

「蕾斗君大丈夫かな？」

シリアスな雰囲気も、あかねの台詞で消されてしまう。

「蕾斗も心配だけど、今は行くしかない。」

鬼が出るか蛇が出るか……羽竜も塔に登る決意を固める。

驚いたのは、塔の入口には扉がなかった事。魔帝はセイラにバベルの鍵をよこせと言った。

それはバベルの塔の入口の扉の鍵だとばかり思っていた。

羽竜だけでなく、みんなが同じ思いだった。

五人は無言で塔へ入ろうとする。

「待て！！！」

中年男のでかい声が辺りに響く。

「あれ見て！！！」

メグが指ではなくカルブリヌスで示す方向には、太陽に照らされた軍隊がいる。

「人間………？」

背中に翼が無い事をあかねが何度も確認している。

「ローマ帝国の兵士か……！」

ジョルジュが兵士の掲げている旗を見て焦りを見せる。
相当ヤバイ……人間とはいえ味方でない事は確かなようだ。

「フランシア国王妃、セイラ・アイブラックだな？」

声の主はセイラが来るのを知っていたのだろう、完全な待ち伏せだ。

「ローマ帝国国王……………ネロ…か……………」

セイラがその名を口にした。

「残念だが、バベルの塔に登らせるわけにはいかん！」

「何の権限があつてそんな事を？」

「プリンセスセイラ、地上は天使によつて散々な状況にある。この状況下で世界を統治するのに相応しいのは我がローマ帝国だけだ。よつてバベルの塔にある魔導書はローマ帝国国王である私のものだ！」

ネロの言葉を聞き逃さなかった。彼は言い切った。魔導書がバベルにあると。

「みんな、聞いたな？」

羽竜がにやける。

自分の読みが当たっていた事の嬉しさからだろう。

「でもどうすんの？おそらく千人はいるわよ？」

セイラが四人の『付き人』に策を求める。

「私が行きます！」

答えたのはメグ。

「行ってくて、一人じゃ無理だろ。」

「羽竜君、私も残る。」

「あかねちゃん！」

メグとあかねが視線を合わせ頷く。

「女性二人では心元ない。全員でやった方がいい。」

「いや。ジョルジュ、心配はいらなと思うぜ？メグも強いし、吉澤はエアナイトだからな。」

羽竜に言われあかねの顔が赤くなる。

「羽竜………今なんて言った……？あかねが……エアナイト……？」

状況を忘れジョルジュが驚く。

「有り得ん……エアナイトの能力は一子相伝。私の他にエアナイトは存在しえない。」

「事実は事実だよ。だからここは二人に任せよう。俺達はこの高い塔に登るのが先だ。」

根掘り葉掘り聞きたい事はあるが、羽竜の言う通り余裕はない。

「任せたぞ、吉澤！メグ！」

「うん。私達の事は心配しないでいいから早く行って！」

あかねはミクソリデアンソードを具現し、ネロ率いる約千人の兵士を相手する為に構えをとる。

「ただか千人程度なら、あかねちゃんと二人で十分でしょ！」

「メグちゃん……あんまりプレッシャーかけないで……」

そしてネロが剣をかざして振り下ろすと、それに合わせて兵士達が攻めて来た。

「よし、セイラ！ジョルジュ！行くぞ！」

羽竜がいち早くバベルの中へ入って行く。

「あつ……待ちなさい！どこの世界に主人を置いて行く者がいるのよー！！」

羽竜に続いてセイラもバベルへ向かう。

「セイラ様！！……しかたない。メグ、あかね、無理はするな！！」

騎士である以上女性に戦いを任せる真似はしたくないのがジョルジュの本音なのだが、正直羽竜とセイラだけではそれもまた不安になる。

自分の任務はあくまでもセイラを守る事。

セイラの側を離れるわけにはいかない。

無理はするなという言葉の妥当を問えば、この場合は妥当ではなかっただろうが、ジオルジュの気持ちは伝わったはずだ。

「あかねちゃん、来るわよ！」

「うん。私が技でまとめて何人かずつ倒すから、零れ玉はお願い！」

「OK！」

「デイストーション！！」

空間を刻む技であかねが仕掛ける。

刻まれた空間に囚われた第一波の兵士達が崩れるように倒れる。

「凄いの一言ね。でも私も負けないから！」

メグは持ち前の運動神経を活かし素早い動きでキレのある攻撃を見せる。

僅か数秒で十数人を倒す。

「な、なんだあの少女達は！」

周りで兵士達がどよめき始める。

「ええいつ！！何を戸惑っている！！たかが小娘二人だぞ！！こっちは何人いると思ってるんだ！！さっさと片付ける！！」

数で圧せばなんとかなる。

ネロの持論だ。

ここに来て戦う相手が人間になるとはあかねは思っていなかっただろう。

バベルの塔の前はたった二人の少女を殺す為に悪戦苦闘する千人の兵士でひしめいていた。

第二十章 神の苦悩

塔の中は何もなかった。壁に沿って螺旋状の階段が延々と続いているだけで、真ん中は吹き抜けになっている。

円錐型のバベルの塔は直径は約百メートルはあるつかという広さだ。科学のない時代によく人の力だけで築き上げたものだと感じる。

「ねえ、羽竜……」

「ん？なんだ？」

階段の途中でセイラが立ち止まり羽竜の方を振り向く。

「貴方とあかねって、どこから来たの？」

「なんだよ唐突に。」

「だって、魔導書はあるって断言したり、人とは思えない力を見せてくれたり、魔帝の事を知ってたり……まるで何もかも知っているような素振りをするからもしかしたら異世界から来たのかなって」

「異世界ねえ……」

「的は得ているが、千年も先の未来から来たなどと言っても信じようがあるまい。」

「まあなんだ、その辺はまたゆっくり話してやるよ。」

「そんな事より………出迎えが来たようだぞ。」

ジョルジュに言われ階段の先を見る。
そこに現れたのは……

「はじめまして、目黒羽竜。プリンセスセイラ、こちらは一応久しぶりってとこかな？ジョルジュ・シャリアン。」

「あなた………レリウーリアか！」

黒いダイヤのような鎧を見れば、彼女が悪魔である事は羽竜にはたやすくわかる。

「そうよ。私の名前は綾女はるか、破壊神アスモデウスよ！」

名前の重さとは裏腹に天真爛漫さが際立つ。

「破壊神？悪魔に会ったのは今が初めてだが？」

「相変わらず堅物ね、ジョルジュ。」

困惑するジョルジュはそっちのけでセイラがしゃしゃり出る。

「悪魔にしてはかわいらしいじゃない。」

「お褒めいただきありがとうございます………プリンセス。でも貴女に用はないの、私は目黒羽竜とジョルジュ・シャリアンをここで足止めする任務を仰せつかってるのよ。」

「……………ヴァルゼ・アークか。まさかもつ魔導書を……………？」

「心配いらないわ、目黒羽竜。『まだ』そこまで至ってないから足止めに来たのよ。」

足止めと言ってるわりには、殺気がむんむんと漂ってくる。

手にしてるおそろくはロストソウルであろう細剣を軽く何度も振り、羽竜とジオルジュを舐めるように見つめる。

「私に用がない？なんて失礼な女なの！」

どうもセイラは自分に興味がない者に対して怒りをあらわにする癖がある。

それが男でなく女であつてもだ。

「……………羽竜、セイラ様と上を目指せ。こいつは私が引き受ける。」

羽竜とセイラの前に出てエアナイトとしての証の剣、パラメトリックセイバーを抜く。

ジオルジュはあかねとは違い、剣を常に携帯している。

その剣を抜く様は、彼の実力を映すように華麗で、それでいて力強い。

「ジオルジュ、一人でなんて勝手な真似は許さないわ！羽竜と力を合わせて……………」

「わかった。あんたに任せるぜ！」

「は、羽竜！！貴方まで私を差し置いて……………」

「済まないな。必ず後から駆け付ける。」

「はあ……………これだから男は嫌いなよ。すぐ自分達の世界に浸るんだから。ま、しょうがないわ。ジオルジュ、負けは許しませんからね!」

「ありがとうございます。」

あかねとメグの件も手伝い、ジオルジュの騎士としての魂に火が点いた。

相手が悪魔ともなれば尚更だ。

「私は目黒羽竜とジオルジュ・シャリアンって言ったのよ? 聞いてなかった?」

「悪いな、アスモデウス。そこ……………通らせてもらっ!」

トランスミグレーションを大きなモーションで振る。

「甘いつ!」

赤い衝撃波をロストソウル、オメガロードで回避しようと打って出るが、

「……………なっ!」

至近距離からジオルジュが攻撃体勢に入っている。

羽竜の放った衝撃波をかわしてジオルジュの剣を受け止めれば身は守れる。

しかし羽竜とセイラを通してしまふ事になる。

ヴァルゼ・アークから受けた任務は『セイラは通しても構わな

い。羽竜とジョルジュをしばらく足止めする事』だ。

時間にして数秒程度だが、考えた末、羽竜とセイラを通す事にした。

「まっ、しょうがないか！」

衝撃波を避け、そのまま一回転してパラメトリックセイバーを受け止める。

「先行ってるぜ！」

アスモデウスを尻目に羽竜とセイラがバベルの頂上を目指し螺旋階段を駆け上がって行った。

「女と言えど、戦場に立った以上は覚悟はあるのだろうな？」

「女と言えど、戦場に立った以上は覚悟がありますよ！」

茶目っ気たっぷりにウィンクをして見せる。

「その余裕が命取りになる事を教えてやろう。」

静穏なバベルの中に鏗ぜり合う音が激しく響き始めた。

「ククク……久しぶりだな、友よ。」

赤い髪の男は黒い髪の男にそう言った。
だが黒い髪の男は歓迎はしていない様子だ。

「その友と言うのはやめてくれ。あまり馴染めなくてな。」

「そう言うな、再びお前に会えるのを楽しみにしていたのだからな。」

過去に^{ここ}来た時から会う事になるとは思っていたが、実際に会つとやっぱりその独特のオーラに気が滅入る。

「茶番は楽しめたか？」

ヴァルゼ・アークが魔帝の横で地上を見下ろしながら感想を聞く。

「まあまあだな。あやつが終焉か？ 実にいいオーラを持っている。」

バベルの途中の踊場で仮想空間を創り語り合う。

空間を創ったのはヴァルゼ・アーク。そうでもしなければ部下達に戸惑いを与えてしまうからだ。

アスモデウスに任務を与えたのもそれだけの事。
早々と追い付かれては困る。

バベルの途中までは吹き抜けを飛んで来れたが、ここから先は結界で浮遊術は使えない。

条件が羽竜達と同じになる。

「どうだ？余から受け継いだ力は。」

「気に入ってるよ。あんたのお陰で理想を叶えられる力を得たのだから。」

「フツ……それは光栄だ。たが余の力が無くとも、お前は理想を叶えられただろう。気付いているのだろうか？自分が何者なのか。」

「ああ。だが正直なところ、時々迷いも生じる。彼女達との生活は絶望の淵をさ迷っていた俺を救ってくれた。彼女達も同じだろう。今のままでも、満足な人生は送れる………そう思ってしまう。」

「それはお前が決める事だ。余がお前に力を渡したのは、ただ天使どもを滅ぼして欲しかっただけだから。神でさえ抗えない運命………それを打破する為のインフィニティ・ドライブ、是非お前に手に入れてもらいたい。」

「あんたはいらないのか？千年前………この時代であんたも求めた力じゃなかったのか？俺の中にある魔帝の記憶にはそうあるが？」

「………余はこの時代で果てる事が運命づけられている。それは変えられん。変えられん証拠はわかっているはずだ。余が果てるからこそ今のお前が存在する。運命とは意味が違うが、既に決まっちゃった事は変えようがない。」

「随分潔いじゃないか……」

「神として、魔帝として醜態を晒すわけにはいかん。わかってくれていると思うが？」

「わかってるよ。だから敢えて聞いたのさ。」

ヴァルゼ・アークが仮想空間の術を解こうとする。

「健闘を祈る。我が友よ。」

魔帝の気持ちに片手を後ろ向きで振って答える。

その背中をほほえましく思い、仮想空間が解かれると同時に姿を消す。

「友………か……」

仮想空間にいた事すらわからない部下達が空間以前の時間の続きをしている。

魔帝ともあろう人物が、人間である自分を友と呼ぶ。その心境はヴァルゼ・アークにはわかっていた。

ヴァルゼ・アークという名前も元は魔帝のもの。

少し冷たくし過ぎたかと思うも、さっきまでを封印して仲間の元へ行く。

「みんな、ここからは歩きだ。気合い入れて行こうじゃないか。」

ヴァルゼ・アークの言葉にみんな驚く。

珍しく人間的な事を言ったからだ。

男としての意見を言う事はあっても、人間としての意見は言わないの
がいつの間にか信条になっていたのだが。

誰一人文句も言わず、はしやぎながらヴァルゼ・アークの後に
続く。

まるでハイキングでもするかのように。

苦悩……………それだけの価値はある。

第二十一章 t w i c e

「セイラ……」

「え？何？どうしたの、羽竜？」

二人は黙々と塔を登り続けていた。

ひたすら同じ景色が繰り返される空間は、会話が無くなってしまえば自分の意識の中で様々な事を考えてしまう。

その中で羽竜は考えていた。

セイラと自分の境遇が似ている事を。

人は急に環境が変わり、静寂の中で協力しなければならぬ時、何故か相手に気持ちが動く。

「お前………その……両親いないんだよね？」

結論から言ってしまうえば、蕾斗やあかねがいるとは言え淋しくないと云えば嘘だった。

忙しい両親とは年に数回しか会えない。

気丈に振る舞う姿は淋しさの裏返しに他ならない。

「何よ……突然………」

わざわざ立ち止まる事はしない。

会話が目的じゃないのだから。

「……俺もさ、毎日一人でさ……まあ吉澤とか、蕾斗って言う友達と、後マント被った変な奴もいてはくれるんだけど………なんて言うか………」

「何が言いたいのか？はつきり言いなさいよ！男の子でしょ！」

「……………淋しくないのか？」

前言撤回、セイラの足が止まる。

「……………なんで？」

「なんでって言われても、なんとなくそう思ったただだよ。まあ、俺の両親はまだ生きてるからセイラとは違うかもしれないけど……

……」

しばらく何も言わなかったセイラだったが、羽竜に背を向けたまま口を開いた。

「……………淋しくなんかない。」

「家族がないのか？」

「家族ならいる。」

羽竜が言い終わる前に言い切る。

「私にとっての家族は、国民よ。国王である父が病死して、王妃だった母も後を追うように病死したわ。たった一人残されたと嘆いていた私を、国民は温かく迎え入れてくれた。苦しい時も、嬉しい時も国民と一緒に泣き、笑ってくれる。私は一人じゃない。貴方は家族と友人を分けてるみたいだけど、絆は分けようがないじゃない。両親がいなくて淋しくないか？あかねもその蕾斗とか言う人

もマントの変な奴も、かわいそうよね？」

何が気に入らなかったか羽竜にはわからないが、まくし立てるように喋るところを見る限りかなり怒っているのはわかる。

「どっという意味だよ？」

「だってそうでしょ？貴方の生活環境なんて知らないけど、あかね達は羽竜の淋しさなんて気付いていると思うわ。きっと色々気遣かってるんじゃない？あかねを見ていてそう感じたわ。でも当の本人は自分の事しか考えていない。かわいそうじゃない。」

「俺が自分の事しか考えてないだって？俺はみんなの事とか色々考えてる！」

「何を考えてるっていうの？あかねとメグ、ジョルジュが今、命を賭けて戦ってるのに、こんなところでわけのわかんない話始めて……彼らがどうして戦ってるのか考えてない証拠でしょ？私達は辿り着かなければならないの！塔の頂上まで！例え肉体が引き契られても！」

説教を喰らうとは予想してなかった。

同情を買うつもりで言ったわけでもなかったし、怒らせるつもりもなかった。

「……………行きましょう、まだ先は長いわ。」

一度も羽竜を見る事はなかった。そして二人はまた歩き出す。バベルの頂上を目指して。

宣戦布告されたように、ジョルジュは女であるアスモデウスに
対してまるで容赦がない。

階段の幅は五メートルはある。その決められた範囲の中で、舞
を舞うように激しい攻防を繰り返していた。

「これよこれ！ゾクゾクしちゃう。」

エアナイトの能力をフルに使うジョルジュの攻撃に興奮を抑制する
のは難しい。

アスモデウスの全身は電流が駆け巡るような感覚に見舞われている。
本人にはそれがたまらないのだ。

「変態め……………」

ジョルジュは調子を狂わされっぱなしで集中力を失いそうになりな

がらも、若い女の悪魔と渡り合っている。

「変態？私が？うゝん……否定は出来ないかも。痛い嫌いじゃないしね。」

一言半句ですら、堅物のジョルジュには刺激が強い。

「何を考えてるかは知らんが、いつまでも貴様の遊びに付き合ってる暇はない。」

「遊び？失礼ね！れっきとした仕事なんですけど？だいたい状況は私の方が有利じゃない！付き合ってやってるみたいな言い方やめてよね！」

「キーキーうるさい悪魔だ。」

「なんですって？」

「私はお前のようなうるさい女は好かん。」

「は……はあっ！？私だってあんたみたいな堅物好きじゃないわよ！ホント、千年前もムカつく男ね！」

「お前は私を知っているようだが、さっきも言った通り悪魔に知り合いはいない。」

至って真面目なジョルジュの態度は、アスモデウスには受け入れ難い。

ジョルジュ自身も、これ以上調子を狂わされないようにあれこれ考えた末の言動だ。

心理戦と呼ぶにはお粗末ではあるが、効果は抜群のようだ。

「屁理屈ばっか言って！いいわ、足止めって言ったって目黒羽竜が先に行ったのではあまり意味がないし、ここらでケリをつけましようか！」

「来るか！破壊神！」

「殺しはしないわ。でもしばらく寝てもらおうから！」

「その余裕が命取りにならぬといいがな。」

「人間のくせに生意気！行くわよ！色即是空！！」

オメガロードを振り上げ、技を放つ。

放たれた技を読み、コンマ数秒先を読む。

アスモデウスの技、色即是空の軌道はこのまま真っ直ぐ自分のところに向かって来る。

防ぐには威力が強すぎる。ならば回避して直ぐさま攻撃を仕掛けるしかない。

ほんの一瞬の間に計算する。

「今だ！」

色即是空を横に回避、そのままアスモデウスの懷に飛び込みパラメトリックセイバーを彼女の腹に刺す。

「嘘……………」

目標を失った色即是空はバベルの壁を破壊、アスモデウスはジョル

ジユのパラメトリックセイバーが身体を貫通する前に瞬間移動で逃れる。

「テレポートとは……………」

致命傷は与えられなかったが、ダメージは十分だと思った。
しかし悪魔の身体に傷を残すには浅過ぎた。

見る見るアスモデウスの傷は塞がり、何事もなかったかのように綺麗に戻る。

「そんなバカな！傷が塞がっただと！？」

「油断し過ぎたかな？危ないところだったわ。」

傷が塞がったところを撫でて安心する。

「なんか、やる気失せちゃったし今回はこの辺にしておいてあげる。
またね、ジオルジユ。」

言葉通りやる気のない素振りでもバベルの吹き抜けを飛んで行く。

「……………なんだったんだ？一体……………」

終始アスモデウスに振り回されっぱなしで余計な疲れだけが残った。
とは言っものの、彼女が本気でなかっただけ有り難く思うしかないだろう。

ジオルジユも本気だったわけではないが、本気でぶつかり合ってたなら互いに無事では済まなかったはずだ。

「あんなのがまだ他にもいるのか……………」

ある領域に達した者ならば、実力を出し切らなくとも相手の強さを計り知る事が出来る。

先に行った羽竜とセイラを案じ、ジョルジュは飲み込まれそうなバベルの階段を駆け上がって行った。

第二十二章

clear sky

あかねはある意味、普通の人間とは違う。性格は至ってまとも。むしろ清楚可憐とも言えるおしとやか（今ではそうでもないが）だ。違うのはエアナイトの能力を秘め、戦闘行為に優れているところだ。

だから今の光景は本人にはあまり驚く対象にはならない。やられてる方はたまらないのだろうか。

メグは？

彼女はあかねのような特別な能力は持っていない。

しかしながら、あかねに引けを取らない活躍振りを見せている。メグの優れているところは素早さ。俊敏でキレのある動き。

ローマ軍は彼女の動きに全くいいようにやられている。

「どこに消えた!？」

消えたわけではないのだが、消えたように『見える』のだ。

兵士達は口々にそう叫んで仲間に確認を求めるが精一杯。

叫んだ瞬間には意識はない。

「たかだか千人程度だと思ったんだけど、意外に疲れるわね。」

メグがカルブリヌスを杖変わりに一息入れる。

敵の数も残り僅かになった事からの余裕だろう。

「さてと、あかねちゃんどうする?」

「どうって……………言われても……………」

あかね的にはメグほどのモチベーションは持ち合わせてない。

何度経験しても、戦うという行為に慣れる事はない。

「煮え切らないなあ、ここまで来たら行くっきゃないでしょ!」

「だつて……」

「だつてじゃないの! そんな事言つてると羽竜取っちゃうよ?」

「なっ………!」

引き攣る顔を必死に堪えるところを見ると、やっぱりあかねは羽竜に好意を寄せているのだと思えた。
メグの真意は定かではないが……。

「うふふ。凶星があ……」

メグの意地悪にしてやられたと、あかねが顔を真っ赤に染める。

「メグちゃんの意地悪!」

その光景にネロも怒り浸透し、顔を真っ赤に染めた。

「陛下、ここは一旦引き上げましょう! あの娘達は人間ではありません!」

冷静に判断する必要などどこにもない。たった二人の少女に大勢の仲間が倒された事実を考慮すれば、この兵士の判断は間違っていない。

「黙れっ!!!! このまま帰ったら他の国から笑い者にされてしまう

ではないか！総攻撃だ！行けっ！！！」

だが僅かに残った兵士達は誰ひとりとしてあかねとメグに挑む者はいない。

ネロのカリスマ性が露骨に現れた瞬間だった。

どう考えても二人に勝つ見込みはないのは明らかだ。

世界は天使により火と血の海。そんな状況下で、主君の野望の為に命を捧げるのが馬鹿らしくなる。

「何をしている！！！！？早く行かんかっ！！！」

ネロは空気を読むのは苦手なようだ。

ただ怯えているだけだと思っているのだろう。稚拙な理想すら持ち合わせていない主君に仕える者などどこにもいない。

「なんかモメてるね……」

肩を空かされメグが眉をひそめる。

「国は民………ヴァルゼ・アークが言ってた言葉。王様一人で国が成り立っているわけじゃないのよね。」

民の支持を得る事が出来ないネロを、あかねが哀れむ。

兵士達はあかねとメグを見て兜を放り、戦う意志がない事を伝えどこかへ去って行く。

一人残されたネロが兵士に一生懸命何かを叫んでいるが、空吹かしに終わる。

「観念しなさい。貴方は見限られたのよ。」

カルブリヌスをネロに向けメグが負けを宣告する。

「く……………こんなはずでは……………」

バベルの塔へ入る事すら叶わず、騎乗の王は二人の少女に命を握られた。

「メグちゃん……………」

あかねが何かを言いたそうにメグを見る。

「……………ふう。わかってるって！もはや殺す価値もないわ。国へ帰っても居場所はないと思うけど、さっさとどこへでも行きなさい。」

ネロの首を取ればあかねに怒られる気がして、取るにも取れない。メグはカルブリヌスを鞘に収める。

「お、覚えている！！」

どこへ行くのかは知らないが、命からがらメグとあかねから逃げて行く。

「これでいい？」

「うん。ごめんね。」

メグが手柄を欲しがっていたのはわかってはいたので、悪い気がして謝る。

メグもあかねの気持ちを察し、二度目のため息を笑顔でついて諦め

る。

「ま、いつか。」

「ありがとう、メグちゃん！」

「じゃあセイラ様達のところに行こうか！」

「うん。」

疲れ果てる様子もなくバベルへ行った羽竜達を追う為に、急ぎ足で塔へ向かう。

「!!!？」

すると急にあかねが立ち止まり顔を青くする。
当然メグも異変に気付く。

「あかねちゃん？」

「……………そんな……………まさか……………？」

あかねはゆつくりと後ろを振り向き、遠くの空を見る。
メグもその方向を見るが、何も見えない。

ただ、あかねが何かを感じ取っているのは確かだ。

「来る……………」

おしとやかなあかねが険しい表情を見せる。
そしてメグの目にもそれは映る。

「ちょ……………あれ……………何？」

「……………天使よ。」

遠くの空から徐々に姿を見せる大群。

あかねの言った通り天使だ。

背中の翼を見れば一発でわかる。

「天使つてのは見ればわかるけど、何なの……………あの数……………」

離れた場所から見ても、近づいて来る度空を覆ってしまうような軍勢に、さすがのメグも舌を巻く。

数にすれば一万、二万の比ではない。だがその大群は真つすぐバベルへ向かって来ている。

「ど、どうしよう……………」

さっきまでの勢いも虚しく、メグが弱気になる。

二人で相手するには無理があるからだ。

ところが、今度はこちらがやる気に燃える。

「バベルには羽竜君達がいる。羽竜君達には魔導書を手に入れてもらわなければいけないし、ここは私達が引き受けたんだから責任を全うしましょ！」

本気かどうか聞き返そうと思ったが、あかねの表情を見れば愚問だと知る。覚悟を決めるしかないようだ。

「うつ……………勝てるかな……………」

「わからない。でもやれるとこまでやるしかないよ。」

弱気なメグに曖昧な返事しかあかねにはしてやれない。

あと数分で来るだろう白き戦士達との戦いの生存率は限りなくゼロに近い。

やれるところまで……………一番正確な答えなのかもしれない。

「たった二人で挑むには無謀過ぎだろう?」

後ろから声がして、ハッと我に返る。

「サマエル!!」

真っ先に声をあげたのはあかねだった。

「貴方……………確か試験場にいたわよね?」

サマエルの強さは羽竜との戦いを間近で観戦していたメグにはわかっている。

「助けてくれるの?」

「ククク……………助けてやるうなんて気はさらさらない。」

期待を込めて聞いたメグの言葉を真っ向から否定する。

「じゃあ何しに来たの?」

「天使には腐るほどの借りと恨みがあるからな、現世では返せな^{あいちら}か

った借りを返してやるのさ。」

「随分な執念ね、とても天使とは思えない考え方じゃない？」

「フツ、なんとも言えばいい。」

あかねとサマエルのやり取りに困惑するメグだったが、サマエルが天使と聞いて余計に困惑してしまう。

「天使？この人が？だって翼ないじゃん？それに現世って……何だろうなってるの？」

「メグちゃん、今は説明してる暇はないわ。生きて帰れたら、教えてあげる。」

収めた剣を再び抜き、天使を迎え撃つ準備に入る。

「ま、せいぜい羽竜を悲しませないようにする事だな。」

「い、今は関係ないでしょ！」

冷静に捉えればそんなに深い意味の言葉ではないのだが、あかねにはサマエルの言葉が冷やかしかし聞こえたようだ。

「クク……さあ、来たぞ。」

第二十三章 巡り会う者達

アスモデウスが現れた後は何もなく、ただセイラと二人黙って塔を登って来た。

そして、ようやく頂上まで来た。

そこは雲と雲の間に存在した。ただ広だけの空間の真ん中には、サッカーボールほどの水晶が飾ってある。

「ここがバベルの頂上……父上はここまで来たのかしら……？」

バベルには近づくなというのがセイラへの最後の言葉だった。そして魔帝はセイラにバベル鍵を出せと言った。

自分がバベルに関係しているのは明白、緊張がセイラを襲う。

「すげえ……上と下に雲があるぜ！」

そんなセイラの気も知れずに塔の窓から顔を出して感激している羽竜に溜め息が漏れる。

「あのね、観光に来てるんじゃないんだから少しは緊張感持ちなさいよ！」

「わかってるよ、だから空気を和ませようとしたんじゃないか。」

「和みません！」

「んだとっ！この馬鹿姫！」

「ば、馬鹿！？無礼な！！主に向かってなんて口の聞き方！」

「誰が主だ！誰が！勝手に部下にするなよな！」

これが羽竜の計算だったかどうかは怪しいが、セイラの緊張が多少なりとも和らいだのは事実だ。

「はあ……疲れるからもういいわ。」

「それはこっちのセリフだ。」

誰もいない空間に二人きりというのが羽竜もセイラも苦手だ。

「お前とじゃれてる場合じゃない。とりあえずあの部屋の真ん中にある怪しげな水晶でも調べてみるか。」

いかにも何かありげな雰囲気漂ってくる水晶に羽竜が近づき、占い師のような手つきでゴソゴソと球面を這わせる。

「どうせならこの世界の明日でも占つてよ。」

世界の大陸を見て回ったわけではないが、わざわざ見なくとも天使達によつて『肅正』されているのは間違いない。

あれだけ戦況の均衡を保っていたのに、種族が違っただけであつという間に絶滅寸前まで人間は追い込まれた。

愚かな人間達に肅正を下したのならそれと仕方ないとセイラは思っていた。

しかし、天使達の真の目的は人間達への肅正ではなく、あるかないかわからない魔導書を探す為。羽竜がそう言った。

「ダメだ、なんも映んねーよ。」

「あんたまさか本気で占いしてたの？」

「んなわけねーだろ。なんか仕掛けでもあんのかと思ったただけだ。」

よく考えてみれば、バベルの塔へはかなり容易に入る事が出来た。それに途中苦労した事なんて塔に登るのに疲れた事だけ。

天使や悪魔までもが欲しがる魔導書があるのなら、もっと試練の要素があっても不思議ではない。

「羽竜、ホントにここに魔導書があるのかしら？」

「どういう意味だ？」

「なんでも願いが叶うような代物を保管するには、足りない要素が多過ぎなのよ。」

「簡単過ぎるって事か？ここまで来るのに。」

「ええ。」

「でもアスモデウスがいたし、姿は見えないけどヴァルゼ・アーク達もきつとどっかに隠れてるはずだ。」

「でもそれが魔導書の有無を決定づける証拠にはならないわ。彼らも魔導書の在りかがわからないでいるのなら、間違った見解をしてもおかしくないんじゃないかしら？」

そう言われると一理ある。

ヴァルゼ・アーク達は千年前に魔導書を探し出す事は出来なかった。

天使達も。

過去に戻って来たからと言って、魔導書を探し出せるとは言えない。

「だけど……………」

羽竜が言いたいののは、羽竜達の知るヴァルゼ・アーク達は千年も先の未来から来ているのだから、過去で考えられなかった事を実行したのではないかという事。

だとすると、ヴァルゼ・アークに誘導された結果とは言え、バベルに來た事は間違いじゃない。

でも、あのヴァルゼ・アークは自分の知るヴァルゼ・アークとは違った。

ヴァルゼ・アークは自分の事を『俺』と表現するのに対し、あの時は『余』と表現した。

それに意味もなく『魔帝』の姿になるような人物でもない。

……………なんとなくそう思う。

「魔帝は私にバベルの鍵の在りかを聞いて來たわ。最初は塔へ入る為の鍵なのかと思ってたけど、どうやら違うみたいね。」

そう言つて水晶を見つめる。

「……………セイラ、まさか……………」

「……………そのまさかなんじゃない？父上がバベルへ近づくなと言つたのは、私自身がバベルの鍵だからよ。」

薄々感づいてはいたが、なかなか口には出来なかった。

バベル最後の部屋にあるのは水晶だけ。

『鍵』を必要とするのはその水晶だけだろう。

「待てよ、お前がバベルの鍵だなんてわかんないじゃないか？」

「触れてみればわかるわよ。」

「だから待てて言ってんだよ。もし触れた途端消えてしまつような事になったら……」

「私が？それはないと思うわ。」

「どうしてそんな事が言えるんだ？お前の親父はそれを知ってたから近づくなんて言つたんじゃないのか？」

「違うわね。よく考えて！私が触れて私自身が消えてしまふのなら、私が鍵である必要はないわ。」

「??？」

「いい？生命体を鍵とするには理由があるのよ。例えばこの世で私しか持つてない力だからとか。でなければ、別に『物』でいいわけじゃない！消えて無くなる存在では困るのよ！」

「そうは言っけどよ……万が一って事もあるだろうよ？」

「触れてみればわかるわ。」

物おじしない彼女の性格が、無謀とも言える行動を取らせる。

「セイラー!!」

羽竜が止めるのも聞かず、両手で水晶に触れる。

沈黙があつたのは一瞬。セイラが水晶に触れると、水晶の中で放電が始まり辺りの空間をさっきまで羽竜が見ていた景色、雲と雲の間にいるように変える。

「見て、羽竜。やっぱり私自身が鍵だったのよ。」

「そういう問題じゃないだろ。建物が消えちまったぞ……」

でも宙に立っている。床は存在しているのだ。

「千年前……何故気がつかなかったのだ……」

姿を隠していたヴァルゼ・アーク達が現れた。

「やっぱりいたんだな、ヴァルゼ・アーク……」

「ヴァルゼ・アーク？この前の魔帝と雰囲気が随分違うけど？」

セイラの知らないヴァルゼ・アークがにこりと微笑み、彼女に語りかける。

「プリンセスセイラ……世界再生の手段よ。」

「世界再生の……手段？」

バベルの鍵と呼ばれた次は、世界再生の手段。セイラはますます自分という存在がわからなくなる。

「君は知らないだろうが、天使達によって焼き尽くされた世界が、

再びその姿を取り戻したのは君がいたからだ。」

「何を言ってるの……?」

ヴァルゼ・アークの言葉の意味を理解するには、ピースが足りな過ぎてセイラにはわからない。

「この世界は我々の記憶にある世界とは違う部分が多々ある。だからこそ、千年前に気付きもしなかった事に気付く事が出来た。そうだろう? …………… 出て来たらどうだ、ダイダロス。」

ヴァルゼ・アークにその名を呼ばれたダイダロスが現れた。

「気付かれてましたか。」

「お前は……!」

こつぴどくやられた相手の登場に羽竜の呼吸が荒くなる。

「終焉の源……貴方がここまで何事もなく来れたのは、私がバベルに仕掛けられたトラップを全て片付けたからです。感謝するのですね。」

「終焉がどうしたって? お前もヴァルゼ・アークも、意味不明な事ばかり言いやがって!」

「誰なの?」

セイラもわけがわからない。

「ダイダロス……悪魔達と天使達に特殊な力のある武器造った奴……俺の持つトランスミグレーションもな。」

「そうだ、羽竜、お前に返さなければならぬ物がある。」

「俺に？」

ヴァルゼ・アークが顎で指示を出すと、バルムングが蕾斗を後ろから連れて来る。

「蕾斗！！？」

「羽竜君！！！」

「羽竜のもう一人の友達って……」

羽竜と蕾斗の驚き具合を見れば、セイラにも空気は読める。

「ああ。でもなんで悪魔なんかと？」

「そんなに恐い顔しないで、私達が保護してあげたのよ？」

ジャツジメンテスが羽竜の疑いを払ってやる。

「さあ、友人のところへ帰るがいい。」

ヴァルゼ・アークが蕾斗の背中を軽く押してやる。

「どうしたの？総帥が行けとおっしゃってるのだから遠慮はいらないのよ？」

バルムングが、自分より少しだけ背の小さい蕾斗を見つめる。

「まさか名残惜しいなんて言い出すんじゃないありませんでしょうね？」

ルシファーが冷やかしを入れる。

「あの………ほんの数日でしたが、ありがとうございました。なんて言うか………楽しかったです。」

突然の蕾斗の言葉にヴァルゼ・アークも含め、レリウーリア全員が目を丸くする。

「あ………あはは………ま、まあいいんじゃない？」

なんて表現していいかわからず、アシュタロトが愛想笑いをする。

「絵里さん………」

「え？わ、私？」

人間時の名前を呼ばれ、バルムングがうろたえる。

「絵里さん、二人で旅した事忘れません。とても楽しかったです。」

「な、何をくだらない事を。言っとくけど、私は清々するわ！子供のお守りは疲れるしね！」

蕾斗は何も言わず、爽やかな笑顔でバルムングに礼をし、ヴァルゼ・アーク達にも礼をすると羽竜の元へ走る。

「くす……ホントは名残惜しいのはバルムングじゃないかしら？
くすくす。」

「ベルフェゴール！！」

茶化されてバルムングがベルフェゴールを睨みつける。

でもあながちベルフェゴールの言葉に間違いはない。
弟のように思えたのもまた事実。

「羽竜君、ただいま。」

「待ってたぜ！親友！」

腕をクロスさせて互いの無事を喜び合う。

「この人は？」

「セイラだ。」

「ちょっと！ちゃんと紹介しなさい！」

乱暴な羽竜の紹介にセイラが異議を唱える。

「蕾斗、詳しい事は後だ。吉澤も無事だから安心しろ。」

バベルの最後の空間に、戦うべき相手が全員揃った。

羽竜の胸には、不安や危機感とは違う鼓動が鳴り始めていた。

第二十四章 蛇

状況の説明は必要だった。

ヴァルゼ・アークとダイダロスは把握出来ているのだろうが、羽竜にもセイラにも何がどうなってるのかさっぱりだ。

セイラが水晶に触れて、空間が変化したとは言えそれだけ。

魔導書が出て来たわけでもなんでもない。

親切心で言ってるのではなく、羽竜とセイラには知る権利があるから、ヴァルゼ・アークもダイダロスも教えてやろうと言っただけ。もちろん奮闘も。

「貴方から説明してあげて下さい、ヴァルゼ・アーク。」

「てめえ！総帥に命令するつもり！？」

ダイダロスに十分な恨みを持つバルムングが食ってかかる。

「これは失礼。しかし彼らには知る権利がある。私が説明してもかまわないのですが、ヴァルゼ・アーク殿は終焉を大層可愛がっておられるようお見受けしたのですが？」

バルムングが思わずダイダロスに飛び掛かりそうになる。

「バルムング、止せ。右目の敵討ちをしたいのはわかるが、今は気持ちを抑えてくれ。」

「私の事はどうでもいいのです。ただ総帥が侮辱されるのは……………」

「案ずるな。ここで挑発に乗るのは愚の骨頂だ。」

敵が目の前にいるからと言って、すぐに戦う必要はない。
そう諭すようにバルムングをなだめる。

「プリンセス、お前は人間ではない。」

「な……………何よ、いきなり…」

「お前は世界のバランスを取る為のバランスーだ。自然過ぎず、不自然過ぎずこの世界を形作るのがお前の役目。世界が焼け、木々が無くなればそれを再生する。世界が緑で溢れ返り、生命体の進化を妨げるのであれば、突然変異を起こして極度の進化をさせる。これは全て宇宙の意思だ。」

唐突な言われように誰も言葉がない。多分、レリウィリアの彼女達も初めて知る事だろう。

「それじゃ何？私は宇宙の操り人形なの？冗談じゃないわ！私はフランス王国王女、セイラ・アイブラックよ！」

まるで生きている事を否定されたような気分させられる。

面白くないが、おそらくはそれが真実である事を心の中で理解する。緊張感が恐怖感に変わる。

知りたくない真実がすぐそこにあるのだ。
そしてそれは差し出されるに違いない。

「認める認めないは勝手だが、真実は常に一つしかない。」

冷やかなヴァルゼ・アークの視線がセイラを貫く。

「ならこの空間の意味は何？床や壁が見えなくなったただけじゃない。それが世界再生に役立つてるの？」

「残念だが、そこまでは俺にもわからん。」

「いい加減ね。魔帝が聞いて呆れるわ！」

言い捨てた言葉を撤回させようと、レリウーリア全員がロストソウルを構え、セイラの首を取る準備をする。

「でもこれだけは言える。バベルの塔は人々が神に近づく為に造ったものではない。世界再生を行う為に造ったものだ。そしてその事実を隠す為に、人々から共通言語を奪ったのだ。」

「誰がそんな事を……………？」

羽竜がヴァルゼ・アークとダイダロスを警戒しながら聞き返す。

「……………オノリウスでしょう。」

答えたのはダイダロスだった。

「その通りだ。もし神ならば、言語を奪うなんて回りくどいやり方はしない。人間の命を優先させるような仏心は奴らにはないからな。」

ダイダロスの見解と同じらしく、ヴァルゼ・アークもまた歴史の謎を紐解く。

「……………何者なんだ……………オノリウスって……………」

ヴァルゼ・アークとダイダロスの話を聞いていると、オノリウスは神を超える存在にも聞こえる。そうなのだろうか？

人間でありながら魔導を操る。神にも宿らない魔導を扱える意味な何なのか？

蕾斗が魔導を使える事も説明がつくのか？

羽竜には到底想像もつかない。

「それは本人に聞いて見ればわかる事。……貴方も出て来たらどうです？オノリウス。」

ヴァルゼ・アークにされたようにダイダロスもオノリウスを呼ぶ。

しかし、辺りには新たな人物が現れる気配は一向にない。

「誰も出て……来ない……？」

同じ魔導を持つ者として興味惹かれる蕾斗から、現況が漏れる。

「フフ……嫌われたものですね。天使と悪魔から魔導書と人々を守る為にと、トランスミグレーションまで造って差上げたのに、会ってもらえぬとは……フフ。」

まだ余裕のダイダロスは、オノリウスが出て来ない事にうろたえる事はない。

すると、空間が元のバベルの中へ戻った。

「これは……？」

ヴァルゼ・アークも状況が飲み込めていない。

ダイダロスもこれは意外だったようだ。

「……………何が…………？」

塔の外で目が潰れるようなフラッシュ現象が起きる。

稲妻が鳴っているのだ。

雲と雲の間の空間を捕らえるように、上下に稲妻が走る。

「……………いるのか？…………オノリウス……………」

羽竜もただならぬ空気を感じる。

稲妻の光が彼らの動きを封じてしまっている。

近場で聞く稲妻の音は、バベルを崩してしまうのではないかと思わせるほどの轟音だ。

不穏な空気の後、突如として光が遮られ暗闇に覆われた。

「一体何が始まるんだ…？」

ただの自然現象にしては露骨に不自然さを表している。蓄斗が暗くなつた外を見ると……

「うわあああつ！……！！！」

蓄斗が叫ぶ。その方向を全員が見ると、窓枠に収まり切らないほどの『瞳』が塔の中を覗いている。

「なんだよ、この馬鹿デカイ瞳……………」

爬虫類を象徴する縦に走る黒い筋は、紛れもなくこちらを確認している。

「……………次元管理者……………ミドガルズオルム!!」

瞳の主はミドガルズオルムだと、ティアマトが叫ぶ。

「ミドガルズオルムって……………確か……………」

以前、アドラメレクからもらった解空時刻を羽竜が手にする。
ペンダント状になっている解空時刻が、ミドガルズオルムのオーラに反応している。

奇妙な奇声を発し、バベルの塔に巻き付く。
ぐらぐらと地震が発生したかのように塔が横揺れを始める。

「これもオノリウスの仕業なの……………?」

リリスの表情が絶望にも見てとれた。

「ミドガルズオルムが現れたという事は、魔導書はここには無いの
でしょう。ならばいつまでも長居は無用、お先に失礼しますよ……
終焉の源、そして魔帝……………レリウーリアの皆さん。」

ダイダロスが床に魔法をぶつけ穴を開けると、そこから一気に飛び
降りた。

「俺達も行くか、ミドガルズオルムはバベルを破壊する気だ。こん
なところで果てるわけにはいかないからな。」

ヴァルゼ・アークがジャッジメントに言うと、それを聞いていた
レリウーリア全員がロストソウルを仕舞う。

「羽竜、生きて戻れよ。」

ヴァルゼ・アークもダイダロスがしたように床に魔法で穴を開ける。

「待てよ！あんたには聞きたい事がある！」

退散しようとするヴァルゼ・アークを羽竜が引き止める。

「……………お前が生きて再び俺の前に現れたなら、お前が疑問に思っている事に答えてやるよ。」

それだけ言うと、ヴァルゼ・アークが飛び降りる。それにレリウーリア全員が続く。

「くそっ！いつも肝心な時にいなくなりやがる！」

苛立ちを抑え切れない羽竜を、蕾斗がなだめる。

「行こう、羽竜君。生きて戻らなきゃ！僕達にはまだやらなければならぬ事がある！」

「彼の言う通りよ！怒りなら次、魔帝に会う時までとっくればいいじゃない！」

「蕾斗、セイラ……………」

羽竜も素直に二人に応じる。

「セイラ様！！羽竜！！！」

ジョルジュが勢いよく階段を上がってきた。

「誰？」

また新たな人物に蕾斗が戸惑う。

「えーいつ！面倒くせーっ！説明は後だ！蕾斗！セイラ！ジョルジュ！俺達も下に飛び降りるぞ！」

「バカ言わないでよ！死んじゃうわよ！」

「蕾斗がいれば問題ない！」

言っが早いか、ヴァルゼ・アークの開けた穴から羽竜が飛び降りる。

「ちよっ…………羽竜ー！！？」

セイラは高所恐怖症らしくそつと穴を覗き込む。

「行くよ！さ、早く！！！」

蕾斗がセイラとジョルジュを誘う。

「なんだかよくわからんが、飛び降りなければならんようだ？ならば…………セイラ様、失礼！！！」

「きゃっ！！！」

立ち尽くしていたセイラを抱き上げ、言われるがまま飛び降りた。

「……………僕が先に行かないと危ないんだけどな……………」

軽く言う辺りは余裕の現れだろう。蕾斗も羽竜達を追う。

ミドガルズオルムはその身体に力を入れ、バベルの破壊を開始した。

第二十五章 蛇と魔導と引導と

エルハザードとの戦いは、一時中断を余儀なくされた。
もう再開する事はないだろう。

直径100メートル、高さは雲と雲の間までのバベルの塔を包み込んでしまうほどの巨大蛇が現れたのだ。
天使にはそれが何なのかわかっていない。

だからこそ地上から撤退しなければならない。
神ですら勝てない生き物に、どうしてその配下である天使達が勝つ事が出来よう？

「あの生き物は一体……？」

遠く雲の上をメグは見つめていた。とにかく巨大な蛇は、雲の上に頭があっても、瞳が光ってその存在を確認出来る。

光は四つ。少なくとも、ミドガルズオルムには瞳が四つある事が認識可能だ。

咆哮とはほど遠いミドガルズオルムの鳴き声が大気を震わせる。

「後少しでカタがつくところだったが、また中途半端で終わらねばならぬようだな。」

撤退していくエルハザード軍を眺めながらサマエルが呟く。

「サマエル、あの生き物は何？」

あかねが聞く。

「ミドガルズオルム……次元の管理者だ。レジェンダかヴァルゼ・

アークあたりに聞かなかったか？」

「ミドガルズオルム……………あれが……………」

「普段は次元の狭間というところに住んでいるのだが、何しにこんなところまで出て来やがったのか……………」

バベルの塔が少しずつ崩れ落ちる。ミドガルズオルムの力なら、簡単に破壊出来るのだろぅが、何故かそうしない。

あかねにはミドガルズオルムが意思を持って動いているようにも思えた。

「あかねちゃん！あれ見て！」

メグがバベルを指差す。

そこからいくつかのオーラが飛び出し、どこかへ消えて行く。

「千明さんと新井さん達だわ……………」

確かに彼女達のオーラは感じた。

「ヴァルゼ・アークもミドガルズオルムには勝てないようだな。まあいい。俺も一度出直すとしてよう。」

イグジストを鞘に返し、立ち去ろうとするサマエルの背中越しにあかねが声をかける。

「サマエル、貴方の目的は何？」

「目的？……………フツ、俺はただ誰よりも強くなりたいだけさ。それ

よりも、早く逃げた方がいい。ミドガルズオルムに喰われる前にな。」

それだけ答えてテレポートして行った。

「セイラ様達だわ!!」

メグが大きく手を振り、羽竜達を誘導する。

「無事だったか！吉澤！メグ！」

蕾斗の浮遊術に助けられた羽竜達があかねとメグの前まで来る。

「羽竜君達こそ無事………蕾斗君!!」

「へへ…お久しぶり、吉澤さん。」

事態そっちのけで再会を喜ぶ。

「どうして羽竜君達と？」

「吉澤、なにもかも説明は後回しだ！とりあえずこの場から逃げろ！」

羽竜があかねと蕾斗の喜びを遮り、ミドガルズオルムを仰ぐ。

「やっってくれるぜ。」

羽竜達が脱出するのを待っていたかのように、無人のバベルをその巨大な身体に力を入れ破壊した。

塔はまるでスナック菓子のように脆く崩れ落ちた。
……役目を終えたように。

「蛇を召喚したのがオノリウスだとすれば、それも魔導の成せる業なのだろうか……………」

崩れ落ちるバベルを眺めながらアドラメレクがジャツジメンテスに聞く。

「蛇は何者にも縛られないのが原則。通常召喚では有り得ないわ……今の事態は。でも魔導が蛇を召喚出来る力かどうかは疑問ね。魔導自体が謎の多い力だし、私には返答しかねるわ。」

「もし、魔導に蛇を召喚出来るだけの力があるとしたら、まだ魔導を使いこなせていない藤木蕾斗は……………」

「……………殺すべきでしょうね……………迷わず。」

ジャッジメンテスの言葉にアドラメレクも頷く。

「いずれにせよ出直さなければならぬわ。バベルに魔導書がなかったなんて……………（一体どこにあるの……………？）」

もはや記憶を辿っても魔導書の在りそうな場所はない。

過去に来る事で魔導書を手に入れなければならないのなら、まさか誰のともわからない民家なんて曖昧な場所には無いだろう。

オノリウスはダイダロスやレリウィリアが過去に来る事は想定していなかったはず、誰もが聞いてわかる場所でなければこんな回りくどい封印を施したりはしない。

でも、千年前の世界にはバベルの塔以外に魔導書を隠すに相応しい場所はないのだが…。

「そもそもオノリウスは『いる』のでしょうか？」

「いるわ。バベルの中にいて私達のやり取りを見ていたはずよ。」

アドラメレクにはオノリウスの存在を感じ取れなかった。

「お話中失礼します。司令、参謀、総帥が呼びです。」

ナヘマーから人間に戻った新井結衣が二人を呼びに来た。

「わかりました。今行来ますと伝えておいて。」

ジャッジメンテスに言われ、礼をするとヴァルゼ・アークの元へ急

ぐ。

「アドラメレク、これだけは覚えておいて。」

「はい……？」

「引導は誰かが渡してやらなきゃならないのよ。」

第二十六章 選択肢

羽竜達は互いに起きた事を説明し合っていた。

羽竜とセイラはバベルでの事を、蕾斗はレリウーリアとの数日間の事を、あかねとメグはエルハザードとサマエルが現れた事を。

話に繋がりが無いから説明するのが面倒だったが、全員が納得出来る形にはとりあえず収まったようだ。

「魔導書は結局なかったんだ……………」

あかねが太陽の出ない空を見上げて言った。

まだミドガルズオルムは空をうろついている。

おかげで今が昼なのか夜なのかわからない。

ミドガルズオルムの身体は世界を闇に包んでいた。

「オノリウスもいなかったし、ミドガルズオルムは現れるし、もうわけわかんねーよ。」

愚痴を零す羽竜を誰も諭す事はない。気持ちは皆同じだろう。

「セイラ様？」

少し離れた場所で一人佇むセイラを気にかけてジョルジュが声をかける。

「ご気分でも優れませんか？」

視界に入ってくるのは一面の焼け野原と、ミドガルズオルムの身体だけ。

絶望感がセイラを抱いていた。

「私は…………人間じゃない…………世界のバランスを保つバランスー。父上は知っていたからバベルに近づくなど言ってたのね。」

「何をおっしゃいます！セイラ様はフランシア国の王妃、れっきとした人間です！」

「ありがとう、ジョルジュ。でもそれは間違いよ。魔帝が言っていた事が事実だと思うわ。」

口で言っているほど受け止めてはいない。悲愴に溢れたセイラを見てるのは、忠誠を誓った騎士にはつらいものがある。

「……………笑い、泣き、歌い、怒り、悲しみ、そして苦しむ。私は貴女のそれら全てを見て来ました。貴女は紛れも無い人間です。羽竜達も私と同じ想いだと思えますが？」

「ジョルジュ……………」

「しかし、不思議な奴らです…………羽竜の強さといい奮斗とかいう者の浮遊術、あかねのエアナイトの能力…………何者なんでしょう、彼らは？」

ジョルジュの一番の興味はあかねにあった。

一子相伝のエアナイトの能力を自分以外にも持っているあかねの素性が気にかかる。

「何者かしらね。ひょっとしたら救世主かもよ？」

実際セイラはそう思い始めてる。人が持つには、三人の能力は過ぎた力だ。ジョルジュも例外ではない。

「メグはどうお思いですか？彼女には羽竜達のような特別な能力はありませんが、あの身のこなしは人間技とはとても思えません。それとあの剣、造りを見るからにそれ相応の騎士が使用していたのだと思われますが……」

「カルブリヌス……どこかで聞いた事があるのよね……」

剣に名前があるくらいなのだから、有名である事は自ずとわかりうる。

ただメグ自身も自分の祖先が何者なのかわかっていないようだし、追求する気もない。

今はまだその存在すら明確にされていない魔導書を探すのが先だ。

自分が世界の balanser だという事も心に引っ掛かるが、もはや一刻の猶予もない。

闇十字軍レリウーリア、薄紫の髪をした眼帯の男、天使の軍隊エルハザード、ミドガルズオルム、一筋縄ではいかない相手ばかりがセイラ達を待っている。

彼らより先に魔導書を発見出来なければ、世界のバランスを取るところではなくってしまふ。

もつとも、世界の balanser なんて言われたところで、バランスを取る方法なんて知らないが。

「よう、二人とも何暗い顔してんだ？」

羽竜が真紅の剣を肩に乗せて歩いて来る。

短い時間の間にコロコロと変わる性格はいかなものか疑って

しまう。

暗い顔をしたくなくてもしなければならぬ状況を、羽竜はどう思っているのか？

多分、なんとかなるって言われそうな気がする。

羽竜の後に続くように有能な少年少女が三人、笑顔を見せている。

「セイラ、ヴァルゼ・アークの言ってた事なんか気にする必要ねーよ。」

「羽竜……………」

「お前はお前だよ。俺が保証する！」

不思議と、羽竜にそう言われると安心してしまう。

「ほら、言った通りではありませんか。」

ジョルジュが微笑み、らしくないウインクをして見せた。

「フン……………あんたに保証されても嬉しくないわ！せめてもう少し礼儀を学びなさい！」

素直に嬉しさを表現出来るほど器用な性格はしてない。
だからつい反対の反応をしてしまう。

「な……………馬鹿姫！人が下手に出てりゃあ調子に乗りやがって！」

「馬鹿は余計よ！馬鹿は！だいたいあんたはデリカシーが無さ過ぎなのー！」

「それはしょうがないよ、姫様。羽竜君にデリカシーが備わったら天と地がひっくり返るよ。」

面白おかしく蕾斗が茶々を入れる。

「蕾斗！てめえ、どっちの味方だ！」

「だってホントの事だもん。」

「くおのやるー！久しぶりに会えば減らず口叩きやがって！」

「痛い痛い！」

いつもの如く蕾斗のこめかみをぐりぐりと拳で『刺激』する。

「もう！やめなよ二人とも！」

あかねが身内の恥を晒すようで恥ずかしがる。

「あはははは！」

あかねが加わった事で余計おかしくなり、メグの笑いのツボを突いてしまう。

「やれやれね。」

呆れた様子でも、セイラの心は幾分楽にはなっていた。

「それにしても、我々はこれからどうしたらいいのか……」

今の状態では選ぶ道すら無い。行動の選択肢が無いのがこつも苛立つものとは、ジオルジュにも初めての経験だ。

目標のバベルの塔は崩壊、魔導書の在りかを示すようなヒントも浮かんで来ない。

「……………そうだ!!」

何かを思いついたように突然ジオルジュが叫んだ。

「な、なんだ？」

羽竜もびつくりして蕾斗への攻撃の手を止め、全員の視線はジオルジュへ注がれる。

「あいつなら……あいつなら何か知ってるかも知れん!」

「誰? あいつって?」

ジオルジュが声を上げてひらめく様をセイラは見た事がない。まして知り合いの話など聞いた事もない。

「この近くに私の友人がいます。この戦乱で生き残っているかはわかりませんが、会いに行く価値はあります! 彼なら何か知ってるかもしれません!」

「だから誰なの?」

いらついた様子で腕を組み、セイラがジオルジュに迫る。

羽竜、蕾斗、あかねは直感で感じるものがあつた。

「我が親友、リステイ・バレンタインです。」

「リ、リステイ~~~~~っ!?!?」

三人がリステイの名を聞いて驚いた理由など、セイラ達に知る由もない。

第二十七章　嘘をつくのは……

確かレジェンダはリスティを裏切り者とか言ってたし、天界で会った時はただのうるさい爺さんだった。

天才だとは言っていたが、受けた印象は最悪。

でも、この世界のリスティは、ジョルジュと同じイケメン……
…というよりは美少年のほうが似合っているかもしれない。
それでいてとても気さくだ。
むしろ好印象を受ける。

「何も無いところだが、くつろいでくれ。」

お茶らしき物を入れながら、笑顔を見せる。

とても『あの』リスティには見えない。

「この町だけはなんとか難を逃れられてね、運がよかったよ。」

逆境を物ともしないタイプなのか、すごく前向きだ。

「でも何より、またこうして君に会えたのが奇跡だよ………ジョルジュ。」

「それは私も同じだ、生きていてくれて安心したよ………リスティ。」

羽竜も蕾斗もあかねも引き攣る顔を元に戻せない。

気持ち悪いほどの親友振りを見せるジョルジュとリスティが、後にトランスミグレーションを奪い合うとは思えない。

それとも、レジェンダが語っていた過去と、実際に今体験している

過去とでは違うのだろうか？

「うらやましいわね、互いの安否を心配し合える関係なんて。」

セイラは王妃だ。友人なんてものは持ち合わせていない。自分が心配されるのは国の為。それ以外の理由は無い。

「何をおっしゃいますか、セイラ様にはジョルジュやこうして危険を承知でお供する下臣がおいではありませんか。」

リスティが羽竜達を意味ありげに見る。

お供する下臣としてはあまりに幼い彼らに興味があるらしい。ただ、下臣と言われ羽竜は反論に出ようとするが、話が先に進まなくなると思った蕾斗達に止められてしまう。

「ま、礼儀の知らない下臣で世話が焼けるけど。」

セイラはわざと言った。羽竜の反応を見て遊んでいるのだ。

「ははは。しかしその方が返って心強いのでは？」

一国の王妃を前にしても物おじしないリスティの態度は度胸がいいとしか言いようがない。

そこが逆にセイラには好感触だったようで、さばさばした彼女には受け入れやすいようだ。

「さてと、本題に入ろうか。まさかお姫様まで連れて、私に会いに来たわけではないだろう？」

「相変わらず話が早くて助かるよ。」

ジヨルジユの雰囲気から緊急だと悟るのは、リステイには簡単な事。だから自分から話を振る。

「実は、魔導書の事なんだ。」

「魔導書？あのなんでも願いを叶えると噂の？」

「そうだ。魔導書がバベルにあるのではとバベルの塔まで行ったんだが、魔導書は無かった。変わりにあの巨大な蛇が現れたんだ。」

「……………あれはミドガルズオルムだね？」

「知ってるのか？」

「古い書物で読んだ事がある。次元の狭間というところに一匹のそれは巨大な蛇がいます。誰が見たのかは知らないけど、本当だったなんて。」

「フツ…………物知りなのも変わってない。だが聞きたいのはミドガルズオルムの事じゃない。」

「魔導書……………か。」

「魔導書は天使と悪魔、それとダイダロスとかいう輩が狙っている。なんとしてでも奴らより先に手に入りたい。知恵を貸してくれないか？」

「ジヨルジユ、魔導書はきっとバベルの塔にある。」

考えていたのか？ひらめきか？あつさりとリスティは魔導書がバベルにあると断言する。

「根拠は？」

堪らずセイラが割り込む。

「魔導書を求めて天使や悪魔やダイダロスとかいう奴もバベルに來たんだろ？ダイダロスという奴はともかく、天使や悪魔までがバベルに來たのには確信があつての事だと思ふんだ。そしてミドガルズオルム。」

「ミドガルズオルムが関係あると？」

ジョルジユも親友の見解には興味がある。

「ミドガルズオルムは、現れてからずっと崩壊したバベルの上に滞在したままだ。次元の狭間の住人が、意味もなく地上に現れるような真似はしないだろう。」

「でも魔導書と繋がりがあるとは言えないわ。それに、たかが巨大なだけの蛇に意思があるとは思えない。貴方の言う書物にはそう書いてあるの？」

リスティの考えに否定的なメグが異論を唱える。

「まあまあ。書物にはミドガルズオルムの詳細は書かれてはいないでもね、天使や悪魔は我々人間よりも遥かに高い知識と教養がある人間には到底わからない情報も、彼らにはわかっている。一番の決定打はそこだ。ミドガルズオルムは、魔導書的能力を考慮すればな

んらかの理由があるんじゃないか？例えば、魔導書を渡したくない『輩』への牽制とか。」

「防犯機能って事が……………」

この手の話は大好きな蕾斗は、リスティの見解には大いに納得している。

「これ以上は推測の域を出ない話だから、後は君達に委ねるしかないけど？」

「リスティ、一つだけ聞かせてほしい。」

「なんだい？ジョルジュ。」

「ミドガルズオルムは魔導書を守るだけの生き物なのか？」

「……………ジョルジュ、どんな生き物も何の為に生きてるのはわからない。仮にミドガルズオルムが魔導書を守護するだけの生き物だとしても、果たしてそれだけの為に生きているかはわからないよ。どうしてだい？」

「いや……………ただあれだけの生き物が存在している事自体、もっと他に理由があるんじゃないかと思ってな。」

「フフ……………君も相変わらず深読みだね。森羅万象、自然の摂理は理屈じゃないよ。」

リスティの見解は、全員納得したらしい。
それをセイラが代表で口にする。

「行きましょう、もう一度バベルへ！」

「塔は崩壊しちまったんだぞ？」

羽竜が立ち上がり、遠くからでも視認出来るミドガルズオルムを眺めた。

「建物が全てじゃないわ。行ってみれば新たな発見があるかもしれない。それとも怖じけづいたのかしら？」

ミドガルズオルムを眺める羽竜をセイラが挑発する。

「バカ言っな。蛇が怖くて戦士が勤まるか！」

「じゃあ決まりね！みんなもいいわね？」

表情に迷いを浮かべる者は一人もいない。

「リステイ、君も来てくれないか？君がいてくれた方が何かと心強い。」

「そのつもりだよ、ジョルジュ。」

新たな仲間を迎えて、羽竜達は再びバベルを目指す。

「今一度バベルへ行く。」

ヴァルゼ・アークが岩に腰かけ、メンバー全員の前でバベルへ行く事を伝えていた。

「バベルへ……………ですか？」

今更何の為に行くのかわからず、サタンから戻った葵が口火を切る。

「何度考えても、魔導書はバベルに在るとしか思えん。その確認の為だ。」

「お言葉ですが、バベルの塔は既に蛇によつて崩壊していますし、蛇の傍に行くのは危険なのではないでしょうか？」

こちらはアドラメレクから戻った那奈がヴァルゼ・アークの真意を聞く。

「総帥、まさか崩壊したバベルの瓦礫から魔導書を探せなんて事は

言わないですよね？」

アシユタロトだったローサも納得には至らず、聞き返す。
重労働はなるべく避けたいのだ。

「心配するな、そんな頭の悪い指示は出さない。」

ローサの考えなどヴァルゼ・アークにはお見通しだ。

「ならお聞かせ下さい。何故ここに来てバベルなのか？」

ジャツジメンテスから戻った由利にもバベルへ行く理由がわからない。はつきりとヴァルゼ・アークに意見を言えるのは由利しかない。

「人の目は嘘をつく。目で確認出来なかったからといって、そこに無い理由にはならない。嘘をつかないのは機械と真実だけだ。」

「おっしゃってる事はわかりますが……真実が嘘をつかないのなら、何故私達の前に現れないのですか？」

葵の疑問に由利が変わって答える。

「真実はいつも私達に誠実でいてくれるとは限らないわ。」

由利が顎に手を当て言葉の意味を理解する。

誰もがヴァルゼ・アークと由利の考え方には感心してしまう。
形の無いものを、よくここまで解釈出来るものだ。

「総帥がそうおっしゃるのであれば、私達かとにかく言う必要はあ

りません。指示に従います。ですが、蛇はどうなさいます？戦つて勝てる相手ではありませんが？」

那奈の不安は『蛇』にある。

襲われたら一たまりもない。

「……蛇は俺が引き受ける。」

ヴァルゼ・アークの言葉に一堂、声を上げて驚いた。

「ご、ご冗談を……いかに総帥と言えども蛇を一人で相手にするなど……！」

葵が突拍子もないヴァルゼ・アークの発言に腰を抜かしそうになる。まさかこんな無謀な作戦を耳にするとは思っていなかった。

「他に方法はない。蛇が襲って来ないのならそれにこしたことはないがな。」

「しかしですね！万が一総帥の身に何かあったら………」

ローサが言いかけるのを由利が制し、振り返ってメンバーに告げる。

「やりましょう。総帥が蛇の相手をしている間に、なんとしてもオノリウスの魔導書を見つけるのよ！」

今度ばかりは本当の意味で命懸けの任務になる。それを承知でみんな頷いた。

「任務開始は明日の朝だ。今日はゆっくり休め。」

今までで一番重い任務だ。

ヴァルゼ・アークが蛇を相手に出来る時間は限られている。

半日にも満たない時間の間に魔導書を見つけないならならぬ。正確には魔導書に繋がる糸口を見つける事が任務となる。正

失敗はヴァルゼ・アーク、そして自分達の死を意味する。

明日、魔帝の信頼を受け彼女達は命を賭ける。

第二十八章 雲の上の戦い（前編）

「総帥……………」

「心配するな、お前達は与えられた任務を完遂する事だけを考えろ。」

由利がヴァルゼ・アークを案じ立ち止まる。
いつものヴァルゼ・アークらしい余裕は見られない。

「なら制限時間を設けていただけませんか？」

「制限時間？」

「はい。蛇と戦うのは、私達と約束した時間の間だけにして下さい。それを過ぎたら私達が魔導書を探し出せなかったとしても、一度戻って来ていただきたいのです。」

ヴァルゼ・アーク達はミドガルズオルムを『蛇』と呼ぶ。

『蛇』との戦いは真剣勝負ではない。もとより勝ち目はヴァルゼ・アークにすらないのだ。

あくまでも『蛇』の注意を反らすのが目的だ。

「俺が信じられないのか？」

態度を見ればヴァルゼ・アークに緊張感が宿っているのが全員に伝わって来る。

「お願いします。私達は総帥あつてのレリウィーリアなんです、お察

して下さい。」

由利はヴァルゼ・アークから目を反らさず、じっと見つめ訴えかける。

頷くまで雲の上にいる『蛇』のところへ行かせるわけにはいかない。

「ヴァルゼ・アーク様、私達のお願ひなのです。約束してほしいのです。」

いつもは無口で無表情の景子が、今にも泣き出しそうにする。

「……………全く。お前達には負けるよ。」

「それでは……………」

綻んだヴァルゼ・アークの顔を見て聞き入れてくれたと、由利が胸を撫で下ろす。

「わかった。制限時間を設けよう。で、どのくらいなら納得してくれる？」

「みんなで話合ったのですが、一時間……………これ以上は待てません。一時間を過ぎた場合は、私達の方から迎えに行きますので。」

「一時間以上は俺でも蛇の相手は出来ない？」

あっさり聞き入れるのはプライドが許さないので、軽いジャブ程度の皮肉をくれてやる。

「そついつつもりでは……」

由利が慌てて否定する。

こついうやり取りをヴァルゼ・アークとするのは苦手なのが伺える。

「ならお前達も約束しろ。一時間以内に必ず魔導書の手掛かりを見つけて。」

「承知しました！」

息を合わせて由利以下、レリウーリアが返事を返し、鎧を具現して纏う。

「ん？………あつ！」

決まったところでアスモデウスが声を出す。

彼女の視線の先には、羽竜達がいる。

「あれ？一人増えてない？」

「あれはリスティよ、サタン。」

アドラメレクがサタンに教えてやる。新しい登場人物を。

「ふん。結構な美男子ねえ………くす。でも総帥には全然劣るけどねえ。」

ベルフェゴールになった千明が目を細くして羽竜達を眺める。

「でも彼は希代の天才です。物事の解釈具合は、総帥や司令に匹敵

すると思われます。舐めてかかるとしつぺ返しを喰らうハメになりますよ？お姉様。」

ナヘマーは至つて真面目にベルフェゴールを説教する。
とは言え、口調に強味が無いのは愛しさ故だろう。

「待つて！また来客よ！」

アシユタロトが『蛇』によって覆われた空にロストソウルを掲げる。

「エルハザード！」

「ミカエルまで……………」

バルムングとリリスは颯爽とロストソウルを構え、エルハザードを迎え撃つ準備に入る。

「時間が無い。お前の言つた通り一時間、全魔力、オーラを持つて『蛇』の相手をしてくる。地上は任せた。」

ヴァルゼ・アークは絶対支配を具現化して雲の上の戦場へ飛び立った。

そして残つた悪魔達にジャツジメンテスが改めて指示を出す。

「全員で魔導書を探す事は不可能になつたわ。リリス、バルムング、アドラメレク、ティアマトはエルハザードを殲滅して。」

四人は頷き、直ぐさまエルハザードの元へ向かう。

「ベルフェゴール、ナヘマー、シュミハザ、アスモデウスは目黒羽

竜達を。」

同じく頷いて、羽竜達の元へ飛ぶ。

「ベルゼブブ、ルシファー、サタン、アシュタロトは私と一緒に魔導書の手掛かりを探すのよ。」

「「「はい!」「」」

「制限時間は一時間!急ぎましょう!」

邪魔になる存在は任せてある。

魔導書を優先的に探せる環境は出来上がり、宝探しに集中出来る。

ジャッジメンテスは身に付けていた懐中時計を取り、時間の確認をした。

第二十八章 雲の上の戦い（後編）

でかいのはわかりきっていた事とはいえ、間近で見るとその迫力には驚かされる。

魔帝へと変身をし、戦闘準備は万端だ。

ミドガルズオルムは四つの目でヴァルゼ・アークを見ている。彼の殺気を感じ、警戒しているのだろう。

「爬虫類は苦手だが、ここまででかいと苦手意識も無くなるな。」

見事なまでの存在感に感服する。

「時間がない。始めるぞ……………ミドガルズオルム！！」

「何をお探しかしら……？目黒羽竜君？くすくす。」

「千明さん！！」

羽竜達の前に優雅に歩き現れる悪魔が四人。

ベルフェゴールを人間時の名前で羽竜が呼び、戦いを避けられない事を知る。

「お喋りもいいんだけどねえ……………久しぶりに一戦交えてみようかしら？ねえ……………ハー君。」

ベルフェゴールがロストソウル・ブルーノイズを具現化する。

「なら私はジョルジュ・シャリアンを指名しようかな。」

アスモデウスはバベルで半端になったジョルジュとのバトルを熱望する。

今回も場合によっては半端になる可能性は大だ。だが一時間でケリをつけても文句は言われまい。

「アスモデウス……………今度は逃がさんぞ！」

ジョルジュとて望むところ。

パラメトリックセイバーを静かに鞘から抜く。

「誰が逃げるって？口には気をつけてね、ジョルジュ。」

ロストソウル・細剣オメガロードを突き付け威嚇する。

「お姉様達はいつも勝手に決めちゃうんだから！私にだって戦う相

手を選ぶ権利はあるのに！」

ぶすくれるナヘマーを宥めるのも『お姉様』たる仕事なのだろう、ベルフェゴールがナヘマーの頭を軽く叩きながら聞き分けるように宥める。

「わがまま言っちゃダメよ？レリウーリア（うち）は年功序列なんだから。くすくす。」

「司令に言つてやるのです。」

脇にいたシュミハザがぼそりと、地味だがかなり効きのいい言葉を呟く。

「だ、ダメダメ！いい子だから今私が言った事は忘れなさい！ね？」

あたふたあたふたするベルフェゴールを見る限り、司令………ジャツジメンテス（仲矢由利）の前で歳に関する言葉は禁句らしい。

「あはははは！シュミハザも言うようになったじゃない！偉い偉い！どこで覚えて来たの？」

ベルフェゴールとシュミハザのやり取りに、アスモデウスが腹を抱えて笑う。

「私は吉澤あかねを殺るのです。」

アスモデウスを無視して、シュミハザはあかねの前に立ちはだかる。

「あ………おい、無視するな。」

「人の事言えないわねえ……………くすくす。」

シュミハザより一回り近く年上のアスモデウスもベルフェゴールも、
いいようにやられてしまう。

そしてあかねは、シュミハザの挑戦状を受け取った。

「殺れるものなら殺ってみなさいよ。」

「吉澤……………」

あかねはシュミハザに対してやたらと敵対心を持っている。
羽竜がシュミハザに好意を抱いているのではと疑っているからだ。
あかねのあまりの強気振りに、羽竜も対処方法がわからない。

「なら貴女は私が相手してあげるわ……………オマケ女さん。」

誰に影響されたのか、メグはナヘマーを挑発する。

「……………あんた、いい死に方出来ないわよ？」

ナヘマーが二本のダガーのロストソウル・オリハルコンをくるくる
回して、メグを殺意のこもった視線で睨み付ける。

「蕾斗、ここは俺達が引き受けるから、セイラとリスティを頼む！」

「わかったよ、羽竜君！二人は僕が！」

蕾斗は魔導書を探す為、セイラとリスティを連れてその場から離れ
る。

「くす……しばらく見ないうちに、いい連携するようになったじゃない。ゾクゾクしちゃうわ………手加減は無しよ、ハー君。」

ベルフェゴールの真剣な表情は初めて目にする。

羽竜をナメてない証拠だ。

こういう相手は手強い。トランスミグレーションを持つ左手にも、いつもより力が入る。

「殺すつもりで来なさい。」

言い放ち、ゆっくりブルーノイズを構えるベルフェゴール。スローモーションのようにゆらりゆらりと。

しばらく睨み合いがあった。そして、ベルフェゴールが飛び出す。それが合図となり、ナヘマー、シュミハザ、アスモデウスも飛び出した。

相成って、羽竜達も飛び出す。

雲の上が激しく光る。その光に一瞬照らされ、それぞれ互いの位置確認は出来た。

「みんな、負けないで!!」

セイラの檄を受け、仲間達は悪魔に戦いを挑む。

第二十九章 蒼き騒音の悪魔

「やっぱり男の子ねえ……………ちょっと見ないとすぐに成長しちゃうんだもの。」

「……………」

ベルフェゴールには羽竜が戦士として成長している事が嬉しく思える。

悪魔として生きるうちに、強い者を求めるようになったのだ。

「くすくす……………怖い顔して……………私が嫌いなのかしら？」

「千明さん……………俺は出来れば貴女と戦いたくない！貴女はいい人だ、ヴァルゼ・アークなんかの手下でいるより……………悪魔なんかでいるより……………女優・妃山千明でいる方がずっと魅力を感じる！だから……………」

「甘いわねえ……………お砂糖よりも甘いんじゃない？わかってないのね、女優なんてものに執着なんて無いって言わなかったけ？今の私の方が、一番私らしいのよ。ハー君だってそうでしょ？戦いたい、強い者と戦って『生』を感じたい……………」

ベルフェゴールには羽竜の葛藤が見えている。これは格闘技の戦いとはわけが違う。殺し合い……………それが許されている戦いなのだ。

「違うつ……………」

「違わないわ……………」

ブルーノイズとトランスミグレーションが、ベルフェゴールと羽竜の心の叫びを代弁するようにぶつかり合う。

「千明さん、俺達は殺し合う理由なんて無いはずだ！インフィニティ・ドライブを欲しがってるのはヴァルゼ・アークだけなんだろう？ だったら千明さん達に戦う理由はないじゃないか！」

「何度も言っただけだよ？レリウーリアはヴァルゼ・アーク様の為だけにあるのよ。ヴァルゼ・アーク様が求めるものが全て。それが私達の望みでもあると。」

「バカだよ……………バカげてる。それじゃただの危ない宗教集団と同じだ！」

「くす……………ムキになっちゃって。私の事が好きなのかしら？でも残念ねえ……………ハー君にはあかねちゃんがいるしねえ……………丁重にお断りしておくわ。」

からかう中にあっても、羽竜とトランスミグレーションには警戒している。

隙あらばいつでも命を奪うつもりだ。

「茶化すなよ！！俺は真面目に言ってるんだ！！」

天使や不死鳥族はどちらかと言えば抽象的な存在だった。だからというわけではないが、戦う事に躊躇いは無かった。武器を持って傷つけ合う事に違いはないが、罪の意識があったかと問われれば皆無だ。

でもベルフェゴール……………千明は同じ時代を生きる人間だ。彼

女の職業柄、テレビや街角のポスターで目にする機会も多く親近感がある。

刃を向けるのには抵抗がある。

「そう……………なら私も真面目に言わせてもらおうかな。いい人とか、いい仕事とか、くだらないのよ。毎日毎日目の前には退屈な人生と退屈な人間達しかないし、うんざりしてたわ。ヴァルゼ・アーク様はそんな退屈だらけの私を解放してくれたの。人はもっと自由であるべきだって。」

「そんなの……………ただの自惚れだよ。」

「……………かもね。でもね、人は自由を手にしても、それを扱う術を知らない。だからヴァルゼ・アーク様は悪魔の力を与えて下さったの。」

「……………悪魔なら……………悪魔なら自由を扱えるってのか？」

「少し違うわ。悪魔って嫌われ者でしょ？でも誰も悪魔を知ろうとしない。悪魔って、物事の本質をちゃんと理解してる存在なのよ。神も天使も綺麗であろうとするが故に、建前でしか語れない偽善者。悪魔だけが唯一自分に素直純粹でいられる。そんなところに惹かれたのかもね……………ワタシ。」

わからない。わかるわけがない。そもそも、羽竜に悪魔のなんたるかを説いたところで理解しろというのが無理がある。

「剣を交える事でしか解り合えない……………みたいね。くすくす。」

狂信者。そう思っていたが、どうやら勘違いだったらしい。

妃山千明……………紛れも無い悪魔・ベルフェゴールだ。

「力を持ってしか貴女を止められないのなら……………トランスミグレーションで掀伏^{ねじ}せてやる！」

「くすくす……………だから最初から言ってるじゃない。殺すつもりで来なさいって。」

もはや問答無用。羽竜の想いはトランスミグレーションを通して伝えるしかない。

そして悪魔は雄叫びを上げた。

第三十章 破壊の責任

ジオルジュはエアナイトの能力をフルに使ってアスモデウスに
対抗出来ている。

あかねよりも長い時間未来を読める。長いと言っても一秒程度だが、
それでもあかねが一手先しか読めないのに対して、ジオルジュは二
手三手先まで読める。この差は大きい。

かと言つて、アスモデウスがジオルジュに押されている気配はない。

「面倒な奴ね、エアナイトつて。」

先を読まれている以上、更にその先に行かなければ勝負にならない。
それはわかつているが、元々剣の腕が立つジオルジュの先に行くの
は労力のいる仕事だ。

「お前達に魔導書を渡すわけにはいかないのだな。」

パラメトリックセイバーを下段に構え横に動きながら、アスモデウ
スを観察している。

「魔導書の在りかもわからないくせに……………」

アスモデウスは崩壊したバベルの残骸が邪魔で浮遊する。
フワリと浮いた彼女が閉じていた翼を広げる。

翼と言つても、背中に後ろに向かって一つしかない。

顔はフルフェイスで表情までは見てとれないし、その両肩にはシー
ルドがあつて、防御に優れているのは想像に苦しくない。

「破壊神………… お前達悪魔は魔導書で何をしようというのだ？」

「さあ？」

「さあ？何をするのかかわらなくて魔帝に従っているというのか？」

「そうよ。ヴァルゼ・アーク様が何をしようとなさってるのかなんてレリウーリアの誰もわからないわ。」

あっけらかんとした態度がジョルジュには一瞬、恐怖に思えた。

悪魔だから人間と考え方が違うのかもしれないが、何をしようとしているのかかわらないものに従うほど恐ろしいものもない。

「それと知らないみたいだから教えてあげるけど、魔導書を手に入れてもそれだけでは何の役にも立たないのよ。」

「聞いたよ、羽竜達に。インフィニティ・ドライブ………だったかな？無限を操る力………その力を手に入れる方法が記されている。それが魔導書だ。」

「な〜んだ、知ってたの？だったら話が早い。無限を操るなんて力を手に入れてする事なんて、決まってるじゃない。」

「……………」

「わからない？世界征服なんてちっけなものじゃなくて、例えば全てを破壊しちゃうとか？」

「そして悪魔だけが存在して、魔帝の統治する世界を創造すると？」

「まあ、私の推測ですけど。」

「くだらない……もし魔帝がそんな事を望んでいたら、実にくだらない。」

「言ったでしょ？推測だつて。もしかしたらそれを望んでるのは私かもしれない。ヴァルゼ・アーク様と仲間達だけの世界。百年後も、一万年後も、そこには私達以外誰もいない理想郷。インフィニティ・ドライブならそれも可能でしょう。」

話してみれば、意外にもレリウーリアには組織としての基礎が無い。組織の基礎とは、所属する者達が目標とするものが必ずある。例えるなら社訓のような。

基礎が無いのに、建物は崩れる心配が無い。これは建物自体が、自分で必要外の力を逃がして立ち続ける事が出来ている証だ。加わる力が強ければ強いほど、仕組みが際立つ建物。まさに理想的組織とも言える。

人間には不可能な事だが。

「破壊と創造……常に表裏一体だという事が……。」

「避けられない試練みたいなものよ。賢いジオルジュさんならわかるでしょ？」

フルフェイスでこもってるアスモデウスの声が響く。

「でもさ、創造は生み出してしまえば勝手に育って行くものだけど、破壊はそれまであったものをゼロにするんだから、その責任は創造の比ではないわ。」

「アスモデウス、ならばお前にはその責任を全うする覚悟があると

「いつのか？」

「あゝやだやだ。堅苦しいのよ、あんた。仮にも破壊神の名を持つてるんだもの、覚悟が無ければ語れないわ。」

そう言うと、フルフェイスを脱ぎ、放る。

「本気で行くから。」

アスモデウスの翼から緑色の粒子が放出されて、ブーストがかかったようにジョルジュに向かって加速する。

対するジョルジュも、バベルの瓦礫を蹴り上げアスモデウスに立ち向かう。

「受けて立とう！破壊神アスモデウス！」

第三十一章

adolescence of fourteen & amp.

「何見てんのよ。」

とてもあかねの言葉とは思えない。

羽竜と蕾斗が聞いたら、ドン引きもんだ。

「何怒ってるのです？わけのわからない女なのです。」

どちらかと言えば、喧嘩を吹っつけたのはシュミハザの方だろう。
本人に自覚はないが。

「何がツンデレよ！生意気なチビ女じゃない！」

どうやらあかねは、羽竜がシュミハザに気があるとまだ勘違いして
るらしい。

要するにジェラシーだ。

「生意気なチビはお前も同じなのです。」

「私はチビじゃない！」

「でも生意気なのです。」

「いちいち頭に来る子ね……だいたい前から言おうと………」

「御託はいらないのです。さっさと始めてさっさと終わらすのです。」

「

シュミハザに、全くもって手玉に取られてしまう自分に腹が立つ。
14歳のシュミハザではまだその表情に幼さが残る。

あかねは16歳。対して変わりはないわけではない。この頃になれば、2歳の歳の差は大きい。

望まなくても大人にならねばならない者と、望んでも喘いでいるだけの者と。

「は、は、羽竜君のセリフ借りるけど、ぶ……………ぶっ飛ばす……………
…わよ……………」

威圧して怯ませるつもりだったが、不慣れな言動に逆に自分が怯んでしまう。

「……………はあ。」

あかねの不器用振りに、呆れ返り思わず溜め息が落ちる。

「な、なんか文句ある？」

「だらし無い女なのです。きっと部屋も散らかってるのです。目黒羽竜もこんな女のどこがいいのかさっぱりなのです。」

「部屋は、き、綺麗に片付いてます！それに、は、羽竜君は関係ないじゃない！な、な、何言ってるの！？」

「焦る辺りが怪しいもんです。」

あかねは嘘は言ってない。部屋は綺麗に整理整頓されてるし、羽竜があかねをいいなんて言った事もない。
でも動揺してしまうのだ。

……………思春期だから仕方ない。

「い、ごちゃごちゃ言ってないで、かかって来なさいよ！」

ミクソリデアンスードをブンブン振り回す。

ミクソリデアンスードもこんな扱いを受けるとは思いもよらなかっただろう。

「言われなくても……………殺ってやるのです!!」

シュミハザのロストソウル・デスティニーチェーンは真っ直ぐあかねを狙うのではなく、ミクソリデアンスードを狙い剣としての機能を無効にしてしまう。

「しまった…！」

「おバカなのですよ、吉澤あかね。」

解こうにも、がっちりと絡み付いた鎖がそれを許さない。

こうなると有利なのはシュミハザの方だ。

ロストソウルを右へ左へ動かす度に、あかねの意思とは無関係に踊らされてしまう。

「バカは……………余計よ……………！」

ミクソリデアンスードを離さないようにするだけで精一杯で、エアナイトの能力を使う余裕なんてない。

「魔導書は我々がいただくのです。おとなしく寝てるといいのです。」

「

急にあかねの身体が持ち上がる。
そのまま勢いよく振り回される。

「きゃっ……………！！！」

まるで台風の中に迷い込んだみたいに、息が出来ないほどの風圧に襲われる。

「私が本気になればお前達など相手にならないのです！！」

デステイニーチェーンがミクソリデアンソードから離れる。

空中に放り出され、必死に体勢を整えようとするも、下を見るとシュミハザがオーラを溜め込んでいる。危機を感じても身体が自由が利かない。

（まずい！このままじゃ…………）

あかねの不安は的中。シュミハザは必殺技を放って来た。

「死ねっ！吉澤あかね！！デッドエンドネメシス！！！」

空間にデステイニーチェーンが入り込み姿を消す。

その後いくつか空間に波紋が生じる。目には見えないが、デステイニーチェーンがかなりのスピードで動いているのだ。

ようやく身体が戻った時には、後ろに気配を感じる。

あかねの後ろで波紋が出来て、デステイニーチェーンがオーラと共に飛び出して来た。

「終わりなのです。」

勝利を確信してシュミハザは背を反し他の仲間のところへ帰ろうとする。

状況からしてデステイニーチェーンがあかねを外すわけがなかった。だから勝利を信じたのだが、今度はシュミハザが後ろに危険な気配を感じて振り返る。

「……………吉澤あかね!？」

フルネームで危険を呼ぶ時間はなかった。

振り向いた瞬間視界に入ってきたのはあかね。

後方転回であかねの攻撃をかわして、転回間際爪先で反撃するが間一髪であかねもシュミハザの攻撃をかわす。

「運のいい奴なのです……………」

「危ないところだったわ。……………貴女、本当に殺すつもりだったでしょ!エアナイトじゃなかったら死んでたかもしれないじゃないの!」

「殺すつもりで戦っているのです。寝ぼけるのは寝て起きてからにしない……………」

デステイニーチェーンがシュミハザの元に帰って来る。あかねが死ななかったとしても、驚く要素は何もない。また殺せばいい。そう思っている。

「人殺しまでしてオノリウスの魔導書が欲しいの?」

「欲しいですね。ヴァルゼ・アーク様の欲しいがる物は、例えば人の命

でも欲しいのです。」

「どうして？人の命って尊いものなのに……」

「人の命など尊いものではないと思うのです。尊いものはヴァルゼ・アーク様ただ一人。人の命とヴァルゼ・アーク様とは釣り合いが取れるわけではないのです。」

「歪んでる……貴女達みんな歪んでる！」

「フン、お前に言われてもなんとも思わないのです。私はヴァルゼ・アーク様が好き……だからヴァルゼ・アーク様の為なら人殺しも苦にならないのです。」

人をどこまで好きになれば、人殺しすら苦にならないというのか？あかねも羽竜の事は好きだ。けして軽い気持ちではない。

羽竜の為ならなんでも出来る。多分。でもそれは秩序の範囲内。人殺しまでは出来ない。

「シュミハザ、貴女自分を見失ってるの？……自分を見失ってまで人を好きになるなんて、私は間違ってると思う！」

「知った風な口を……。お前に私の何がわかるのです？お前が羽竜を想うのとは次元が違うのです。」

レリウーリアと話をする時、彼女達が彼女達自身として話しているのか、悪魔の記憶を通して悪魔として話しているのかわからなかった。

シュミハザと話していて、あかねは気付いた。彼女達と悪魔と区別する必要はなかった。

悪魔の記憶を有している時点で、彼女達は人間ではないと気付いた。会話の内容云々ではなく、言葉ひとつひとつに対する想いから。だからシュミハザの言う事もわからなくはない。人間とは物事への概念解釈が別なのだから歩み寄る事はおろか、話し合いが成立する相手ではないのだ。

本来、悪魔は人間を欺く者。人間は人間を欺く者。人間であるあかねに、人間の思考回路以外の回路は設けられていない。

シュミハザには人間の思考回路に悪魔の思考回路まで備わっている。生命体として優秀なのは当然シュミハザだ。

純粋な悪魔でないのだから尚更に。

「命を奪い合う事でしかお互いを認め合えないなんて……………悲しい生き物ね……………悪魔って。」

「哀れみは無用なのです。命を奪い合う事は人間の常套手段ではないのですか？なら、哀れみはお前達にこそ必要なもの。吉澤あかね……………お前が死ねば、哀れみを手向けてやるのです。」

睨み合いではなく、互に見つめ合う。

わかり合えない……………それがわかった事こそ、わかり合えた証なのかもしれない。

だとすれば、やるべき事はひとつ。

「今度は外さない。哀れみを持って三途の川を渡るといいのです！デッドエンドネメシス！！」

「ひとつ、言っておくわ。好きという気持ちに次元は無いわ！ドミニント・セブンス・スケール！！」

小細工無しに技をぶつけ合う。

自分が先に果てるか、相手を飲み込むか、他に道は無い。

第三十二章 雨ざらしの叙情詩

「『ただ』の人間にしてはすばしっこいわね、随分と……」

過去の記憶にメグはいない。

そんなに有名な戦士ではないのだろう。それなのに、人間離れた素早さはなんなのか？

「ナヘマーとか言っただけ？ 悪魔のわりには思ったほど強くないのね。」

ナヘマーの目つきが険しくなる。

女同士が争い事をする、まず最初に皮肉の言い合いから始まるのが定石だ。それに、ナヘマーが手を焼くほどの素早さという事は、『ただ』の人間ではないと考えるのが筋だろう。

剣の腕だけでは、悪魔はどうにかなる相手ではない。

そして、さっきから感じる危機感。悪魔と一言で言っても、ナヘマーは上級悪魔。天使の持つイグジストか、羽竜の持つトランスミグレーション、もしくは魔導、それに近い力を持ってしか倒される事はない。

ましてメグには必殺技を持っているわけではない。なのに、何故か危険信号のようなものが、ずっと頭の中で鳴り響いている。

「まだ本気じゃないんでしょ？ 早くホントの力見せてよ。ナヘマー……私のカルブリヌスが物足りないってよ。」

「（カルブリヌス……？ どうかで聞いた言葉ね……）まさか……！」

「続けるわよ！」

何かに気付き、ナヘマーが隙を見せた。
何に気付いたのかはメグには関係ない。カルブリヌスを地面にこすりつけ火花を散らす。

「てやああああーっ!!」

メグの声でナヘマーが我に返る。

「くっ……………！」

オリハルコンを交差させてカルブリヌスを受け止める。

「ボヤっとしてると危ないんじゃない？」

「人間のくせに生意気な！」

ナヘマーはカルブリヌスを受け止めたまま、両足を地面から離してメグの足元までカルブリヌスの刃を伝って移動、鎧を着ていない彼女の腹に肘を入れる。

「……………!!」

声にならない痛みで、迂闊にも膝が落ちてしまう。

「……………思い出したわ、カルブリヌス……………円卓の騎士の一人が所有していた剣の名称。私の直感が危険を察知するわけだわ。」

「円卓の……………騎士？それって……………」

「知ってるみたいね。そうよ、古代ブリテンの王、アーサー王が所有していた、所謂選定の剣……別名エクスカリバー。どうして貴女が持つてるの？」

「エクスカリバー……カルブリヌスが？」

先祖は名のある騎士だとは聞いていたが、まさかアーサー王だとは思ひもしなかった。

確かに、極端なまでの手入れをしなくても、何百年もその輝きと切れ味を保って来た剣だ。

普通の剣と違う事くらいはわかっていた。

「答えて。選定の剣、エクスカリバーをどうして貴女が持つてるの？」

「これは……私の家に代々伝わる剣。先祖が使っていたとしか聞かされてないから、詳しくは知らないけど……」

腹を押さえながら立ち上がる。

まだダメージは残っているのが、立ち上がり方でわかる。

「アーサー王の子孫ってわけ？信じられない……アーサー王の血は途絶えたとはかり思っていたのに……」

ナヘマーの言葉は、彼女がアーサー王を知っている以上の何かを臭わせる。

「驚くところを見ると、アーサー王と何かあったみたいだけど？」

「フン……あったも何も、彼を殺したのは私よ。」

断っておくが、新井結衣としての言葉ではなく、魔人ナヘマーとしての言葉だ。

「エクスカリバーを手にしたアーサー王は、無敵を誇りその力をまだヨーロッパの辺境だったブリテンにその名を轟かせるに至った。更なる領土を求めようとした時、彼は私達悪魔を倒す事で英明を確固たるものとし、血を流す事なく領土を奪う事を思いついたの。違う言い方をすれば、アーサー王は人を傷つける事を本心では嫌っていた。だから人間じゃない私達悪魔を見せしめにして、その力を示そうとしたのよ。手っ取り早いものね、悪魔を倒すほどの力を持つ者に刃向かう者なんて、そうはいないもの。」

「真実なの？………今、貴女が言ってる事。」

「ええ。異説が色々あるのは私達と彼しか真実を知らないからよ。親友のランスロットがアーサー王を裏切ったって説、あれね、私がランスロットに乗り移って殺したのよ。ランスロットはアーサー王の妻、グウィネヴィアに恋をしていたから、付け入るのは簡単だったけど。」

円卓の騎士伝説はメグも知っている。皮肉にも、伝説の当事者の血を引き、先祖を殺した者が目の前にいる。運命を感じずにはいられない。

「卑劣な………」

「卑劣はアーサー王も同じよ。人間でなければ……見せしめにしてもいいなんて勝手な解釈で天下を取ろうとしたんだもの。他人の領土は取りたくても自分のものだけは取られたくない。伝説に相応し

いだけの器は無かったわ。」

もう一つ気付いた。話に熱くなっていたから気付かなかったが、いつの間にか雨が降っている。それに気付いたのは、メグの髪、服が濡れてきたからだ。

「こんなところで……自分の先祖を知るなんて思いもしなかった。」

「有名人でよかったじゃない。あの時、アーサー王の血縁は根絶やしにしたつもりだったけど。それに、エクスカリバーまで残ってたなんて。どこを探しても見つからなかったのに。」

「誤算だったわ……………」

「ええ、誤算だったわ。でもまた始末すればいい話。たいしたことないわよ。」

「貴女の事じゃない……………誤算だったのは私自身。」

雨に打たれ冷えてる身体から湯気が立つ。
メグから怒りの感情を感じる。

「こんなに感情的になれるなんて……………それも、会った事もない先祖なんかの為に……………」

「……………いいんじゃない？それくらい熱くなきゃ、『人』とは言えないものね。」

ニヤつくナヘマーの顔を見て、メグの怒りは沸点に達した。

そしてカルブリヌス……………もとい、エクスカリバーをナヘマーに向け宣戦布告する。

「別に先祖に対して思い入れはないけど、貴女の卑劣極まりないやり方は許せない！」

「いつそ、先祖の敵討ちも兼ねてみたら？あんたの怒りの炎共々、消してあげるわよ！」

オリハルコンを逆手に持ち、身体を低く構える。

「消えるのは貴女の方よ、ナヘマー……！覚悟っ……！」

「フン……………やっぱり生意気な奴。死ねっ……！ハウリング・ハーマニクス……！」

人は……………どこまで強くなれるのか……………。

メグにとって、最大の試練は訪れた。

第三十三章 ネオ・バベル

「喰らえ〜〜っ！！波動砲！！」

ティアマトのロストソウル・2基の波動砲から、エルハザード軍に向かつて放たれたエネルギー波は、一瞬でその大半を消してくれる。ところが、援軍が後を絶たない。一度経験した千年前と同じだ。

「私のアルティメットバスターなら！！」

ティアマトの波動砲とは違って、アドラメレクのロストソウル・アルティメットバスターは連射が効く。

攻撃範囲は犠牲にしてはいるものの、それに見合うだけの性能はある。

この二人のロストソウルに限っては、他のダイダロスが造った武器よりも、何故か近代兵器っぽい。

いや、近代兵器なんかよりずっと高性能なウエポンだ。

「ティアマト、エルハザードのと真ん中に一発お願い！」

リリスが指示を出す。

リリスとバルムングは散って来る天使から、アドラメレクとティアマトを守りながら切り込むタイミングを見計らっている。だが数が数だけに、二人で切り込むには慎重になってしまう。

「簡単に言わないで下さい！エネルギー充填まで、あと240秒……それでも出力は68%。切り込む隙を作るにはエネルギーが足りませんよ！」

「副司令、私が奴らの周りを回りながら攻撃して時間を稼ぎます！
ティアマトはその間にもっとエネルギー充填を！」

アドラメレクの申し出を受け入れていいのか、リリスは悩む。

アドラメレクが言ってる事は、持てるオーラを全て使って素早さを
上げ、エルハザードをたった一人で足止めしようと言っているのだ。

「副司令！！迷ってる暇はありません！！」

「……………でも、貴女一人では……………」

「他に方法はありません！」

決意の表情でリリスを説得する。その熱意に負け、リリスはアドラ
メレクに賭ける決心をする。

「わかりました。アドラメレク、貴女に賭けましょう。」

「言ったからには、簡単にやられたりしないでよ。」

ツンとした言い方をしているのは、バルムングもアドラメレクの作
戦には賛成出来ないからだ。

しかし、一時間だけはあの大群をジャッジメントス達に近づけるわ
けにはいけない。

「私はレリウーリアの参謀よ。まっかせなさい！」

胸をポンと打ち、自信を表すが、無駄に明るく振る舞うしぐさが、
拭えない緊張をも表している。

「エネルギー充填率53%、出力最大値を上げたから、予定よりまだかかるわ！」

「では頼みましたよ！」

アドラメレクはリリス達に念を押すと、細長い八枚の銀色の翼を広げエルハザードに向かって飛んで行く。

「バルムング、いつでも行ける準備はしておいて！」

「わかってますって！誰一人欠ける事は許されない……………レリウーリアの掟ですもの！」

リリスもバルムングも、自分達の出番が来る事を祈り、今は成り行きを見守るしかない。

「手当たり次第探しても無駄だ。物が物だけにわかりやすい場所にあるはずだ！」

蕾斗とセイラにリステイが指示を出す。

普段のセイラなら突っ掛かるところだろうが、今は余裕がない。

「確かにそうだろうけど、この瓦礫の山じゃどこ探せばいいか迷うよ。」

バベルが建っていた場所を隈なく見て回りながら、蕾斗がぶつぶつばやき始める。

さつきから降り出した雨も、蕾斗達の身体に纏わり付いてイライラするのも、原因の一つだ。

「ホントに魔導書なんてあるの？ なんだか疑わしいんだけど。」

蕾斗と同じく、セイラもイライラをチラつかせる。

「言っただろ、天使や悪魔の行動を見ればわざわざ疑問視する必要もない。必ずここに魔導書はある！」

出会った時の紳士的な言葉使いなどカケラもなくなっている。

どうやら、リステイは興味のある事に触れると、周りを無視する傾向にあるらしい。

自分中心というべきか。天才によくある理解されないパターンだ。癖が悪い事に、本人に悪気が無い事が、質をより一層悪くしている。

「あのね、一応私、身分が上なんですけど！」

「セイラ様、この際細かい事にこだわるのはやめましょう。一刻を争います、目の前の事に集中を！」

振り返りもせず説教を垂れる辺りが、ジョルジュに似ていて憎たらしく思えて来た。

「リステイ、そこまで言っというて魔導書が無かったら許さないから！」

「ま、まあ、落ち着いて……」

二人に割って入るように蕾斗がセイラをなだめる。

「まったく！ジョルジュといいリステイといい羽竜といい！私の周りにジェントルマンはいないわけ！？」

羽竜の礼儀知らずはもつともだが、本人が聞いたら一緒にするなと憤怒するだろう。

「蕾斗！早く魔導書を探しなさい！！」

「はい……」

セイラの風当たりは当然蕾斗に流れる。
これも運命か……………。

「やれやれなお姫様だよ。なんだか羽竜君そっくり……」

「なんか言った！？」

「いえ、別に！」

せめて最後まで言わせて欲しかったと思う蕾斗だった。

「あれ？これ……………」

その時、瓦礫から半分顔を覗かせてる透明な物体を蕾斗が見つける。

「どうした？何かあったのか？」

蕾斗に駆け寄り、発見した物体を手取る。

「これって、確かバベルで見たやつじゃ……………」

つい最近の事だから忘れるはずもない。蕾斗の記憶にもまだ残っていた。

「ホントだわ。」

リステイが持つ丸い水晶を見て、セイラも確認した。

あの時、もしかしたら自分が触れた事でミドガルズオルムが現れたのかもと思うていたから、今は触れるのを躊躇ってしまう。

「バベルにあつた水晶なら、ただの水晶じゃないだろう。何か秘密があるかもしれん。」

「……………秘密も何も、バベルにはこの水晶一つしかなかったのよ、崩壊しても欠ける事なく残っているんだから、あからさまに怪しいに決まってるわ。」

怪しいどころか、自分が触れば何かが起きる。それだけは間違いない。

もし、またミドガルズオルムみたいな化け物が現れたら？
気持ちは臆病になるばかりだ。

「セイラ様、この水晶について何かご存じなのですね？」

セイラの様子を見れば、水晶の秘密を知っているのは明らか。

リステイはミドガルズオルムを見て、水晶が何を起こしたのか悟る。

「なるほど、ミドガルズオルムは水晶によって召喚されたのですね？」

「……………私がその水晶に触れたら、突然現れたの。きっと、私が触れたらまた何か起きると思う。」

「だったら触れるべきです。」

「でも……………」

「ジョルジュ達が戦っている意味をお考え下さい。」

有無を言わさないリステイの言葉には、どこか脅迫めいた迫力を感じる。

セイラもわかってはいる。水晶に触れなければ、何も始まらないと。

触れれば必ず何か起きる。予感がするのだ。

たかだかガラス玉一個に脅えなければならぬ自分に、不甲斐なさを痛感せずにはいられない。

「大丈夫だよ。何か起きても、なんとかなるよ。」

笑顔で蕾斗がセイラの肩に手を乗せる。

「僕も羽竜君も吉澤さんも、今までどうにもならない事を、力を合わせてどうにかして来たんだ。だから言える。何が起きたって、みんなが助けてくれる。セイラ様一人じゃないんだって。」

「蕾斗……………」

「彼の言う通りです。昨日会ったばかりの私でさえ、彼らを信じられる。何が起きても、彼らがなんとかしてくれますよ。」

「……………信じる……………か。」

蕾斗とリステイの笑顔が勇気をくれる。

「淋しくないのか？」塔の中で羽竜に言われた言葉が思い起こされる。あの時は、淋しくないと言えた。でも本音は、淋しくて心が何度も折れた。その度の下臣達が無理矢理に繋ぎ、また王である事を望んだ。

それがいつしか当たり前になって、国を統治する者は淋しさを持つてはいけないと思つて来た。羽竜に言われるまでは……。

だからどんな事もどんな時にも、脅えて威厳を無くすような真似は出来なかった。

初めて決断をする事に恐怖してしまっている。逃げ出したい。でも、リステイの言う通り不思議とどんな状況になろうとも、羽竜達ならなんとかしてくれる気がする。

、迷う必要などないのかもしれない。

「わかったわ。みんなを信じます。」

蕾斗とリステイが笑顔のまま頷く。

セイラの手がそつと水晶に触れる。

少し間がありはしたものの、案の定水晶は光りを放ち、そしてその光の先には大きな柱が生まれる。

「おお……………これは……………」

リステイが思わず漏らした。天高く伸びる光の柱は、次第に大きく幅を広げ、バベルを彷彿させるほどにまで広がった。

「これって……………バベルの……………塔？」

青紫の光は、バベルそのものだ。蕾斗がそれを口にする。

「あれ見て！」

セイラが青紫の柱の一部が歪んでいる事に気付く。

「入れ……………って事か？」

リステイが真つ先に『歪み』に向かう。

「ちょっと、待ちなさい！」

セイラがリステイを追い、蕾斗もそれに続く。

「どうなさいます？引き返すなら今のうちですよ？」

「バカ言わないで。ここまで来たら行くとこまで行くわよ。」

リステイが苦笑する。セイラの反応が面白いのだろう。

「行こう！悪魔達が来る前に魔導書を手に入れるんだ！」

蕾斗が二人を急かすように言う。

「新しいバベル……………今度は何が起きるのやら。」

ため息混じりにセイラが言って、そびえる柱を見上げた。

第三十四章　オノリウスの魔導書（前編）

羽竜とベルフェゴール千明の戦いは、断然羽竜の方が圧していた。ベルフェゴールは無数の傷と、体力の消耗によってかなりきつい状態にある。

ただ、羽竜にベルフェゴールを殺す気が全く無いので生きていられるだけであって、その気があればとくにやられてしまっているだろう。

「降参しなよ、千明さん。」

「残念ねえ……………降参するくらいなら、死を選ぶわ。くす。でも、まだそれも早いわ。くっ……………」

「もう無理だよ。悪魔の治癒能力がどんなに優れていても、トランスマグレーションで傷付いた身体はどうにもならないんだろ？俺は千明さんを殺したくないんだ。」

「まあ……………随分甘いお誘いねえ。ハー君がどんなに私を想ってくれても、私は貴方を殺すわよ？くすくす。」

なんとか頑張って笑顔を見せているが、ベルフェゴールに後が無い事は一目瞭然だ。

「さあ……………早く来なさい。どちらかがイッてしまうまで、戦いは終わらないのよ。」

彼女の表情は苦痛で笑っていない。立っているだけが精一杯のベルフェゴールに対して、戦う気など失せてしまった。

「やめるよ。」

「え？」

「動けないんだろ？そんな人を相手にする気はないよ。」

「バカにしないで……情けをかけてもらう筋合いはないわ。」

「そう怒らないでよ、千明さん。あんたを今ここで殺しても、何の得にもならない……」

話の途中でふと視界に青紫の光の柱が入る。

羽竜の視線を追うようにベルフェゴールも横を向く。

「フッ……どうやら誰か何かを見つけたみたいだね。」

「まさか……魔導書……？」

「千明さん、悪いけど今日はここまでだね。続きはまた今度！」

そう言つと羽竜は、一目散に光の柱を目指し走り出した。

「ちよっ……ぐっ……」

羽竜がいなくなつて気が抜けたのか、その場に座り込んでしまう。

「フフ………やってくれるじゃない。完敗だわ。」

痛む身体も心地よく感じるのは、満足出来る戦いだつたからこそ。

「次は負けないからね、ハー君。くすくす。」

「蕾斗！！セイラ！！リステイ！！」

息を切らしながら羽竜が駆けて来る。

光の柱の前に三人がいる。それは魔導書の手掛かりを見つけた事を羽竜に思わせた。

「魔導書を見つけたのか？」

「ううん。水晶だよ。ほら。」

羽竜に回りくどい説明は無用だ。蕾斗がリステイから水晶を取り上げ、羽竜に見せる。

「これが……魔導書？」

「だから違うつて。とりあえず光の中に入れるみたいだから、急ごう！」

羽竜へのツツコミもほどほどに、蕾斗が全員に促す。

それに合わせたかのように、ジオルジュ、あかね、メグも駆けて来た。

「どうやら今回は俺達の勝ちみたいだな。」

後から来た三人を見れば、わざわざ結果を聞くまでもない。羽竜の言葉にみんなから笑みが零れる。

「羽竜君、まだ勝利したとは言えないわ。魔導書を手にしたなら別だけど。」

最後まで気を抜かない辺りがあかねらしい。

朗らかなあかねも、戦いが始まってしまうと、スイッチが入るらしく、凛々とした性格に変わるみたいだ。

「ぐずぐずしてる暇はない。急ぐぞ！」

状況の説明は聞かなくともわかるのか、ジオルジュが先頭に立ち『歪み』の中へみんなを先導する。

「鬼が出るか蛇が出るか……」

「蛇は出たから、次は鬼でしょう？ま、覚悟はしなきゃね。」

せっかくかつこよく決めようとした羽竜だったが、メグにあっさりお株を取られてしまった。

「鬼で済めばいいけど。」

一言置いてセイラも中へ入って行く。

「なるべくなら小さい鬼の方がいいかな。」

蕾斗がセイラに続き、次にあかね、リスティが『歪み』の中へ消える。

最後に残された羽竜も慌てて後を追う。

「お、お前ら！俺が主人公だぞ！！置いていくな！！」

それを一部始終見ていた者達がいた。

「ベルフェゴール達はやられたようですね……」

少し不機嫌な様子で、ベルゼブブが『歪み』に消えた羽竜達を見ていた。

「でも死んではいないでしょう。あの子達は慈悲の塊のような存在ですから。」

アシユタロトが、まだ微かにベルフェゴール達のオーラを感じる。羽竜達がとどめをささなかった事が伺える。

「どんどん強くなっていきますのね、終焉のボウヤは。」

グングニルにもたれ、ルシファーが恨めしげに言う。

「目黒羽竜だけではないわ。彼の仲間達も強くなって来てる。藤木
蕾斗、吉澤あかねも。危険ね。」

ジャッジメンテスの不安は、三人の力が未知なものだという事にある。

対処しきれなくなる前に、なんとかしたい。ただヴァルゼ・アーク
がまだそれを許可しないのだ。

流れで彼らが死んでしまうには問題ないらしいが、敢えてこちらから
命を奪う事は避けたいらしい。その理由もまだ聞かされていない。
だからこそ野放しの羽竜達に不安が募る。

「面倒だから殺っちゃえば？どうせ殺るんでしょ？そのうち。」

面倒くさがりのサタンには、指示待ちというのが性に合わない。

「サタン、口を慎みなさい。」

ベルゼブブが一喝する。

「ここで手をこまねいても始まらないわ。彼らの後を追いましょう。
魔導書はすぐそこよ！」

ジャッジメンテスが『歪み』に突入するよう指示を出す。

「おーほっほっほっ！奪ってやろうじゃない。オノリウスの魔導書
！」

「手柄の横取りは反対しますよ。」

先走りそうなルシファーに、一応アシユタロトが釘を刺す。

ジャッジメンテス達は、躊躇う事なく羽竜達を追う。

そこに魔導書があると信じて。

第三十四章　オノリウスの魔導書（中編）

アドラメレクの策は順調かに見えた。天使の大群の周りを尋常じゃないスピードと、瞬間移動で翻弄し足止めをしているが、天使達からの魔法攻撃と体力の激しい消耗によって、長くは続かない事を予感させる。

「ティアマト！まだ！？」

時間的にはまだ数分しか経過していない。こういう時の時間の流れは長く感じるものだ。
バルムングの苛立ちも限界に来ている。早くしないとアドラメレクがもたない。

「もう少し！！」

ティアマトのロストソウルから凄まじいエネルギーを感じる。

「きゃあっ！！」

アドラメレクの悲鳴が聞こえ目をやると、落下していくのが見える。動きが鈍ったところに、魔法が直撃したらしく真っ逆さまに落ちる。

「アドラメレク！！」

リリスは瞬間移動で彼女の真下まで生きアドラメレクを受け止めた。が、自由になった天使達が反撃を開始する。

「急いで！！」

バルムングはオーラを全開にして、準備を整えてある。後はティアマト次第。

「オツケー!!! 天使め! させるもんですかつ!!! 消えうせろつ!!! 超特大の! カオスフレア - - - ツ!!!!!!」

2基の波動砲から放たれたエネルギーの波動が、竜神の吐くプレスのようになる。

反撃に転じようとした天使達を一瞬で消し去る。僅かに残った残党を葬る為、バルムングが飛び出しロストソウル・九十九折の爪で溜まっていた鬱憤^{うっぷん}を晴らす。

「次は私からのプレゼントよ! 天地創造!!!」

バルムングの手の平に生み出された丸い玉が、高く掲げられると光を放ち天使達を浄化していく。何も無い空間で、まさに天と地が創造されるように、実に鮮やかに。

「なんとか勝てたわね。」

気を失ったアドラメレクを抱えたまま、リリスは胸を撫で下ろす。だが、すぐに異変に気付く。

「待つて!!! まだ……来るわ!!!」

こんなにいたのかと思うほど、次から次へ天使が現れる。そして今度は、先頭にミカエルがいる。

「も、もうカオスフレアは撃てないわよ!?!」

最後だと思って全てを込めて放ったのだ。体力もなにもかも余力は無い。

「こつなつたら意地でも全滅させてやろうじゃない！」

勝ち負けを考えても仕方がない。バルムングはふわりと前髪をかきあげると、一呼吸置いてミカエル達に突っ込もうとする。

「意地でどうにかなる相手じゃないだろ。」

耳元で声がして、横を見る。

「サ……サマエルッ……！」

「お前達悪魔はロストソウルの力に頼りすぎだ。もっと技を磨くべきだと思っがな。」

翼が無い。この世界のサマエルではなく、自分達と同じ千年後から来たサマエルだ。

「あ………あんた、どうやって……」

「フン………レジェンダを介して来たに決まっているだろう？他に過去に来る手立てがあったか？」

「なるほど………まあいいわ。ごちゃごちゃやってても始まらないし。邪魔はしないでよね、天使さん。」

「お前らこそ、一度勝ってる相手に負けるような無様は晒すなよ。」

どうも雰囲気の違いサマエルにバルムングも調子を狂わせるが、とりあえず今はミカエル達を倒すのが先。勢いよく飛んで行くサマエルに遅れを取るまいと、バルムングも翼を広げ天使に戦いを挑む。

「ティアマト、アドラメレクをお願い。」

戻って来たリリスが、アドラメレクを地面に寝かせティアマトに任せる。

「了解しました。」

「サマエルなんかに先を越されるわけにはいかないわ。」

ロストソウル・生殺与奪を大きく振り回し、迫り来る天使を睨み据える。

飛び込んだ『歪み』の中は、神秘を思わせる。

暗闇に包まれ、所々青白い光が点在している。床には何か紋章のようなものが描かれている気がするが、はっきりとは見て取れない。

「階段は昇る必要はなさそうだけど……………ここは一体どこなんだ？」

あのやけに長い階段が存在しなかったのはありがたかったが、『いかにも』って雰囲気場所に羽竜も戸惑う。

「当たりは引いたみたいだな。」

ジオルジュも『いかにも』な空間を警戒している。

「いるのかな……………オノリウス……………」

やっとその姿を拝めるのかもと、蕾斗がそわそわしている。

「いるなら出て来い！！オノリウス！！」

「この人は……………」

羽竜らしいと言えば羽竜らしい行動なのだが……………蕾斗が頭を痛めてしまう。

「羽竜君、ケンカしに来たわけじゃないんだからもうちょっと穏やかに……………」

「何言つてんだ！そもそもオノリウスのせいで戦いが起きてるんだぞ！吉澤は甘いんだよ！ケンカ売るくらいでちょうどいいんだ！」

人差し指でチツチツと舌打ちしながらあかねを諭す。

いつもながら自分本位な解釈の仕方ではあるが、毎度の事なのでいい加減慣れてしまった。

「羽竜の言う事も一理あるわ。戦いの元凶は魔導書にあるんだもの。責任は取ってもらわなきゃ。」

セイラの強い想いは、世界を混乱に招いた魔導書への怒りにある。

「それは名案ですこと。是非オノリウスに責任を取っていただきましょう。」

羽竜達を追って来たルシファー達が現れる。

「げっ……あんだ、確かルシファー！」

羽竜の前に現れたレリウーリアは、いつもはお目にかかる事がない者ばかりだ。

一番前にいるのは、お嬢様口調で現れたルシファー、その後ろにサタン、ベルゼブブ、アシュタロト、最後にジャツジメンテスがいる。

羽竜達を知るのはジャツジメンテスだけだろう。ベルゼブブとルシファーは天界で一度会っている。サタンとアシュタロトを間近で見るのは蕾斗以外は初めてだ。

「騒々しいのはアシュちゃんとバルちゃんと同じね。」

「はい〜？どの口が言ってるのかな？サタンちゃん？」

「イタタタタ……………」

軽口を言ったサタンの頬をアシユタロトが結構な力でつねる。

「悪魔が……………懲りずに来たか！」

「何度でも相手になってあげるわ！」

ジオルジュとメグは早くも戦闘体勢をとる。

「やめときなさい。貴方達では私一人にも勝てないわよ。」

そう警告するのはベルゼブブ。彼女に悪気は無い。無駄な血を流させまいとする優しさからなのだが、素直に聞き入れてもらえるわけもなく、ジオルジュとメグがベルゼブブに攻撃する。

「黙れ！行くぞ！メグー！」

「私とカルブリヌスなら！！」

遠慮なくベルゼブブに切り掛かるが、不意に出されたロストソウル・ダモクレスの剣であしらわれてしまう。

「人の話聞いてたのかよ！友好的にしていれば調子に乗りやがって！消してやろうか！？」

少し前の穏やかで綺麗なベルゼブブではなく、突然の言葉遣いの悪いベルゼブブにジオルジュもメグもたじろぐ。

「出ちゃったよ、黒ベルゼブブが……」

「あら、元から黒でしてよ、私達。」

アシユタロトもルシファーもお手上げのジェスチャーを見せる。

「それくらいにしなさい、ベルゼブブ。」

沈黙を破ってジャツジメンテスが発する。

「今は彼らに構ってる暇はないわ。時間が無いのよ。」

「何を焦ってるか知らないけど、相当時間が無いみたいだな？ だったらあんたらのタイムリミットが来るまで相手してやるぜ！」

ジャツジメンテスの焦りが羽竜にはひしひしと伝わって来る。

彼女が時間が無いと言う以上、なんの事情かは知らないがタイムリミットがすぐそこまで迫っているのは明白だ。

「よせ！ 羽竜！ こいつ……さっきまでの悪魔とは格が違う！」

ジョルジュが今にも飛び出しそうな羽竜を止める。

「ベルフェゴールやアスモデウス達と同じにしてもらっては困る。女と思って見くびるなよ？」

生き物としては、すごく不自然なレーザーのように青く光る瞳のベルゼブブが、ロストソウルを羽竜に突き付ける。

「サタン、アシュタロト、ここはベルゼブブとルシファーに任せて魔導書を探しなさい。」

「了解!!」「」

ジャッジメンテスの指示に即座に反応する二人だが、蕾斗とあかねが立ちはだかる。

「そうはさせないよ!」

「フン……どうさせないつもり?」

サタンと対峙する蕾斗がその手に魔法を出す。

あかねもアシュタロトを封じるべくミクソリデアンソードで対応する。

「エアナイトの実力、見せてあげましょうか?」

「だいぶ自信を付けたセリフね。いいんじゃない? 同じ女性として応援はするわ。でも、貴女の腕で私に勝てるかしら?」

戦いになるうとなるまいと、ジャッジメンテス達の行動は防げている。

羽竜にはここまでの考えはなかったが、蕾斗とあかねは考えがあったの行動だ。まともに戦っても彼女達に勝てるとは思っていない。

「ジャッジメンテス! ヴアルゼ・アークはどうした? 俺はアイツに話があるんだ!」

羽竜は、突き付けられているベルゼブブのロストソウルに、トラン

スミグレーションを突き付ける。

「総帥なら今頃雲の上で蛇退治をなさってるわ。」

「ミドガルズオルムと戦ってるのか!」

リスティが口を挟む。驚きの言葉を。

不穏な乾いた空気だけが静かに羽竜達と悪魔達とを見守っている。その時、彼らが来た『歪み』の対面な方から強い光が射し込む。

「羽竜!! あそこ!!」

セイラがいち早くそれを確認すると、光と一緒に漂うオーラを感じる。

「この気配………いる! オノリウスが!」

アシュタロトがかつて感じた気配を思い出す。

「よしっ! みんな、走れ!!」

羽竜の掛け声と共にセイラとリスティ、蕾斗とあかねが走り出した。

「追っわよ! みんな!」

ジャッジメンテス達も光に向かって走ろうとするが、ジョルジュとメグが相変わらず邪魔をする。

「ジョルジュ! メグ!」

立ち止まった羽竜が二人に声をかける。

「行けっ！！羽竜！！ここは俺達が食い止める！！」

「食い止める？まだわからないみたいね、力の差を。」

ベルゼブブの存在感に吞まれそうにながらもどけるつもりはない。

「早く行つて！！悪魔に魔導書を渡すわけにはいかないのよ！」

カルブリヌスを握る手が震える。恐怖はメグにとっては初対面かもしれない。初めて会った恐怖に負けそうになる。だから早く行つてほしい。戦いが始まってしまえば恐怖を忘れられそうだから。

「カルブリヌス？.....思い出したわ、聖剣エクスカリバーの別名ね。まさかアーサー王の末裔が生きていたとは。」

ルシファアの言葉に他の悪魔達も思い出した。

「何をしている！！行けっ！！」

ジョルジュの叫びに羽竜達は黙って光へと消えて行った。

「どうなさいます？司令。」

サタンが一応確認をとる。返ってくる言葉はわかっているが。

「殺してしまいなさい。私は目黒羽竜達を追います。ベルゼブブ、貴女は私と来て。」

「はい。」

一言返事をする、ジャッジメンテスと共に羽竜達を追う。

「エアナイトとアーサー王の末裔か……遊び程度にはなるかもね。」

不敵な笑みを浮かべ、サタンがロストソウル・マスカレイドを一振りする。

「メグ、お前がアーサー王の末裔だったとは……」

「私も最近知った事実よ。」

三人の悪魔の前に余裕は無い。

「死ぬなよ、メグ。」

「貴方もね、ジョルジュ。」

フロアを蹴った音を合図に、戦いが始まった。

第三十四章　オノリウスの魔導書（後編）

光の中へ飛び込んで出た場所は、バベルの頂上で見た雲と雲の間だった。

違うのは、そこに老人がいた事だけ。白髪で長い髭を携えた品のいい老人。そして、その老人が誰なのかは、言わなくとも誰もがわかった。

羽竜、セイラ、蕾斗、リステイ、あかね、ジャッジメンテスとベルゼブブでさえも老人を見据え黙り込む。

最初に声をかけたのは羽竜だった。

「……………オノリウスだな？」

羽竜の問いに静かに頷き、口を開く。

「よく来たな、終焉の源よ。」

終焉の源……………ヴァルゼ・アークとダイダロスもそう呼んでいた。

「終焉の源って……………どういう意味だよ？」

「時代に終わりを告げる者。時代を終わらせ、新たな時代へと導く者。それが終焉の源だ。」

「俺はただの人間だぜ？」

「人間であろうとなかろうと、終焉の源である事に変わりはない。それが運命なのだからな。」

何故自分が？などと聞いても無駄なようだ。

運命という言葉で説明がついていると言っているのだ。

ヴァルゼ・アークに直接聞いた方が早い。ならば、今聞かなければならない事は一つ。

「オノリウス、魔導書は何処だ？」

羽竜が言おうとした瞬間、ベルゼブブがオノリウスに聞いた。

「魔帝は全てを未来に託したか。」

ベルゼブブとジャツジメンテスを見たオノリウスは、彼女達が悪魔と人の融合だとわかっているようだ。

いや、何もかも知っている。

「質問に答えてもらいましょうか？魔導書は何処にあるの？」

やはり焦っている。いつものジャツジメンテスとは違う。クールな雰囲気が無い。

「……………魔導書など存在せん。」

耳を疑った。ジャツジメンテスだけでなく、羽竜達もみんな。

「悪ふざけは子供のする事よ。ここまで手の込んだ事をしておいて、今更魔導書がありませんなんて通用しないわ。さあ、答えなさい！でないと首が飛ぶわよ？」

シャムガルを具現化する。脅しじゃないだろう。答えなければ本気

で首を飛ばす気だ。

「ジャッジメンテス……魔導書などは始めから無いのだ。私が魔導を使う時、いつも抱えていた書物を見て人々が言い出した事。幻よ。」

「嘘をつくな！レジェンダはあんたが魔導書を書いた事を後悔していたと言っていた！無いというならば、レジェンダが言っていた事はどうなる！？」

ジャッジメンテスの肩を持つ気はないが、羽竜も気持ちは彼女と同じだ。魔導書が無いなんて言葉は信じられない。

「まさかレジェンダを知らないなんて言わないだろうな？」

「知っているとも。」

知らないなんて言ったら殴るところだった。レジェンダは、魔導書の番人。そう言い渡したのもオノリウスだ。

「魔導書が存在しないなら、一体何の為にこんなことを？」

あかねもオノリウスの回りくどさに、いい加減腹も立ってきた。やっとゴールに辿り着いたと思えば、スタートすらなかったという話馬鹿にされてるようで我慢ならない。

「私がレジェンダを使い過去への道を引いたのは、インフィニティ・ドライブの真実を終焉の源に語る為。この世界の終焉の源は刀匠ダイダロス。ところが、暗黒の時代を終わらせるはずの終焉の源は、ロストソウル、イグジストを造り、戦争を加速させてより深い闇へ

と誘^{いざな}った。私はダイダロスに何度も暗黒の時代を終わらせるよう頼んだのだが、彼は自分の才能に溺れ、私の頼みを拒んだ。全ては自分一人がインフィニティ・ドライブを手にしようという企みの元。だが、それも儚く終わっただろう。インフィニティ・ドライブは選ばれた者しか手に出来ん。終焉の源であっても、例え神であってもだ。」

きつと、ジャツジメンテスもベルゼブブもア然としただろう。インフィニティ・ドライブは選ばれた者だけが手に出来る。遠回しではあるが、ヴァルゼ・アークも羽竜達にも縁のない力だと言っているのだ。

「なら、インフィニティ・ドライブって誰のものなの？」

ジャツジメンテスに変わり、ベルゼブブがオノリウスに問うと、オノリウスがわかりやすく答えた。

セイラとリステイにはわけのわからない話になっているだろうが、羽竜達と悪魔達には実に誠実な答えだった。

「インフィニティ・ドライブとは私が持つ力……………すなわち、魔導の事だ。」

息が止まりそうになる。全ての視線は、蕾斗に注がれる。

「魔導……………？魔導がインフィニティ・ドライブだって？」

蕾斗もどいう反応をしたらいいのか困っているようだ。
無理もない話だが。

「インフィニティ・ドライブとは、宇宙が生まれた時に捨てた、罪

の意識。宇宙は生きていく上で罪の意識は必要無いと考えたのだ。その罪の意識は、還る場所を失い、人に宿った。アダムという人類最初の人間に。」

「アダム……………それって……………」

蕾斗が唾を飲む。聖書のアダムなら知っている。でもアダムが魔導だとか魔法を使ったなんて書いてなかったはず。

「アダムはエデンの住人。彼はイヴとリリス間に子をもつけたが、エデンを荒らし回るリリスの子に胸を痛め、ガイア……………地球へと追放したのだ。その時、アダムもリリスの子らを一人残らず確実に追放した事を確認する為、地球に来ていた。ところが、エデンに帰る道を神や不死鳥族に断たれてしまう。怒り狂ったアダムは、リリスの子らを従え、神と不死鳥族に戦いを挑み、勝利を収め地球を我が物したのだ。それが人類最初の人間たる由縁。結局、人間は地球の環境に適応出来ずに絶滅まで追い込まれるのだが、地球の時間軸と生命エネルギーを糧に独自の世界を造っていた神と不死鳥族は、人間に絶滅されればせっかく創造した自分達の世界まで破滅してしまうと焦り、地球に適応出来る人間を造り、リリスの子らとの配合を試みた。その子孫が今の人間であり、魔導を持つ私とその少年は……………」

「アダムの子孫……………」

ジャッジメンテスが呟く。蕾斗を見ながら。オノリウスは続ける。

「そうだ。行き場を失った宇宙の罪の意識をアダムが受け入れたからこそ、世界は存在している。そしてアダムは後に、無限の可能性

を秘めたその力をインフィニティ・ドライブと名付けたのだ。」

「なんてこと……………インフィニティ・ドライブは遺伝子になって存在してるのね。」

ジャッジメンテスがショックを受けているのがわかる。セイラとリステイもスケールの大きな真実に、手も足も出ない。

「総帥になんて言えばいいの……………?」

「しっかりして下さい、司令。」

フラつくジャッジメンテスをベルゼブブが支える。

戦う意思は無いだろう。

「何の為に……………何の為に千年の時を超えてまで復活したの? 私達は一体何をしてたの?」

羽竜達の知ってるジャッジメンテスは今日はどこにもいない。いるのは絶望に打ちのめされた憐れな女だけ。

「残念だったな、ジャッジメンテスよ。これが真実だ。私が何故こんな事をして来たか、それは……………」

「私達に絶望を与える為。そして終焉に希望を与える為。フラグメントを集め、過去へ来るのは誰でもよかったんでしょ? 神でも天使でも不死鳥族でも。魔導書を……………インフィニティ・ドライブを巡る戦いを終わらせる為だけの猿芝居。終焉に真実を告げ、役目を遂行させる為の育成教育。ダイダロスみたいに、終焉の源としての役目を放棄されないように。……………まんまと躍らされたわけね。」

言葉を失っているジャツジメンテスに変わり、ベルゼブブがオノリウスの真意を語る。

「……………帰りましょう、ベルゼブブ。もうすぐ総帥との約束の時間よ。それに……………」

懐中時計を確認する。あと五分で約束の一时间になる。

ジャツジメンテスがベルゼブブから離れ、気を取り直す。

「過去（こ）にもう用は無いわ。」

それ以上は何も言わずに、ベルゼブブと共に戻って行った。

「ジョルジュ！メグ！」

二人が危ないと思い、セイラが声を上げるが、

「心配いらないよ、セイラ。ジャツジメンテス達は戦いを止めて帰るはずだ。」

羽竜が落ち着かせる。

「この世界に用は無いと言っていたし、ヴァルゼ・アークと時間の約束をしていたようだった。彼女達はヴァルゼ・アークを裏切らない。そういう人達なんだよ。」

羽竜の説明にセイラも安心する。羽竜達と悪魔達は顔見知りのようだし、信用は出来るだろう。

「オノリウス、そういえばこの世界のジョルジュも、そこにいるリステイもあんたを知らないと言う。でもレジェンダは、あんたを父と呼んでいた。これはどう説明してもらえるんだ？」

こういう時の羽竜はよく頭が回る。動揺しないと言うか、冷静な一面を見せる。

「この世界は、私が魔導で^{ねじ}捻曲げた時間の中で存在している。その方が事がスムーズに運ぶのだよ。特に、悪魔達が来る事は予測出来た。魔帝はロストソウルの秘めたる力を見抜いていたからな。知っているはずの過去なのに、知らない過去を歩かねばならない。そういう状況に陥ると、余計な事を考えないのだ。ただ記憶にある重要なポイントだけを追うという行動に出る。それが証拠に、魔帝はお前達をバベルへと導いた。過去において一番重要な場所だと知っているからな。」

あの時現れたヴァルゼ・アークは、やはり羽竜達の知っているヴァルゼ・アークだったのだ。

「俺達はこれからどうすればいいんだ？」

結論を求める羽竜に、オノリウスは優しく肩に手を掛ける。

「私がダイダロスにトランスミグレーションの作製を依頼したのは、延々と続くだろう戦いを断ち切る為。人間にしか扱えない剣を造ってほしいと。あざといダイダロスは、人間とは言っても終焉の源だけが扱える剣を造ったのだ。もっとも、それを見越しての依頼だが。」

「でも、ダイダロスの前でトランスミグレーションは機能しなかつ

た。ダイダロスが言うには、創造主の前ではトランスミグレーションすら逆らわないってよ。」

「何の為の仲間かな？」

オノリウスが蕾斗を見る。

「僕は……魔導を使いこなせていないし、魔法も満足には……」

蕾斗の自信の無さは、ますます募るばかり。
まだ事実を受け止められていない。

「少年よ、名は？」

「蕾斗です。」

「蕾斗……インフィニティ・ドライブは無限の力。思うがままの結果を出してくれる。ただ信じればいい。友の力を。ただ求めればいい。無限の可能性を。さすれば、きっとダイダロスにも魔帝にも勝てるだろう。」

温かいオノリウスの手が蕾斗の頬を撫で、混沌としていた心に安らぎを落とす。

「わかりました。やってみます。」

精悍な顔付きを見せた蕾斗に満足したのか、残された疑問に歩み寄る。セイラの前に。

「世界のバランスを取る少女よ……この世界はもはやお前一人

に委ねられてある。」

「冗談じゃないわ。勝手な言い分ばかり。貴方もそのインフィニティ・ドライブって力持つてるんでしょ？無限の可能性を秘めた。だったらその力で世界を救ってよ！その為にここまで来たのよ！それとも、無限の可能性は嘘っぱちなの！？」

我を忘れて激昂するセイラに、オノリウスは優しく説く。

「プリンセス、人には宿命というものがある。世界のバランスを取るの、お前さんの役目だ。仮に、私がインフィニティ・ドライブで世界を元に戻しても、百年と続かぬ世界にしかならん。何故だかわかるか？」

黙って首を横に振るセイラの目に、涙が浮かぶ。

「インフィニティ・ドライブは使う者の心が反映される。私は世の中に失望し、人に失望し、ただこうして未来を担う者だけを待つ事に全てを注いだ。もうお前さん達のような情熱が無いのだよ。そんな私が世界を元に戻せるわけがない。心にも寿命はある。間もなく死を迎える私の心ではなく、世界を想うプリンセスが己の役目を全うしなければ、世界はおろか、人々は救われない。」

「私は……私は何者なの？教えて！オノリウス！」

「お前さんは……パンドラボックスの一番奥底にあった希望……
……イヴの涙だ……怒りで鬼となったアダムを想
い……流した……涙……」

話をしているオノリウスの身体が透けてきた。

「オノリウス!!」

羽竜がオノリウスに触れるも、手が擦り抜ける。

「……………それぞれの……………役目……………果たす……………が
……………いい……………人の……………可能性
……………を……………信じ……………生き……………いい……………ば
……………だ……………終……………ア……………ダム……………
……………」

何を言ってるのか聞き取る事は出来なかった。

おそらくオノリウスの言った、心に寿命が来たのだろう。

推測だが、全てのカラクリを維持する為だけにインフィニティ・ド
ライブを使い続けたのだ。過去の住人でありながら、互いに意識は
共有出来ていた。閉鎖された空間の中で、オノリウスもまた千年を
生きていたのだ。羽竜達に会って、想いを託す為に。

オノリウスの魔導書とは、彼の生き方だったのかもしれない。

そして、それは確実に羽竜達に受け継がれた。

第三十五章 真実に捧げる終焉の歌

「申し訳ありません。」

由利の謝罪はいろんな意味がこもっていた。

バベルから脱出後、傷だらけになった仲間達と合流、その少し後からヴァルゼ・アークが帰って来た。彼もまたかなりの手傷を負っていた。

ミドガルズオルムとの死闘は難を極めたのだろう。魔帝の姿ではなく、人間のヴァルゼ・アークの姿で愛子と純に支えられている。

由利が謝罪してからは、誰も言葉を発しなかった。

愛子と純が、近くにあったバベルの瓦礫にヴァルゼ・アークを座らせる。

沈黙が重く、息苦しい。

「何も謝る事じゃない。」

ヴァルゼ・アークは痛みを堪えて、なるべく笑顔を見せる。

「しかし……………」

「みんな無事ならそれでいいじゃないか。」

「でも魔導書を……………インフィニティ・ドライブを手に入れる術が……………」

由利が珍しく動揺を隠し切れない。いつもの厳しく、何事にも動じず、沈着冷静な由利ではなくなっている。

「インフィニティ・ドライブと魔導が同一のものだったとは………
…誤算だったな。」

落胆している様子はない。インフィニティ・ドライブはアダム直系にしか宿らない力だと言うのに。

「これから……これから私達はどうしたらいいのでしょうか？」

目的を失って途方に暮れてしまう。前向きな美咲も俯いたままだ。

「目黒羽竜達を殺しましょう。特に藤木蕾斗はインフィニティ・ドライブを持ってるし、まだヒヨコのうちに消してしまえば………」

「それではヴァルゼ・アーク様の目的は達成されないのです。」

「でもどうする事も出来ないでしょ！？わかってて言うてんの！？」

絵里は、景子に意見を真っ向から否定され苛立ちをぶつける。

「やめなよ、絵里ちゃん。景子に当たっても解決にならないよ。」

翔子も絵里の気持ちは理解しているつもりだが、年下の景子に当たるのはあまりにかわいそう過ぎる。

「サマエルはどうした？」

俯く美咲にヴァルゼ・アークが声をかけた。

「ミカエル達を殲滅させた後、どこかへ失せました。」

「サマエルめ……何をするつもりだ……？」

ヴァルゼ・アーク自身、特別サマエルを警戒はしていないのだが、行動の意味がわからないままうつかれては目障りだ。

「ダイダロスも姿を見せないけど、どういっつもりなのかしら？」

「怖じけついたんじゃない？蛇には勝てないだろうし、私達にも勝てないだろうからね。」

「何それ？ハー君達に勝てなかった私達への当て付け？」

絵里は、どこにぶつけたらいいかわからない苛立ちを、今度は千明にぶつける。

「別に当て付けてるわけじゃないわよ。不甲斐無い仲間を想ってあげてるだけよ。」

「言ってくれるわねえ……あんただってオクターヴにコテンパンにされて帰って来た事あったじゃない。あげくに、ダイダロスにまでやられて。不甲斐無いのはどちらさんかしらねえ……くすくす。」

「今なんつった？いい加減にしないとマジで怒るよ？」

「先にケンカを吹っ掛けて来たのはそっちでしょう？おバカさんは一度シメないとわからないようねえ……」

「もうおよしなさい！みっともありませんわ！」

絵里と千明のケンカを純が仲裁に入るも、純のお嬢様口調が油となつて余計にややこしくなる。

「お嬢様は黙つてなさい。これは私と千明のケンカなんだから！」

「ケンカになればいいけど……………くすくす。」

全くかやの外にされ、純も我慢してた苛立ちをあらわにする。

「人が下手に出れば付け上がって！」

「やめないか。」

怒鳴りはしないものの、彼女達にとっては恐れ多くもレリウィリアの象徴。声のトーンで彼女達も空気を読む。

今の一言は、ケンカをやめなければ『ならない』空気だ。

ヴァルゼ・アークが本気で怒ったところは誰も見た事がない。

唯一、不死鳥界で『何か』に対して怒りを見せたくらいだ。

反省して三人が謝る。

「……すいません。」

由利の謝罪ほどの重さはないが、三人には三人なりの誠意があるのは届いたようだ。

「全く……………世話のかかる女ばかりだな。」

「でも、嫌いじゃないんですよ？ 私達の事！」

空気を変えようと、ローサが明るく振る舞う。

すると、私が一番だ！とかいいや私が！などと瞬時に『いつもの』レリウーリアに戻って行く。ローサの貢献が大きかったは間違いない。

他の者ほどはしやぎしないが、由利の表情にも笑顔が戻る。

「やっぱり私ってダメですね。情けなくなります。」

「過去（こつ）に来る前にも言っただろ、みんな完璧じゃないからそれを補い合っつて。ダメとかダメじゃないとか言うのはよせ。」

「はい。」

軽く説教をしたつもりなのに、思わずドキッとするような笑顔を見せられ、今の状況を忘れそうになる。

「とにかく、今は傷を癒すのが先だ。みんな、帰るぞ！」

ゆっくりと立ち上がり、空を見る。そこにはまだミドガルズオルムがいる。

「蛇は死んでいるのですか？」

あまりのショックに、ミドガルズオルムの事など誰も忘れていたが、ヴァルゼ・アークの傷はミドガルズオルムとの戦いのもの。由利にはその結果が気にかかる。

「気を失っているだけだろう。全力でぶつかって、こっちは血塗れだというのに、奴は気を失うだけなんだから……お前の言う通り、一時間だけにしといてよかったよ。」

おおよそ、血塗れと言った格好には似つかわしくない微笑みが、満足する戦いだった事を匂わせる。

「総帥！一時間って決めたのは、司令だけじゃなく私達『も』ですからね！お忘れなく！」

ローサに迫られ、いやはやと慌てるヴァルゼ・アークを見て、笑いが起きる。

すると、光のバベルから羽竜達が戻って来た。

戻って来た羽竜達は、まるで修学旅行のような雰囲気のヴァルゼ・アーク達に目を丸くしている。

「来たか、羽竜。」

フラつくヴァルゼ・アークを近くにいたローサが支える。

想像していなかったヴァルゼ・アークの姿は、羽竜には衝撃を与えた。

「ヴァルゼ・アーク……………」

「今回はお前達の勝ちだ。仕切り直すには時間がかかりそうだよ。おかげさまでな。」

さっきまで、オノリウスとこの上ないくらい真剣な話をしてきたばかりなのに、やっぱりヴァルゼ・アークにはいつも調子を狂わされる。何より、彼の笑顔は女の中でよく栄える。

「怪我人のくせにハーレム気分なんて、たいした余裕じゃないか？」

「仲間に入れてやろうか？女優から中学生まで、幅広く取り揃えて

るぞ?」

女優と言われ、千明はニコリと笑い、中学生と言われた景子は羽竜と目が合って顔を背ける。

「ふざけないで下さい!羽竜君は貴方とは違います!」

羽竜が答えるより早く、あかねが答える。

「でもハーレムは男の夢よ?ま、ハー君はあかねちゃんがいれば満足か。くすくす。」

千明が二人に意地悪してやる。

「お、俺達そんなじゃないです!」

慌てて否定する羽竜の足を、あかねが思い切り踏み付けた。

どんなに皮肉をぶつけても、全て受け止められてしまうから敵わない。

「千明お姉様、目黒君の器量じゃハーレムは無理よ。」

クラスメートの結衣にまで言われる始末だ。

「う、うるせー!新井は引っ込んでろ!俺が話があるのは、ヴァルゼ・アークだけだ!」

「そういきり立つな。話は聞いてやるよ、約束だからな。だが、今日は勘弁してくれないか。見ての通りのザマでね、正直こうしてるのも辛いんだよ。」

「なら一つだけ聞かせてくれ。」

「なんだ？」

「あんたら、これからどうするんだ？ ジャッジメンテスから聞いたんだろ？ インフィニティ・ドライブは蕾斗が持っている魔導の事。奪うも何もなくなったわけだ。あんたが何をしたかったのかは知らないけど、もう諦めるんだろ？」

「フハハハハ！ 諦める？ 俺が諦めたら、今まで命を賭けて戦ってきたこいつらに申し訳が立つと思うか？」

「インフィニティ・ドライブが無くても目的は達成出来るって事か？」

羽竜の質問に、すぐには答えない。答える事に少なからず抵抗がある。

由利でさえ知らない自分の目的……………仲間達もヴァルゼ・アークの言葉を待つ。

「どうなんだ？」

「……………俺の目的は、宇宙を無に還す事だ。」

覚悟を決めて口にしたヴァルゼ・アークの言葉に、全員息を飲む。世界征服をしたいわけではない事は、羽竜達も知ってはいたが、宇宙を無に還す……………全てを無くす事が目的だとは、誰も思わなかった。

「宇宙を……無に還す？」

「そうだ。聞いた事のあるフレーズだろう？だがそれは確実に出来るんだよ。」

「何言つてんだよ。無に還したら俺達だけじゃなく、あんたもあんなの仲間も死んじゃうじゃないか。」

「無に還するという事は、死んでしまう事とはまるで違う。」

「なんで……あんた達見ると、楽しそうに生きているように見えるのに、なんでそんな事をするんだ？」

「……羽竜、あかね、蕾斗、セイラ、それとお前達もよく聞くがいい。この宇宙に存在する生命体には既に運命が定められている。いつ生まれ、いつ死ぬのか……それだけではない、この世で起こる戦争、犯罪、個人の小さな行動、全てだ。どんなにあがいても変える事は出来ない。ある程度は変える事も出来なくはないが、結末は同じ。それを俺は法則と呼んでいる。例えば、この時代で悪魔が天使に勝つという未来は存在しない。なぜなら、悪魔は天使に勝てない。それが法則だからだ。だからロストソウルに悪魔の記憶と力を込め、ここから千年後の俺に全てを託したのだ。天使に勝つ事で法則を破り、宇宙の意味から外されれば、運命に従う事はなくなる。それを望んでな。」

「で、でもあんたの話は矛盾してるじゃないか。千年後の未来で、あんた達が天使に勝つ事だって運命じゃないのか？」

羽竜が吞まれそうな真実に必死に抵抗する。……したいのだ。生き死にが、個人の行動まで決まっているなど信じたくない。

「これは俺の推察だが、ダイダロスはお前と同じ終焉の源だったんじゃないかと思っている。つまり、時代を終わりに導く終焉には、宇宙の意思にほんの少しだが、抵抗出来る力があると知っていたのだろう。ダイダロスが生み出したロストソウル、イグジスト、奴の持つファイナルゼロ、お前のトランスミグレーションがその証拠だ。しかし、終焉として例外は無かった。宇宙を揺るがすような行動は取れなかった。ダイダロスが法則を破るには、自分が時代を終わらせるのではなく、終焉でない誰かが終わらせるしかなかった。その為の武器なんだよ、俺達の武器は。」

「ダイダロスは…… やっぱりあんたと同じ目的を？」

羽竜に聞かれたヴァルゼ・アークは、ただ首を横に振る。

「奴は宇宙そのものになるうとしている。奴も俺達も、法則は破つてある。あと必要なのは、インフィニティ・ドライブ……… だけだったんだがな。」

奮斗を恨めしげに見つめる。

「オノリウスの話では、ダイダロスはインフィニティ・ドライブが魔導だって知っていたらしいぜ？ それなのに、インフィニティ・ドライブを求めてたって言うのかよ？」

「なんだと……… ！？」

羽竜の情報に、前のめりになるほど乗り出して驚く。
ローサが支えてなければ倒れていただろう。

「そんなはずはない！インフィニティ・ドライブが魔導である以上、例え蕾斗を殺してもその力を手に入れる事など不可能……………」

この時、ヴァルゼ・アークは気がついた。羽竜の情報の答えに。

「総帥……………」

固まるヴァルゼ・アークを、不安そうにローサが見ている。

「そうか……………なるほど……………クク……………フハハハハ！」

一人だけ笑う声が辺りに響く。

「何がおかしいんだ！？」

「ハハハ……………羽竜、俺はお前に感謝しなければならないようだな。」

ヴァルゼ・アークはローサの髪を撫で始める。

「最後に教えておいてやる。法則に気付いた者はそうはいない。俺と、俺にロストソウルを託した魔帝、ダイダロス、オノリウス、不死鳥王バウンス、死んだルバートだけしかないだろう。」

「何が言いたい？」

羽竜がヴァルゼ・アークを睨み付ける。

「お前達は俺に聞いて、宇宙の真実を知ってしまった。全てを知った者には、法則を破るチャンスがあるという事。これは俺からの礼

だ。よく考えてみるといい。」

羽竜との話を終えると、今度は由利を呼んで何か話している。

「みんな、元の世界に帰るわよ！」

由利の表情が司令官の顔に戻って指示を出した。

「待つて!!」

セイラがヴァルゼ・アークを呼び止める。

「貴方もオノリウスも、私が世界を元に戻せると言っただけ、どうすればいいの？」

「……………自分の中にある力を感じる。そうすれば自ずと道は見えて来る。」

セイラを見るヴァルゼ・アークの目は冷たいものだった。
あまり見せた事のない目。意味するところはわからないが。

「羽竜、蕾斗、あかね、早く帰って来いよ。次の戦いが待っている。」

「そういえば、どうやって帰るんだろう!？」

ヴァルゼ・アークの言葉を聞いて、蕾斗が肝心な事を思い出す。

「感じればいいのか、レジェンダを。」

由利が教えてやる。

そこにヴァルゼ・アークが付け加える。

「時間は限られてる。帰って来れないなんて言っても、誰も助けには来ないからな。」

レリウーリアが消えていなくなった。帰ったのだろう……元の世界へ。

「羽竜君……………」

蕾斗が拳を握りしめる。
あかねも。

「ヴァルゼ・アーク……………何かに気がついたみたいだったけど、何に気がついたんだ……………」

羽竜はトランスミグレーションを肩に担ぎ空を見る。

「……………ん？」

「どうした？羽竜。」

ジヨルジュが羽竜に目をやる。

「あ……………あれ……………」

羽竜が指差す空から、ミドガルズオルムが羽竜達を見ている。

「ミドガルズオルム……！」

ジオルジュも状況が飲み込めたらしい。

「どうする？」

「決まってるだろ……………」

ジオルジュが顔を引き攣らせながら、羽竜に聞く。羽竜の出した答えは……

「逃げるんだよー!」

羽竜の言葉で、全員走りだす。

「あいつ……………蛇退治してたんじゃないのか……………」
「……………っ!?!?」

すっかりヴァルゼ・アークがミドガルズオルムを倒したものだと思
い込んでいたから、予想外もいいところだった。

「友よ……………幸運を祈る……………」

第三十六章 J O K E R i n m y l i f e

「どんなにあがいても、運命を変える事は出来ない」ヴァルゼ・アークはそう言った。

羽竜とのやり取りを終始黙って聞いていて、セイラの心はズタズタだった。

人が生きる上でする行為全て、宇宙の意思だという。そんな話を聞かされて、まともでいられるわけがない。

「私の役目……………」

正直迷っている。

世界を元に戻したいと思う。豊かな自然と人々の笑顔。今の焼けただれた大地ではなく、本来の地球に。

自分がわざわざ世界を再生しなくても、時間はかかるかもしれないが人々の力だけでも、きっと元の姿に戻るだろう。

でも、元に戻っても、人間はまた戦争をし大地を汚す。それも運命なのだから……。

目をつむって知らぬ振りをしてしまえば、それで済んでしまう事なのかもしれない。

「これも決まっている運命なの？」

セイラが悩んで出す答えは、どちらに転んでもそれは既に決められている。

ヴァルゼ・アークを信用したくはないが、彼が嘘をついていたとは思えない。

「セイラ様、お茶を入れてまいりました。」

一人考え事をしていると、メグがお茶を入れて来てくれた。

あれからみんな、リステイの家まで避難した。何をするわけでもないが、ミドガルズオルムはまだ空を覆ったままだ。攻撃の意図がなさそうなのが幸いではあるが。

「ありがとう。」

出されたお茶を両手で口元まで運び、少量ずつ忍び込ませる。

「みんなは？」

「未来の話をしています。特にリステイは興味津々で聴き入ってます。」

千年も未来の世界からやって来たなど、途方もない話だ。

自分もいつか歳を取り、老いて、やがてその生涯を終えるのだ。それでも世界は生き続ける。どこまでも。

「未来かぁ……………夢みたいな話ね。」

「でも面白いですよ。クルマとかいう乗り物があつて、ガソリンっていう食べ物を与えればどこにでも連れていってくれるそうです。

あと、なんて言ったかな？え……………とお……………おおっ！

そくだ！ケイタイとかいうアイテムを使えば、地球の裏にいる知らない誰かと、会話が出来るそうです！」

「アハハ。何それ？変なの。」

メグは嘘は言っていない。多分、羽竜達がメグ達の知識でもわかるように説明をしたのを、そのままセイラにも説明しているだけだ。手振り身振りのおまけつきで。

「とにかく、想像出来ないような事が、羽竜達の世界では当たり前なんです。」

千年……………それだけあれば、この焼け焦げた大地も変わるのだ。

balanサーなんていらないじゃないか。

「ねえ、メグ……………」

「はい？」

「オノリウスもヴァルゼ・アークも、世界のバランスを取るのが私の役目だって言ってたけど……………今回の戦いがなければ、その事に私は死んでも気付かなかった。だったらあまり意味はないんじゃないかと思うの。どう思う？メグ。」

「どう思う？……………と申されましても……………私にはあまりに壮大な話でして……………」

「そうよね……………そう言えば、メグってアーサー王の末裔なんですってね？ジオルジュから聞いたわ。」

「でも悪魔の言ってた事ですし、私自身も初めて知った事実ですから……………あまり気にはしてません。先祖がどうあれ、私は私。セイラ様にお仕えするのが使命でありますから。」

「謙虚なのね。でも、貴女はアーサー王の名に恥じない剣の腕を持つてるじゃない。胸を張りなさい。」

ピントの合わない話だと、メグ本人は思っているのだが、周りはそのうはいかないらしい。

「なんだか悩み過ぎて疲れて来たな、羽竜でもかまって遊んでやるか！」

大きく背伸びをして見せる。

「行こう、メグ！」

「はい。セイラ様。」

持って来たお茶をトレイに乗せ、セイラと羽竜達のところへ行く。

ドアを開けただけで、狭い廊下には羽竜の声が聞こえてくる。

その声を頼りに歩かなければならないほど、リステイの家は広い。

羽竜達がいる部屋の前まで来た時、不気味な気配を感じた。

「……………メグ！」

後ろを向いてメグを見ると、黙って頷く。メグも同じ気配を感じているらしい。

「外から感じます。」

セイラが外へ駆けて行く。

「セイラ様！」

お茶を乗せたトレイを抱えたままで、セイラの後を追う。

駆け出した直後、後ろが騒がしくなった。振り返る余裕はないが、羽竜達も気配に気付いて出て来たらしい。

「やっぱり貴方だったのね……………ダイダロス。」

真っ先に外へ出たセイラが気配の主の名を呼んだ。

「覚えていただいていたとは光栄です、プリンセス。」

胸に手を当て会釈する。彼なりにセイラに誠意を見せたのだろうが、どこか馬鹿にされているようで腹が立つ。

「何しに来やがった！」

羽竜が反応しないトランスミグレーションを構えて、開口一番敵意を剥き出しにする。

「これはご挨拶ですね、終焉。」

「お前も終焉の源らしいじゃねーか。知ってるんだぜ？」

「フフフ……………魔帝にお聞きになりましたか。」

「ああ。お前の目的もな！宇宙になろうとしてるらしいじゃねーか？でも残念だけど、インフィニティ・ドライブはうちの奮斗が持つてる。諦めて大人しく帰れ！」

「なるほど、そこまで聞いているのなら話が早くて助かります。私は私利私欲の為にインフィニティ・ドライブを使いたいわけではありません。人が持つ運命を自由にしてあげただけなのです。ですが、宇宙というのは生き物です。人が争い、憎み、苦しみ、悲しみ、絶望するオーラを糧として生きる生命体故、一度殺してしまうか、あるいは共存するか。魔帝は前者を選びました。つまり、無に還し罪の意識を持った新たな宇宙が生まれる事を望んでいるのです。そして私は、宇宙を吸収して、私自身が宇宙になる事を望んでいます。大いなる宇宙となり、人が運命に絶望しない世界を創りたい。もちろん、インフィニティ・ドライブは不可欠ですが。」

ちらりと奮斗を見る。

「お前らが何をしようと知った事じゃないけど、奮斗を殺したとしてもインフィニティ・ドライブはお前のものにはならない。そうなんだろ？」

「ええ。知ってますとも。」

「だったらこれ以上やる事は何も無いはずだ！」

「いいえ、終焉。私はなんとしてもインフィニティ・ドライブを手に入れて見せます。今日はその事だけを伝えに来ました。もう一つ付け加えれば、同じ時代に終焉の源は二人はいらない。貴方と私、最後まで生きていた方が真の終焉の源としていられるのです。」

「だったら今ここでケリをつけようか？」

「フフ。学習しませんね。言ったはずです、私の前でトランスミグレーションは無力。インフィニティ・ドライブを使いこなせない友

人を頼るわけにもいかない。今の貴方達では、リングに上がる資格さえ無いのですよ。」

インフィニティ・ドライブを使えば、羽竜の心に反応しないトランスミグレーションでもダイダロスに勝てる可能性はある。ヴァルゼ・アークも言っていた。

悔しいが、今の蓄斗ではそれは見込めない。

構えていたトランスミグレーションを振り下ろし、怒りを大地にぶつける。

「フツ……………それでいいのです。元の時代で待ってますよ。私と貴方とヴァルゼ・アーク……………勝者は一人で十分。」

羽竜は何も言えない自分にイラつく。

。

「俺達が戦う事も運命……………宇宙の意思なのか？」

「お聞きになったのでしょうか？人には法則があります。その法則を破る事はおろか、知る事すら本来は叶わない。魔帝ヴァルゼ・アークは、悪魔は天使に勝てないという法則を見事破りました。私も、不死鳥族は絶滅しない種族であるという法則を破り、運命の鎖から解き放たれました。次は貴方の番です。ご自分の法則を探しなさい。それを破らない限り、運命の鎖から解き放たれる事はありません。」

羽竜にはダイダロスの思惑がわからない。ヴァルゼ・アークの思惑も。その気になれば今すぐにも羽竜を倒せるはずなのに、何故かそれを拒む。

いつも先送りにする理由はあるのだろうか……………。

「前座は終わりです。元の時代に帰って来た時、本当の戦いは始まるのです。では、また………」

ダイダロスが姿を消してゆく。

元の時代に帰ったのだ。それは誰にもわかった。

齒を食いしばり、己の不甲斐無さを恥じる少年達は、あまりに強大な現実になだ打ちのめされるしかなかった。

第三十七章 遙か未来へ

「本当にいいの？」

申し訳なさそうにあかねがしているのには訳がある。

ダイダロスが去った後、羽竜と蕾斗と話し合い、自分達の世界に帰ろうという事になった。

ただ心残りは、一向に消える気配のないミドガルズオルムを残して帰らねばならない事。

「いいのよ。貴女達にはやらなきゃいけない事があるでしょ？魔帝と、ダイダロスとの戦いが。こっちの事はこっちで片付けるから、心置きなく自分達の世界に帰りなさい。」

後ろ髪引かれるあかねを安心させるようにと、セイラは笑顔を崩さない。本音は淋しさで胸が締め付けられる思いでいる。

「でもよ、ヴァルゼ・アークでさえ倒せなかったモンスターだぜ？一筋縄ではいかないだろ。」

心残りなのは羽竜も一緒だ。

「心配する事はないだろう。羽竜達の世界にはミドガルズオルムはいないんだろう？という事は、君達の過去であるこの世界でのミドガルズオルムもなんらかの条件が揃えば、消えていなくなるだろ。」

リスティが軽く持論を披露する。

「でも、千年前にミドガルズオルムが現れたなんて聞いた事ないし

……僕達とこの世界とが本当に繋がってるかは怪しいよ。実際、
ジオルジュもリステイもオノリウスを知ってるはずなのに、知らな
かったわけだし。」

「蕾斗、我々の世界とお前達の世界は繋がっている。」

否定的な蕾斗に更に否定的にジオルジュが意見する。

「どうしてそう思うの？」

ジオルジュの横にいたメグが聞き返す。

「繋がってるわ。だって、時間を越えて私達は出会えたんだもの。
時間の繋がりがなければこんな奇跡は起きないわ。」

ジオルジュの言わんとしてる事はセイラにもわかった。
オノリウスの持つインフィニティ・ドライブによって捻曲げられた
歴史とはいえ、所詮は人為的なもの。それに、繋がりがあるからこ
そ出会えたという考え方は正しい。

「ほら、わかったなら早く行きなさい。魔帝とダイダロスを倒して
もつとずっと先の未来に繋げて！」

「セイラ……」

知らぬ間にセイラの頬を涙が濡らす。別れ間際、皮肉でも言ってい
ようかと思っていた羽竜にも、同じ色の同じ想いが浮かぶ。

「やだ、羽竜君まで……」

あかねが顔を手で覆って、啜り泣く。

「短い間だったけど、色々楽しかった。ありがとう。忘れないから、未来の話。」

メグは必死に涙を堪える。

三人が帰るまでは泣けないと意地を張っているのだ。

「羽竜、蕾斗、あかね、千年後に君達が生まれるまで、私達は精一杯この世界を守るよ。例えば人々が争いを繰り返そうとも、私達の意志を継ぐ者達がいる事を忘れないでほしい。」

天界で会ったリスティは変な奴だったが、今のリスティは頼もしい。

「忘れない。僕達も約束するよ、みんなが想ったこの星を絶対にヴアルゼ・アークやダイダロスの好きにはさせない！」

「こいつ、エラソーにしゃがって！お前はインフィニティ・ドライブの使い方の勉強が先だろ！」

羽竜は照れを隠すように、たくましさを見せた蕾斗に絡み始める。

「この世界はお前達によって守られた。お前達がいなければ、もっと酷い有様だったと思う。……………もしも……………もしも生まれ変わるなんて事が出来るのなら、またお前達に会いたい。そして、今度はお前達の力になりたい。」

「ジョルジュ……………」

ジョルジュの言葉に蕾斗も堪えていた想いを流す。

「けっ、カッコつけやがって！んな心配しなくても、助けてもらってるよ！まあ色々小うるさいけどな！」

羽竜が蕾斗とあかねにウインクすると、二人も笑顔で答える。

ジョルジュにはなんの事やらさっぱりだが、時間は早々に訪れる。

帰る意思を固めた三人の意識が、媒介となっているレジェンダへと通じ、身体が透けて来る。

「世話になったな、みんな！」

羽竜が拳を突き出してエールを送る。

「それは私達のセリフよ。羽竜、負けたら許さないからね！私の家臣なんだから、絶対勝ちなさい！」

セイラも羽竜に小さい拳を突き出してエールを送る。

皮肉も言わず、羽竜達は自分達の世界へ帰って行った。

「行っちゃったわね……」

「淋しいですね。」

セイラにメグも賛同する。

「あれだけ賑やかな男だからな、淋しくもなる。」

珍しく素直に表現するジョルジュがいる。

「繋ごう、彼らの時代まで……………」

羽竜がいなくなった淋しさを、希望に変える言葉でリステイが想いを現した。

その言葉に、それぞれがそれぞれの想いを決意したのだった。

羽竜達が未来へ帰って、数日が過ぎた。ミドガルズオルムはまだ太陽の光を遮っている。

「お考え直し下さい！セイラ様！」

「くどいわよ！ジョルジュ！」

あれから古い書物を漁り、ミドガルズオルムの事を調べたが何一つわからなかった。

そしてセイラが出した結論は、世界再生を行えば消えてしまうんじゃないかという事だった。

そう思うのには訳がある。このところ、自分の中で得体の知れない気持ちが留まっているのだ。それが何かはわかっている。ヴァルゼ・アークの言っていたセイラの『力』だ。芽生えた『力』は、今セイラに道を示している。その先にある自分の姿も。

嫌な予感がジョルジュを刺激し、セイラを止めているのだ。

「ジョルジュ、世界を再生に導けば、ミドガルズオルムもいなくなると思うの。」

「しかし！」

「聞いて！ジョルジュがどうして必死で止めるのか、私にはわかってる。世界再生を行えば、おそらく私は消えてしまうでしょう。でも私はやらなきゃいけないのよ！」

「何故です！？」

「未だ苦しみと絶望から解放されない人々と……遠い未来の友達のために！」

「セイラ様……………」

「私にしか出来ない事は私がやるわ！お願い！わかって、ジョルジュ！」

言い出したら後には引かないセイラの事、これ以上は何を言っても無駄。まして今回は気まぐれではなく、固い決意あつての事。引く

わけがない。

「セイラ様、本気でおっしゃってるんですか？」

「メグ……聞いてたの？」

ジオルジュとの会話は聞いていた。メグとてセイラの行動は認めるわけにはいかない。

薄々感づいてはいた。世界再生はセイラの命と引き換えなんだと。だからあの時、ヴァルゼ・アークはセイラを冷たい目で睨んだのだ。その覚悟を決めると。運命なのだと。なら無駄とわかってても抗ってみたい。

「セイラ様、貴女は国を統率する王なのですよ？ 貴女がいなくては民が迷います！」

「その事だけど、万が一私がいなくなるような時は………いえ、私は確実にいなくなるでしょう。その時はメグ、貴女が国王となり民を導きなさい。」

「わ、私が……？ 出来ません。私には王たる資格など………」

「貴女はアーサー王の末裔。それだけで充分よ。」

「無理です！」

セイラにすぎた瞬間、メグの左の頬がぶたれた。

「セイラ………様？」

「しっかりなさい！貴女も私にとっては大切な友達なのよ？わかってちょうだい、私の気持ち。決意を……………これ以上困らせないで……………外ならぬ貴女だから託したいの、私の全てを。」

真つすぐメグを見て離さない。

メグはジョルジュを見て、彼の意味を確かめる。

ジョルジュは黙ったまま立ち尽くしている。

答えは出ている。納得するしないは問題にはならない。

「……………わかりました。セイラ様の想い、このメグ・ベルウッドしかと受け止めました。」

こうしなければおさまらなかっただろう。苦汁の思いだったが、他に道はなかった。

「ありがとう、メグ。貴女ならきっといい国王になれるわ。ジョルジュも、いいわね？」

「否定の返事は聞きますまい？」

二人に想いを託した事を確認すると、リスティの家を出る。

「お一人で行くおつもりですか？」

「リスティ……………」

リスティが立っていた。リスティもまた感じていた。セイラが役目を終えた時、この世にはいない事を。

「ええ、一人で行くわ。私は旅に出るのよ。遙か未来まで。死にに

行くわけじゃないわ。」

「……なら安心しました。貴女が帰るその日まで、ジョルジュとメグが国を守ってくれるでしょう。僭越せんえつながら、わたくしめも彼らの力になりたいと思います。ですから、どうぞ心置きなく旅立って下さい。」

「リスティ……………ありがとう。」

もう反対する者はいない。

「それじゃ、後は頼んだわよ！」

手を大きく振ると、そのままジョルジュ達を振り向かず旅立って行った。

「フツ……………今生の別れとは思えん挨拶だな。」

軽く振る舞ったセイラの気持ちはわかっている。だからこそ、ジョルジュも笑って見送ってやる。

「これでよかったのかしら…………？」

「いいんですよ、メグ。セイラ様の想いを忘れなければ。」

リスティがメグを励ます。

三人はセイラが見えなくなった後も、いつまでも眺めていた。彼女が遥か未来まで辿り着けるように…………。

第三十八章　それぞれの道

羽竜、蕾斗、あかね、未来そっちはどうですか？もう魔帝やダイダロスとの戦いは始まっているのでしょうか？

あなたが未来へ帰った後、セイラ様は世界再生を行う為に旅立ちました。そしてそれは確実に行われました。

ミドガルズオルムはどこかへ消え去り、焼けた大地に草花が生えて、再び太陽が姿を現しました。

ジオルジュもまた、東洋へと旅に出ました。なんでも東洋には凄腕の剣士がいると聞いたとかで。彼は戦士として生きる事を選んだのです。死に場所を見つけたと言ってたっけ。

（男とは理解出来ない生き物です。）

エアナイトの力は、きつと伝えられていくものだと言ってます。

それからリステイですが、セイラ様無き後の国を復興させる為に、色々奮闘してます。

元々頭がいいみたいで、復興組織のリーダーとしてみんなから慕われています。

私はと言うと、セイラ様から王位を託され国王となりました。

初めは誰もついて来てくれないんじゃないかと不安でしたが、セイラ様が帰るまでの代理として納得させました。

これから色々大変だけど、あなたたちの時代まで未来を繋ぐと誓ったし、頑張って王様やり抜きます！

どうかあなたたちも未来を繋げて下さい。子供、孫、さらにその先まで。

祈りを込めて……

メグ・ベルウッド

「よしっ！オツケー！」

「メグ様、一体何をしたためたのですか？」

ドレスに身を包んだメグに、召し使いの女が声をかける。

「ふふ。遠い遠い友人達への手紙よ。」

「手紙ならばこのようなところに入れるのは不自然かと……」

メグが手紙を入れようとしている場所は、バベルの跡地に立てた石碑の中だ。

石碑の後ろには台座がある。

そこにカルブリヌス………エクスカリバーを封印する為の台座だ。

「いいのよ、ここで。ここが私達の思い出の場所になるんだから。」

死闘を繰り広げた場所が思い出とは、せつない気もする。

「メグ様、さあ剣を。」

側近に促されてカルブリヌスを台座に突き立てる。

「ありがとう、カルブリヌス。」

愛用した剣を台座に突き立て、二度と抜けぬように固めてしまふ。

「よろしかったのですか？」

召し使いが名残惜しくカルブリヌスを見ていたメグを氣遣う。

「いいのよ。もう剣は握らないって決めたの。戦士には戻らないわ。」

「それなら構いませんが……………さ、もう行きましょう。大臣が呼びです。」

フランシア国の大臣が、セイラがいなくなった事実を受け止め、メグに協力している。

意外と物分かりのいい大臣で、メグが国王としてやれてるのには、彼の協力は欠かせない。

「先に行つて。すぐに行くから。」

そうメグに言われ、召し使い達は馬車へと戻る。

「羽竜……………蕾斗……………あかね……………ジオルジュ……………そしてセイラ様……………見てて、誰にも負けない立派な王になってみせるから！」

かつては剣を握っていた拳。今は希望を握っている拳を、降り注ぐような太陽に突き出した。

終章

「どわっ！！」

過去から戻った瞬間、壁にぶつかる。レジェンダのマントの中にあつた小さな銀河から吹き飛ばされたのだ。頭を撫でながら羽竜が銀河の方を何気なく見ると、

「うわっ！！」

蕾斗が飛んで来て、また壁に頭をぶつける。

「イテテ……………蕾斗てめえ……………」

「きゃあっ！！」

羽竜が蕾斗に文句を言う前に、今度はあかねが飛んで来た。結果はもちろん、蕾斗にぶつかり、蕾斗がまた羽竜にぶつかる有様だ。

「勘弁してくれよ……………」

三回も壁と仲良くなれば、文句を言う気にもなくなるらしい。

いつの間にか、慣れ親しんだ匂いがしてくる。羽竜の部屋の匂いだ。蕾斗にもあかねにとっても懐かしい落ち着く匂い。

「……………帰って来たんだね。」

羽竜にぶつかったまま壁にもたれていた蕾斗が呟いた。

「うん。帰って来た。」

あかねにも実感が湧いて来る。

無事帰って来れた嬉しさと、心残りを置いたまま帰って来てしまった複雑さが、三人の胸を締め付ける。

「みんな、ちゃんとミドガルズオルム、なんとかしたかなあ。」

「大丈夫だろ。あいつらなら俺達が心配しなくてもなんとかするはずさ。」

蕾斗の不安なんか、羽竜にとってみれば些細な事。

セイラ達を信じているから、不安になる必要は何もない。

「もう会えないんだね……みんなと……」

「……………千年も前の奴らだぜ？会いたくったって会えねーよ。」

淋しさをあらわにするあかねに対して、わざと憎まれ口を叩いて見せるのは、羽竜なりの淋しさの紛らわせ方。

あかねも蕾斗も、それを知ってるから何も言わない。

むしろ、羽竜にそう言ってもらった方が引きずらないで済む。

歴史の教科書にも、有名な博物館なんかにも決して載る事のない歴史を経験して来た。

本当の地球の歴史。隠されたとも違う。人々が記憶から消し去った真実。

嫌な事から逃れる為ではなく、未来に向かって歩いて行く為に忘れなければならぬ事だったのか……………あるいは、意図的に消さ

れたのか…………… 本当の真実は誰にもわからない。

「ところで、レジェンダはどうなるんだろ？」

蕾斗の視線は、過去へのゲートとなっていた銀河を見るが、銀河は音も無く消えて行き、床の上には無造作にレジェンダのマントだけが落ちた。

「元々肉体は持ってなかったし役目を終えたんだ、眠らせてやろうぜ。千年以上も存在し続けて疲れてたと思うしな。」

「そんな事言ってるけど、なんだかんだ言って一番淋しいのは羽竜君なんじゃない？家族でしょ？」

そうやってあかねに言われればぐっと込み上げるものがある。

「ヘン！あんなお化けみたいな奴、いなくなっでせいでいいぜ！」

「強がっちゃって。さっきと言ってる事、矛盾してるじゃん。」

「うっせー！」

冷やかす蕾斗の首に腕を回して絡む。いつも以上に……。

「お化けみたいで悪かったな。」

「きゃあっ！……！」

男の声とあかねの叫ぶ声を聞いて、蕾斗と二人でそっちを見る。あかねは顔を覆っている。

そして、声を出した男は……

「ジョ……………ジョルジュー!!」

なんと、そこにはジョルジュがいる。羽竜も蕾斗も口をあんぐりと開けたままだ。

「おまえ……………一体何が……………?」

羽竜には何がなんだか理解出来ない。間違いなくジョルジュ・シャリアンだ。

「私にも何がなんだかわからん。気が付けば肉体と共にここにいた。」

「こんの……………バカヤロウ!!心配かけやがって!!」

気持ちを抑え切れず、蕾斗にしたようにジョルジュの首に腕を回して喜びを現す。

「は、羽竜!やめないか!」

「うるせー!お前には言いたい事がたくさんあるんだよ!」

羽竜の手加減無しの歓迎にいささか参ってしまうが、ジョルジュ自身も嬉しくて無理に解く真似はしない。

「よし、僕も参加するよ!」

いつもは羽竜にやられてばかりの蕾斗も、じゃれ合う二人に飛び付

いて揉みくちやしてやる。

「ちょ……………三人共いい加減にして！」

「何怒ってんだよ？」

一人テンションの違うあかねに羽竜も意味がわからない。でも、それもすぐに理由がわかった。

「ジョルジュを見てよ！！信じられない！変態！！！！」

真っ赤に顔を染めてこっちを見ないように手をバタバタさせてる。何事かと思い羽竜と蕾斗が顔を見合わせ、ジョルジュをまじまじと眺める。そしてようやく、あかねの言ってる意味を理解した。

裸なのだ。何も着てない。生まれたまんまの姿でそこにいる。

「ぷっ！」

「早く言ってよ、吉澤さん！アハハハ！」

吹き出す羽竜につられて蕾斗が笑い、何故かジョルジュも笑う。

「これはレディの前で失礼だったな。」

「何済ましてんのよ！早くなんか巻きなさい！」

あかねに急かされ、落ちていたマントを腰に巻く。

「んもう！デリカシーが無いのは羽竜君だけかと思ってたのに！信じられない！」

「な、なんだとっ！？俺だってデリカシーくらいはある！」

怒るのももつともな話なのだが、矛先がまさか自分に来るとはさすがの羽竜も予想外だったろう。

「もう大丈夫だ。悪かったな、あかね。」

本当に悪いと思ってるかは疑わしいが、とりあえずはあかねが怒る要素は排除されたようだ。

「それより、お前達魔導書はどうした？」

何も知らないジョルジュが、肝心の事を聞く。

「それがよ……………」

「なるほど。オノリウス様も手の込んだ事をなさったものだ。」

過去での出来事をジョルジュに話した。セイラの事、メグの事、リステイが結構いい奴だった事。ミドガルズオルムを残して帰って来た事も。羽竜が終焉の源である事、インフィニティ・ドライブの正体が魔導である事も全部。

今、目の前にいるジョルジュの過去とは、やはり違いはあるらしい。

「だが、お前らが無事で戻って来ただけでも良しとしよう。」

「なぐにが『良しとしよう』だ。インフィニティ・ドライブは蕾斗が持つてからいいけどよ、ヴァルゼ・アークとかダイダロスに本気の宣戦布告されたんだぜ？ダイダロスの前ではトランスミグレーションは使えねーし、ヴァルゼ・アークだって実力では俺より上だろう？頼みの綱のインフィニティ・ドライブも蕾斗は使いこなせない。お先真っ暗じゃないか。」

「羽竜、まさかここまで来て戦いを放棄するわけじゃなかるうな？」

「んな事しねーよ。ただ、なんかいい方法がないかと思つてよ。」

「方法なんて考える必要があるのか？」

ジョルジュらしくない言葉が出る。いつもなら前向きに考えろとか、弱音を吐くとか言つたろくに。

「私は……………」

言いかけて一旦唾を飲み込む。

「私は、お前達とならどんな困難にも打ち勝てると思っている。方法を探るより、力を合わせて戦えば勝てる。そう信じている………違うか？」

「お前が言うなよ、最初からそのつもりだ！なんせ、こっちはインフィニティ・ドライブに加えて、エアナイトが二人もいるんだからな！」

羽竜が見せたガッツポーズが、この場に合ってるかどうかはこの際突っ込まずにおこう。

蕾斗、あかね、ジョルジユの表情を見れば、羽竜のやる気は伝わったとわかる。

「そういえば、吉澤さんがどうしてエアナイトの力を持つてるかは、謎のままだったね。」

「結局、『あっち』のジョルジユもわからなかったみたいだし………別にもう気にしてないからいいんだけど。」

蕾斗とあかねの会話を聞いて、ジョルジユが何か言いかけたが思い留まる。

戦いはまだ続いている。永きにわたる戦いを終わらすのは、終焉の源の羽竜か？もう一人の終焉の源、ダイダロスか？それとも、神でさえ恐れる魔帝……ヴァルゼ・アークか？

勝利者は常に一人。

ダイダロスは都会の夜景を、空から眺めていた。

「人の革新は素晴らしい。しかしながら、どんな力を持っても、人は争わずにはいられない悲しき生き物……………」

不死鳥族の身体を持つダイダロスが翼を広げ、夜の闇へ消えて行く。

「俺のやろつとしてゐる事はわかつただろつ？それでも後悔はしないのだな？」

ヴァルゼ・アークの前に、レリウーリアの女性達が平伏している。

問いに答えたのはもちろん、仲矢由利。レリウーリアの司令官だ。

「ヴァルゼ・アーク様が何をなさろうとも、私達の忠誠に変わりはありません。いえ、それどころか、前にも増して忠誠を誓う心があります。」

「そうか……………フツ、つくづく物好きな女達だ。いいだろう、最後の戦いへ着いて来るがいい。我が愛しき闇の下撲達。」

三度目の満月は、闇の住人達を照らしていた。

インフィニティ・ドライブ……………手に入れる方法が一つだけ
ある。

終章（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。交流サイトの秘密基地のほうに、最終バージョンのイラスト更新中です。少しは上達したと思うので、ぜひご覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089d/>

魔導神話 インフィニティ ドライブ ~ 第三部 プリンセスセイラ ~

2010年10月9日06時42分発行